

*I met the girl under full-bloomed cherry blossoms,
and my fate has begun to change.*



【小説】

四月は君の嘘

6人のエチュード

Yui Tokinmi

時海結以

Naoshi Arakawa

原作 新川直司

【小説】

四月は君の嘘

*I met the girl under full-bloomed cherry blossoms,
and my fate has begun to change.*

6人のエチュード

Yui Tokiumi

時海結以

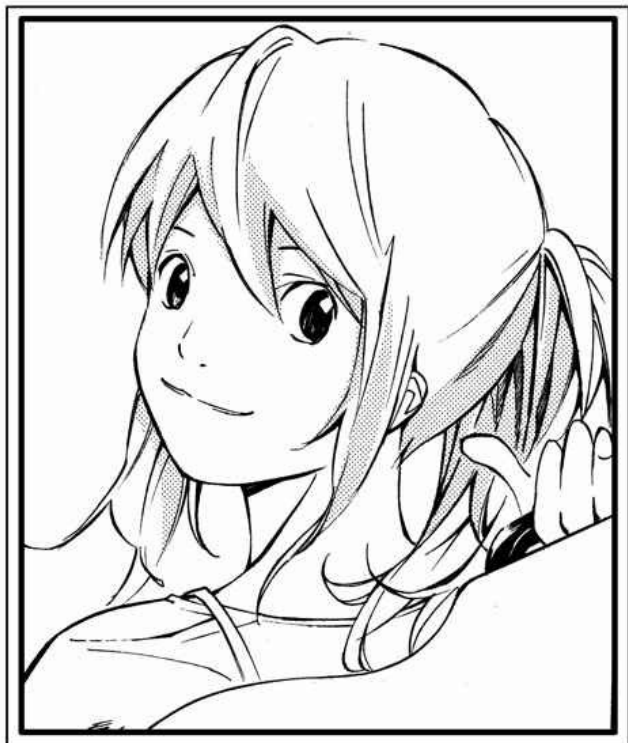
Naoshi Arakawa

原作 新川直司





【小説】
四月は君の嘘
6人のエチュード
CHARACTERS



【^{みや その}宮園かをり】

^{あつとうき}圧倒的な個性を持つヴァイオリニスト。公生 14 ^{さい}歳の春に突然現れ、公生の人生を変えていく。



【^{あい ざ たけ し}相座武士】

ピアニスト。8歳の時に公生と絵見に会い、生涯のライバルとなる。



【^{い がわ え み}井川絵見】

5歳のころ、公生の演奏を聴いて感動し、ピアニストになることを決意した。



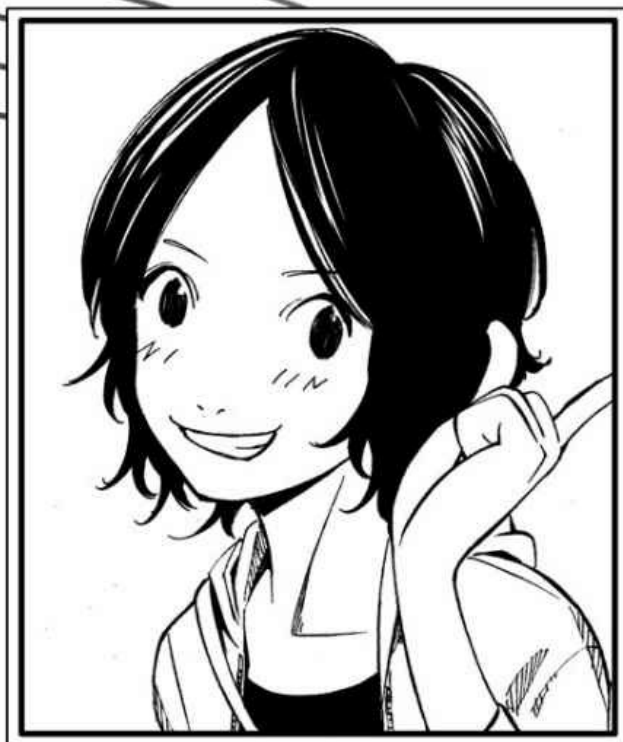
【 有馬公生 】

幼少より数々のコンクールで優勝を総なめにした、元・天才ピアニスト。



【 渡 亮太 】

サッカー部の部長。
公生、椿とは幼いころから友だち。
女子にすごくモテる。



【 澤部 椿 】

公生の隣の家に住む、幼なじみ。
ソフトボール部の主砲。



【小説】
四月は君の嘘
6人のエチュード

CONTENTS

プロローグ

君は弱虫だ

宮園かをり

#1

有馬はヒーローだ

相座武士

#2

有馬は嘘つきだ

井川絵見

#3

公生は優しすぎる

澤部椿

#4

公生は男なんだ

渡亮太

エピローグ

君はすごい

宮園かをり

プロローグ



君は弱虫だ

みやぞの
宮園かをり

夏休み、私たちのほかに、誰^{だれ}もいない中学校。
音楽室のガラス窓は全開で、はるかかなた

には入道雲が見える。

住宅街の屋根ごしに見える、濃^こい緑色をした木立から、絶え間ない蟬^{せみ}の声が聞こえてくる。

エアコンの使えない室内で、首を振^ふっている扇風機^{せんふうき}のぬるい風を浴びながら、私は左肩^{げん}にヴァイオリンを載^のせ、弓をかまえて、弦を鳴らした。

私が譜面台^{ふめんたい}に広げている楽譜は、フリッツ・クライスラー作曲「愛の悲しみ」だ。

ミラーミーミー、ミファミレツミツファー。

ソーレーレー、レミレドツレツミー。

どこかもの悲しく、ノスタルジックなメロディーを、私のヴァイオリンがせつなく歌う。

そのメロディーに遅^{おく}れまいと、グランドピアノにむかった君は、タン、と左手で一オク

ターブの幅の同じ音を弾いてから、ター、
ター、と右手で和音を二回弾く。三拍子の
リズムだ。

タン、ター、ター。タン、ター、ター。
(そう、その調子！)

うんと心地よいメロディーになれって、私
が思いっきり、ヴァイオリンを響かせる……
と？

むー、なぜか、テンポが合わない。

私のヴァイオリンと、君のピアノ、それぞれ
がマイペース。

「とにかく、もう一回！　初めからね。少し
テンポ上げてスタートして、リタルダンド

(だんだん遅くする) が遅くなりすぎないよ
う、やってみよ。タン、タツ、タツ、タン、
タツ、タツ、このくらいで」

私は君にそう伝え、また右手の弓をかまえる。
弓が弦に触れると、全身に弦の奏でる音色
が響いてくる。君のピアノが鳴りはじめ

た。

けれど、どうしても私たちの呼吸が合わない。

^{し だい}
次第にテンポがずれてくる。

君があせって次の音を追いかけて、私は今の
^お
音を惜しんで引きのばし、ぴたりと重なるは
^{き よ り}
ずの私たちの音がずれて発せられ、心の距離
^{はな}
も離れてゆくかのよう。

私はヴァイオリンを弾くのを止めた。
「こんなんじゃダメ。初めからやりなおそう」

ピアノにむきあったまま、君は、そう言う
私に、無言でうなずいた。

^{うしな}
（君は何よりも大切な人を喪い、その人と二人で生みだした音も失った。）

君は弱い。弱虫だ。

どうして、大切な人との想い出に、背をむ
^{おも} ^で

けてるんだろ。

心の耳をふさいでるんだろ。

.....私は、君は本当は弱虫じゃないって、

^{しら}報^しせたいよ。

みんなに、何よりも君自身に)

「あれえ？ 四分の一^{ぱく}拍ずれてるし。もう一回、最初から！」

今度は君が、勢いづく私についてこられな
い。ピアノの音が、ヴァイオリンの音に^{おく}遅
れ、転びそうになりながら引きずられてく
る。

「やりなおし！」

「あ一つ、もう、初めからね」



夏休み	9:15~	卒業式
一日	通信簿	



「ダメダメ、転調のところからもう一回ね！」

「どうして、そこではらばらになっちゃうのかなあ。もう一回いくよ」

たった三分半の曲の、最後までたどり着かず、何度もやりなおして、私たちは汗だくになっていた。

「君のピアノ、私に合わせる気がないでしょ」

肩からヴァイオリンを下ろし、私がちょっぴりいじけると、君は困ったように小さく笑^えみを作った。

「ヴァイオリンが、自由すぎるんだよ。ついてくだけで必死」

「あら、私が悪いってこと？」

「いいや、君はいつも自由な人だなって、言っただけさ。できれば、目で合図してくれないかな、この音、音符^{おんぷ}よりも長めにねば

るよって」

「ねばるっていうか、気持ちよく響^{ひび}かせていただけじゃない。合図^{あずな}なんて待ってたら、よけい^で出遅^{おく}れるよ。私をもっとよく見て。見つめて。そうすれば、わかる！」

「そんな、わかんないよ……」

「わかんないって何？ いい、こうやって、見るの」

私は君にセマッタ。おでことおでこがくっつき^{ひとみ}そうなくらい近づいて、瞳を見つめる。
^{くろぶち}黒縁メガネのレンズの奥、君の瞳に私が^{うつ}映る。

「か、顔……近、いっ」

君はたじろいでのけぞった。

「このくらい、近づかなきゃ」

「マジで……？」

「たぶん。さあ、いくよ！」

私は君の横顔を見つめ、君は横目で私をうかがい、呼吸を合わせて、最初の音を――。

「おー、やってるやってる」

「アイス食べようよ、かをちゃん、公生」
こうせい

がらっ、と音楽室の後ろの扉が開いた。レ

ぶくろ

わたりりよう た

さわ べ

ジ袋を手に現れたのは、渡 亮太君と、澤部

つばき

椿ちゃんだった。

渡君がレジ袋からアイスバーを一本取りだ

っ

し、マイクみたいに突きつけてくる。

「初めてのコンサート共演はいかがですか？

宮園かをりちゃん」

しゅさいしやしうせん

「すごく光栄です！ 主催者推薦で、ガラ

コンサート出演の栄誉」
えい よ

私が気取って答えると、渡君がほほえんだ。

「かをりちゃんが選ばれるのも当然さ。君な

さ

ら、ステージに咲くバラの花になるよ」

かつこいいなあ、やっぱり渡君って。学

すみ や ちゅうがつこう

年.....いいえ、我が墨谷 中学校一のモテ男

しょうごう

の称号はダテじゃない。

「オレがピアノ^ひ弾けたらよかったのにつて、
かをりちゃんのヴァイオリン弾く姿見て、
思った。この有馬公生^{ありま}が君とステージに立つ
なんてき、オレでなく」

「僕^{ぼく}はほかに取り柄^とがないしね」
いじけるでもなく、おだやかに答える君
に、椿ちゃんがアイスバーをさしだす。

「溶^とけちゃうよ。公生はまたミルク味？」
受け取りながら、君はいすから立ちあが
り、ピアノから離^{はな}れた。

「ありがと、椿」

渡君、私、すこし開けて君、そして椿ちゃん
の順で、音楽室の教壇^{きょうだん}に並んで座^{すわ}り、ア
イスバーを食べることにする。

「ミルク味が好きなんだ」

私が左隣^{ひだりとなり}に座る君に尋^{たず}ねる。

「うん」

パッケージを破るため、アイスバーに目をやったまま、君はうなずいた。

「知らなかった。なんとなく、チョコ味のイメージ」

「僕が？　　どういう理由？」

「だから、なんとなく」

私は知らなかったけど、椿ちゃんは知っていた。君はミルク味が好きだつて。君とずっ

いっしょ

と一緒にいたんだよね、椿ちゃんつて。

と

「溶けちゃうから、先食べて」

私は、食べずに待っている君をうながす。

「どうも」

短く応じて、お先に、と君は、しゃくしゃく、アイスバーをリズムカルにかじりだした。

「私は、チョコ好きだよ」と、椿ちゃんが

ふくろ

袋から取りだす。

「私も私も」と、私もチョコ味を選んだ。

「やっぱりチョコよね一つ」

私たちはうなずき合う。

「なんで公生ってミルクなのかなあ、昔からなのよね」

椿ちゃんがつぶやく。私は君を横目を見た。

「いろいろ試してみるとか、したら？　せっかく椿ちゃんが全種類買ってきたのに……つても、三種類だけど」

ぼく

「って、椿が僕に渡してくれたよ？」

「人のせいにする気？」

「ううん。どっちにしろ、選ぶならミルクだよ。好きなものは好きなんだ」

と、君はさらりと受け流す。

ごうじょう

（本当に君は、マイペースで、強情よね。

他人に逆らいもしないけど、本音のところ

ゆず

では、自分の意見を全然譲らない。

君は、弱い。他人になかなか逆らえない。

しん

だけど、弱そうでいて、芯は強い。自分の考えをずっと保っている。

君自身は気づいてないかもしれないけど。
私はそう思うよ、ホントは、君は強いっ
て)

「かをりちゃんはチョコ味が好きなんだね、
おぼ憶えとく。オレもチョコ派」

びみよーな会話を、渡君がフォローしてく
れる。

「つて、あーっ、ソーダ味しか残ってない！
ま、オレ、ソーダも好きだけど」

「渡、どれでもいいんじゃない。圭子ちゃん
けい こがミルクって言ったときは、オレもミルクっ
て」

「そりゃ、どれかは嫌きらい、なんてアイス作っ
てる人に失礼だろ」

くったくなく笑う渡君は本当にかっこよく
て、気が利きいて、親切な人。椿ちゃんも、と
てもいい人。友だちに恵めぐまれて、私は幸せだ
と思う。

「で、コンサートって、また、オレたち、聴^ききに行っていていいわけ？」

にこっ、として、渡君が私を見つめた。

えがお

他人を安心させる笑顔。たくさんの人が、渡君を好きになるのが、わかる気がする。私だって好き。椿ちゃんも好き。

「もちろん。来てね、渡君、椿ちゃん」

「ガラコンサートって、スポーツのエキシビ^きションマツチみたいなのかって、オレが訊いたら、百点って答えたよな、かをりちゃん」
「フィギュアスケートのエキシビションみたいな？ おまけのやつ？」

たず

椿ちゃんが尋ねるので、私は説明する。

きんちょう

「そう。みんな、採点される緊張から解放されて、自分の好きなように演奏するの。あえて、失敗を恐^{おそ}れず、コンクールの課題曲より難しい曲を弾^ひく人も多いのよ。絶好のアピール・チャンスだもの、自分なりの表現は

こうなんだって。ステージが華^{はな}やいだ雰^{ふん}囲^い気^きになる！」

コンクールでは、譜面^{ふめん}の指示とおりの、機械のように正確な演奏が評価される。自己流は、どんなに観客が感動しようが、作曲者の指示に従わず勝手に弾いたとして、減点される。

私はその自己流の方。

だから、コンクールの成績^{すいせん}じゃなく、推薦^{すいせん}枠^{わく}で滑^{すべ}りこみ出演。

（でも、いいの。

私は私の音を、届けたい。響^{ひび}かせたい。聴^きいた人の心に残したい。

この夏、君とふたりでなら、それができる。

私は、思いっきり弾いて、君と笑い合いたい）

#1



有馬^{ありま}はヒーローだ

相座^{あいざ}武士^{たけし}

とうきょう と

六月、東京都西部、区ではなくぎりぎり市という街の外れ。緑が多くて、小さな庭に

しばふ

は芝生があつて、どの家にも高級車が一台ガ
レージに駐ま^とっている、住宅街。

いつけんや

その中にある一軒家。

「武士、やる気あるのかあ？」

あきれ果てたように、投げやりな言いかた

たかやなぎあきら

で、高柳明先生はピアノの後ろのソファに

すわ

どきつと音を立てて座り、頭の後ろで手を組

せいだい

んだ。盛大にため息をつく。

「そんな、てきと一な、やっつけ仕事の練習
でいいと思つてんのか」

(.....ちっ、わかつちやつたか)

おれ

ピアノに向かつていた俺は、胸の中でつぶ
やいた。

しよ一がねえだろ、放課後、四年一組――

となり

俺は二組で、つまり隣のクラス――との、男
子のプライドをかけたサッカー対決、まあ、
要は売られたケンカで、クラス一足の速い俺
が出なけりや負けそうだったんだしさあ。

今週はその練習で、放課後が毎日二時間は
つぶれたんだ。疲れたし、ピアノは一日二時
間も弾ければいいほう。だいたい一時間か
な。それに、指を動かすだけの基礎練習曲な
んて、弾いてもおもしろくない。課題曲なら
弾くけど。

「おまえ、本当にあの有馬公生に追いつき、
追いこしたいと、思ってるのか」
「.....うん」

有馬は俺のヒーローだ。すごく強い。絶対に
負けない強さがある。

完璧に課題曲を弾きこなす。ミスのない正
確な演奏、プレッシャーに負けない精神力。

「だったら、答えはひとつ、練習量が違いす
ぎる。有馬と同じ時間練習してから、追いつ
くとか、でかい口きくんだな」

「それって、どのくらいだよ」

俺は口をとがらせ、高柳先生を振り返っ

た。俺だって、練習は毎日してる。一日でも休んだら、指が三日はちゃんと動かないから。

「毎朝一時間弾いてから登校し、放課後は四時間くらいか。しかもそのうち一時間は基礎練習に割さいているはずだ。それから、曲を完璧に体へたたきこむ。二小節ずつにくぎって完璧に。それが四つできたら、まとめて八小節を完璧にする。そのくり返し……おそらくは」

「うっそだあ。すげえつまんないじゃん、そんな練習。全部通して弾ひかないと」

「すぐ全部弾くと、弾けた気になって細かいところが適当になるんだよ。おまえがあこがれてるのは、メカのようにノーミス完璧かんぺきでゆるがない、とことん安定した演奏じゃなかったのか？」

「そうだけど……。つまんない練習なんかやだね」

高柳先生は、立ちあがり、真剣しんけんな表情で俺おれ

の顔をのぞきこんできた。

「強くなりた い なら、信じる ことだ」

その夜。

俺んちは、高柳先生んちほど緑が多くておしやれじゃない新興住宅地にある。私鉄の駅^こから路線バスで十五分もかかって、さらに込みいった路地を入ったところだ。

高柳先生のピアノレッスンから帰宅してま^かず、俺は自分の部屋に駆けこみ、こないだあったピアノコンクールの地区予選のプログラムを取りだした。俺はぎりぎり予選通過、文句なしぶっちぎりの予選通過は、俺と同じ小学四年生の有馬公生だった。

小学生部門だから、五年生や六年生も出場する、その中でどうどうの第一位。俺が有馬と同じコンクールに出はじめてから、これが四度目。すべて一位は有馬だった。

おれ

であ

俺が有馬公生に出逢ったのは、ちょうど一

年前の同じコンクールの地区予選だ。俺にとっては、初めてのコンクール参加だった。

別に、プロのピアニストになりたいわけ

うでだめ

じゃなし、腕試しのつもりだった。

その二か月くらい前、俺が三年生になった

そうじ

ばかりのころだ。音楽室の掃除当番のとき、

ひ

その日の授業で音楽の先生が弾いてくれたピアノ曲.....モーツァルトの「トルコ行進曲」

がくふ

の楽譜が、ふたを閉じたグランドピアノの上に置いたままになってて、見たらやれそうだったから、弾いたんだ。

そしたら、クラスの連中.....音楽の先生までもが感心しちゃって、俺、うれしくなったから、高柳先生の前でも弾いた。一度弾いたら、

おぼ

だいたい憶えちゃったし。

「『トルコ行進曲』——要はモーツァルトのピアノソナタ第11番第3楽章を、一発でほぼ暗譜.....しかも、初めからその速いテンポか」

高柳先生は、俺に「これ、弾けるか？」

と、ソファ脇わきのテーブルに積んであつた書類
や楽譜集の中から、端はしが折れてない真新しい
ふせんを貼はつた楽譜集を選びだし、ふせんの
ついたページを開いて渡わたしてくれた。

「うん。こんなかんじ？」

ちよつとまちがえたけど、初見でまあなんと
か形になつた。

「やっぱり……。武士、四年近く教えてき
て、たびたびおまえの上達かんの速さと勘かんの良さ
には驚おどろかされたが……。なんせおまえ、気まぐ
れで練習れんしゅう嫌きらいだし、ほうびで釣つらないと本
気で弾ひかないし」

先生はしばらく考えていたが、決めた、と
つぶやいた。

「おまえの好きな変身ベルト買ってやるか
ら、その曲でコンクールに出てみないか？」

「コンクール？　　いっぱい練習するんだろ？」

めんどくせー」

おれ せま

先生がなんだかムキになって、俺に迫る。
「だから、変身ベルト買ってやるって。その
曲は、今度開かれるネオ・ムジカ社ピアノコン
クール用に、おれが選んどいた曲だ。おま
え、ほかの子よりも自分がどれだけうまく弾
けるか、知りたくないか？ かけっこでおま
えがクラス一速いって、走ってみればみんな
にわかるように、ピアノも確かにわかるんだ
よ、うまさやすごさが」

一年前、そんなわけで初めてコンクールに
出場した俺は、そこで、すっげえヒーローに
で あ
出逢ったんだ。

俺のヒーロー.....有馬公生は、前の月に
コンチエルト
モーツァルトのピアノ協奏曲をオーケストラ
と共演し、神童と騒がれたばかり、とかいう
や っ
男子だ。

あん ぷ

きんちよう

コンクールは暗譜で弾くんだけど、緊張

して、どうしても細かなことを忘れる。

がく ふ

けんばん ひ

楽譜には指示が多すぎる。どの鍵盤を弾くのかはもちろん、音の長さ、強弱、テンポ、指使い、鍵盤へのタツチの感じ、歌うようにとか激しくとかゆつたりととかそんなあいまいな感覚を伝えるイタリア語、ペダルをふむかどうか.....まだある。

特に指使いをまちがえて、指示とは別の指でうつかり弾いたら、次の音の鍵盤に指が届かなくて、違う音に触るミスタツチになったり、音符の長さがおかしくなったり、楽譜にない、よけいな十六分休符をつけてしまったり、する。

その指示は作曲家がつけたものだけれど、大人の演奏家のためのものだ。小さな手で弾く小学生のコンクールだから、どうしたつ

かん पेき

て、完璧とはいかない。ミスタツチだの雑音だの、指が届かないから生まれる変な間なので、つつかえながら弾くことになる。

^き聴いているほうもはらはらする。

けれど、有馬公生は違った。まず、選んだ曲がちょっと難しくて、しかもかつこいい曲だった。

ベートーヴェンのピアノソナタ第17番ニ短
作品 ^{つうしょう}調Op.31 - 2 第3楽章——通称「テンペスト」

の第3楽章.....テンペストとは^{あらし}嵐、という意味だ。^{おれ}俺もこの曲は知っていた。

有馬はCDで聴くプロのピアニストと、まったく同じに、譜面どおりノーミスで弾いた。「テンペスト」というかつこいいタイトルにふさわしい、どうどうとした演奏だった。

（すげえ、本当にすげえ）

最初のほうで出番を終えていた俺は、その^{おれ}演奏を客席で^き聴いていた。どうせ大した順位は^と獲れないという開き直りがあったし、ほかの子の演奏を聴くと勉強になるって先生が

言ったんで。みんな、俺より練習してるってのが、よくわかるって。

でも、そんなにすごいやつなんかいなかったのに。

（俺とたいして変わらないな。俺、案外上位にいかちやうかもな、大きなミスしなかったし。テンポが速くなっちゃったくらいで）

そう思い、たいくつさえ覚えはじめていた俺は、本当に^{おどろ}驚いたんだ。

（すげえ、なんなんだよ、こいつ。すごすぎる！^{がくふ} 楽譜、完全コピーして、弾^ひいてる）

びびったのは、俺だけじゃなかった。たい^{ちようしゅう}ていの出場者と、だいたいの聴衆^{しんさ いん}がそうだった。有馬のファンと審査員は知っていたみたいだけど。

有馬が弾き終わり、立ち上がって客席にむかって一礼した。

しーん、とした間があった。ほかの子にはなかったことだ。

ぱく

はくしゅ

一拍置いて、割れんばかりの拍手が起きた。どよめきと感動のため息に続いて、さすが、プロと共演する子は違う、共演なんてただの話題づくりかと思ってたのに、これならもう、プロでやってけるんじゃない？ そんなささやきがあちこちから聞こえる。

だけど有馬は、うれしそうな顔なんてしなかった。ほつぺたを染めることもなく、唇の端がにこつと上がるでもなく、どうだつ、と偉そうにするでもなく、黒縁メガネのフレームに沿った眉の毛一本すら全然動かさずに、すたすたとステージを去った。

（西部劇のクールなガンマンみたいだ。悪いヤツとの決闘で、命をかけたつてのに、表情ひとつ変えずに去ってゆく。鋼鉄の心臓、無敵の腕前、まるで超合金のロボットだ。すごく強くて、すごくカッコいい！）
ヒーローだ。

有馬はヒーローだ。

おれ

俺も、あんなふうになめちやくちや強くなり

ふめん

たい。無敵になりたい、譜面をノーマスで指

かんぺき ひ

示どおり完璧に弾きたい。

そのときから俺の目標は、有馬公生になった。

俺はプログラムのエントリーを確かめた。
改めて、有馬が通っている小学校の名前を読む。

しりつ

しょうがっこう

市立ひばり小学校。

今までたいして気にしていなかったけど、

となり

有馬の小学校は、隣の市にあったんだ。しかも、俺の小学校と学区が接している。

（そんなに遠くないよな。チャリで行けんじゃないか？）

——『強くなりたいんなら、信じることだ』

「よーし、明日、確かめに行つてやる。有馬

がどんな練習してるか」



翌日、俺おれの小学校は、たまたま行事の都合で授業が午前中だけだった。給食を食べて掃除そうじをしたら、下校だ。

俺はチャリに乗って、有馬の通うひばり小へ行った。うちの近くの住宅街ねを抜けるバス通りをまっすぐ走り、私鉄の線路こを越えて、駅前のごちゃごちゃしたあたりをさらに抜け、また別のバス通りを走ると着くのは知ってる。

ひばり小の校舎がすぐそこに見える、団地の中の小さな児童遊園にチャリを止め、車止めのポールとワイヤーをつないでロックすると、俺は校門へ近づいた。

校門の前の通りは、ケヤキの並木道だ。俺は太いケヤキかげの陰から、そっと校門をうか

がった。ちょうど下校の時刻に間に合ったらしかった。

おおぜいの子どもたちが出てくる中に、俺くろぶちは黒縁メガネでやせっぽちで頭でっかちの有馬公生を見つけた。ひとりで、うつむいてとぼとぼ歩いている。

（よし、見つけたぞ）

そつと、有馬の後をつけてゆく。途中、俺おれを追い抜おぬいたショートヘアの女子が、有馬を遊びに誘さそったようだけれど、有馬は断ってまっすぐ家に帰った。

「ここか……」

「ただいま」と有馬が入っていったのは、住宅街によくある、隣となりの家とくつついた、小さな小さな庭のある、しゃれた二階建ての家きよりだ。ホントに隣の家との距離が近い。

うちは、俺がピアノをはじめたあと、一年おく後れで妹もピアノをはじめたので、近所迷惑めいわく

にならないよう、ピアノのある部屋の壁^{かべ}を防音工事した。

たぶん、有馬の家も同じだろう。玄関脇^{げんかんわき}にしゃがんでしばらく待ったけれど、ピアノの音は聞こえてこない。

（ちえっ、本当に練習してるのかなあ）

気がつくのと、通りかかった犬の散歩のおばさんが、足を止めて俺を見てる。

（やべ）

いったん一区画先まで歩いてやりすごし、戻^{もど}ってきた俺は、有馬んちと、「澤部^{さわべ}」と表札の出ている隣の家とのすき間、低い柵^{さく}と柵の間に体^おを押しこんだ。

子どもの体でも、ぎりぎりの幅^{はば}だった。

表にはもれていなかったピアノの音が、こちら側には小さく聞こえてきた。この壁^{かべ}のむこうが、レッスン室^{ひび}みたいだ。響^{ひび}いてくるのは単純なメロディ……ドラソラファラミラ

レ シ ラ シ ソ シ フ ァ シ——。

^き ^そ
基礎練習.....ハノンの6番だ。

ハノンというのは、いわば「指の運動」
「指を動かす」「力の弱い小指と薬指に力をつける」ための分厚いピアノ教本だ。載っている練習曲にはメロディらしいものなんか何もなく、つまんないのが六十曲も、パターンを変えて収録されている。

たとえば、いちばん最初の1番は、ドミ
ファソラソファミという単純な音の並びが、
一小節になっていて、それが小節を追うごと
に一音ずつ上がってゆき、二オクターブ分弾
いたら、ソミレドシドレミに変わり、一音ず
つ下がってくる、これを二回くり返して、一
曲になる。2番になると、ドミラソファミ
ソファミだ。

「ドーミーソーミードー」と歌いながら音を
上げてゆく、合唱クラブの発声練習と似たよ
うなものだ。原則、右手と左手は一オクター
ブ違う位置に手を置いているだけで、まった

く同じ動きをする。

それが、十六分音符^{ぶ おん ぶ}の連符でえんえんと続くだけ。

本当に、おもしろくもなんともない。

1番と2番を交互^{こう ご}に続けて、一回ごとに全部^{ちが}違うリズムで四回^ひ弾く、次に3番と4番と5番を続けてぐるぐると四回、その次に6番7番8番のセットを四回、という具合に第一部だけでも二十曲、七セットもある。

しかも有馬は一秒間に七回鍵盤^{けん ばん}をたたく速さ^{ふ めん}で、それを弾きこなしていた。譜面で指定されている速さのうちで、最高速度だ。おそろしい速さだった。しかもきっちり正確に、一音も外さず、もたつかず、有馬は鍵盤を鳴らし続ける。

（怖^{こわ}……。どうやったら、つつかえたり音飛ばしたりしないで、引き続けられるんだよ。すげえ集中力）

こんな単純な練習、途中で集中力がとぎれ、別のことを頭が考えだして、弾くべき音を飛ばしてしまうか、鍵盤を外してつつかかったとたん、どこを弾いていたかわからなくなってしまうのが、せいぜいだ。

おれ

（有馬はすげえよ。俺なら絶対無理）

なのにもう.....1番から順に弾いているとしたら、一時間近く、ミスなく引き続けている。すごい、音がきれい、そろってると思いつつも、聴^きいてる俺でさえいい加減腹いっぱいって感じで、イヤになりそうだというのに。

（こうなったら意地だ、課題曲の練習になるまで、聴^きいてやる。せつかくのチャンスだし）

おれ うで ど けい

俺は腕時計をにらみつけた。

つ ゆ

暑い.....もう梅雨に入ったんだものな。

ひ ざ

ちよつと陽射しがあれば、めっちゃ暑いよな。

むしむしする。じんわりと背中に汗がにじみ出る。レッスン室はエアコン効いてんだろくな。

（シドミレドレミドってことは12番から14番のセットに入った……そろそろやめてもいいのに、本当に20番まで全部弾ききる気か……？）

俺は（あと何番）と、残りの曲数を数えながら、待った。機械が弾いているような音の連続はもう、耳に残らない。ただ素通りしてゆく。

（あと何番か知ってるから待ってられるけど、普通は耐えらんないぜ、こんなの……って、まさか、60番分全部やらないよな……32番から音階、48番からの三度の和音、六度の和音、片手オクターブってかんじで……）

なんておそろしい、指の運動だけで日が暮れてしまう。

有馬の練習熱心はよくわかった、だから

もしも21番を弾きはじめたら、帰ろう、俺はそう決めた。

幸い、20番まででハノンは終わり、ようやく、レッスン本番がはじまった。次のコンクールの課題曲のひとつ.....バッハの平均律クラヴィーア曲集第1巻第1番ハ長調。

プレリユード

前半の前奏曲と呼ばれるところが、グノー作曲「アヴェ・マリア」の伴奏曲ばんそうきよくとして、よく知られている。

ピアノコンクールで上級者むけの課題曲は、バッハから選ばれるのがほとんどのバロック、ハイドン、ベートーヴェンやモーツァルトのクラシック、ショパンが多いけれどたまにリストやブラームスも選ばれるロマン、それ以降の近・現代曲の、四つのジャンルの中からひとつまたはふたつのジャンルを指定されることが多い。

といっても近・現代曲はまれで、たいていバッハかベートーヴェンかモーツァルトかショパンか、どこの小学校でも音楽室に色あ

しょうぞう が か

せた肖像画が掛けられている作曲家だろ
う。夜中に肖像画の目玉が動くって、学校の
かいだん
怪談や七不思議にあるあれだ。

いっぱん

ともかく有馬は、わりと一般の人でも「聞
いたことある」だろう、あの「アヴェエ・マリ
アのピアノ伴奏」を弾きはじめた……のだ
が、それが「アヴェエ・マリア」だと判ったの
は、俺だからこそだろうな。

おれ

前奏曲のいちばん初めの一小節、タタ タ
タタ タタタ、タタ タタタ タタタ、と八
つの音でできたフレーズを二回弾いただけ
で、もうやめたのだから。また初めから、同
じ音をくり返す。タタ タタタ タタタ、タ
タ タタタ タタタ。

階名でいうと、ハ長調でドミ ソドミ ソ
ドミ、ドミ ソドミ ソドミ。

たが

つぶ

正確に、同じ刻みで、強弱も変わらず、粒が
そろった音で、タタ タタタ タタタ、タタ

タタタ　タタタ。また、タタ　タタタ　タ
タタ、タタ　タタタ　タタタ。タタ　タタタ
タタタ、タタ　タタタ　タタタ。

（マジか。何回、いちばん最初の一小節だけ
^ひ弾くんだよ。きれいな音だけど.....きちんと

そろった、譜面^{ふめん}どおりの速さと音の強さ。指
の置きかたもきれいだ、右の中指だけ強いみ
たいなことがない、全部の指がそろったタツ

^{ゆびばな}チと指離れ。何度弾いても、同じ正確さ）

タタ　タタタ　タタタ、タタ　タタタ　タ
タタ。タタ　タタタ　タタタ、タタ　タタタ
タタタ。

うっとりしていて数えそびれたけど、たぶ
ん、十回は弾いた。

やっと、次の二小節目のタタ　タタタ　タ
タタ、タタ　タタタ　タタタ、になる。ドレ
ラレファ　ラレファ、ドレ　ラレファ　ラ
レファ。今度は数えてみた。十回だ。

二小節目も十回やってから、二小節分まと
めて、タタ　タタタ　タタタ、タタ　タタタ

タタタ、タタ　タタタ　タタタ、タタ　タ
タタ　タタタ。

それから三小節目。タタ　タタタ　タタ
タ、タタ　タタタ　タタタ。シレ　ソレ
ファ、ソレファ、シレ　ソレファ　ソレ
ファ。タタ　タタタ　タタタ、タタ　タタタ
タタタ。タタ　タタタ　タタタ、タタ　タ
タタ　タタタ。タタ　タタタ　タタタ、タタ
タタタ　タタタ。

（ときどき乱れる気もするけど.....そのとき
はくり返す回数が増える.....よな？　十回完
壁^{ぺき}で、次へ進んでる、のか？）

俺^{おれ}は興奮した。こんなに正確にくり返され
る音を、聴^きいたことがない。

（すげえ、すげえよ。やっぱ有馬だ）

五小節目と六小節目、タタ　タタタ　タタ
タ、タタ　タタタ　タタタ、タタ　タタタ
タタタ、タタ　タタタ　タタタ。

七小節目と八小節目、タタ　タタタ　タタ
タ、タタ　タタタ　タタタ、タタ　タタタ

タタタ、タタ　タタタ　タタタ。

すげえと思つた。

シンプルな、和音もない曲だ。だからへたな演奏だとすごくたいくつに聴こえる。

有馬の演奏は、すごくきれいに聴こえた。音がきらきらしている。ひとつひとつの音が生きて、存在感がある。

同じリズムで粒^{つぶ}がそろっているだけに、弾^{はず}むようなきらめきは感じない。けれど、ひとつも欠けたりにごつたり、でこぼこだつたりせず、次々と同じように輝^{かがや}きながら、音の粒^{しんじゅ}が確実に生まれてくる。ころころと、真珠の粒が転がりでてくるみたいだ。

タタ　タタタ　タタタ、タタ　タタタ　タタタ。
タタ　タタ　タタタ　タタタ、タタ　タタタ
タタタ。

これだつてもともとは練習曲として作曲されたんだから、単純な曲なんだけど、さつき^きの指の運動と違^{ちが}い、今度は終わりまで聴けるものなら聴きたいと思つた。

聴^こいてい^こると、だ^ちんだ^ちん心地よくな^ちつてく^ち
るくり返^ちし。メロデ^ちイが美^ちしい^ちんだ、バツハ^ち
は偉^い大^{だい}な作曲家だ。

タタ　　タタタ　　タタタ、タタ　　タタタ　　タ
タタ。タタ　　タタタ　　タタタ、タタ　　タタタ
タタタ。タタ　　タタタ　　タタタ、タタ　　タ
タタ　　タタタ。タタ　　タタタ　　タタタ、タタ
タタタ　　タタタ。

（眠^ねたくな^むつてくるよな。たいくつで眠く^ねな
る、じゃなくて。気持^ねちよくて、よく眠^ねれそ
うな.....あ、つつかえた。目が覚^ねめたぜ）

また十回、タタ　　タタタ　　タタタ、タタ
タタタ　　タタタを、一フ^ねレーズ前^むからやり直^ね
し。

そのくり返^ひしで、全曲三十五小節分を弾^ひく
のに、どのくらいかかったのか。

（ダメだ、もうがま^ひんできねえ、しよんべん
ちびる！）

残念。未練^{おれ}を残^にしつつ、俺は逃げ^{おれ}だした。



わかったのは、高柳先生の言うことは、本当だった、それひとつだけ。

得たのは、初めて知った心地よき。

コンビニのトイレで俺は「本当だった」と何度もつぶやいていた。カーゴパンツの後ろポケットにつっこんできた百五十円でスポーツ

ドリンクを一本買い、駐車場で一気に飲み干すと、児童遊園へ戻って自分のチャリにまたがる。

頭の中は「本当だった」という思いと、タタタタタタタタ、タタタタタタタタタタ、タタタタタタタタタタ、タタタタタタタタタタ、

タタタ、と有馬が鳴らすピアノの連符の音が、ぐるぐると渦巻いていた。こぎ出し、家にむかっている間も、ずっと、ずっと、そうだった。

脳内で気持ちのいい音が、ずっと鳴り響^ない^{ひび}ている。

タタ　タタタ　タタタ、タタ　タタタ　タ
タタ。タタ　タタタ　タタタ、タタ　タタタ
タタタ。

消えることのない、粒^{つぶ}のそろった音。次から次へと生まれ続ける音。

タタ　タタタ　タタタ、タタ　タタタ　タ
タタ。タタ　タタタ　タタタ、タタ　タタタ
タタタ。

（毎日、あんな練習をくり返してるのか……

毎日毎日、何時間も何時間も。譜面^{ふめん}が体の芯^{しん}に染^しみこむまで、譜面どおりにすべてを正確に再現できるまで）

自分の知っている街に入ったところで、俺はチャリを止め、自分の両手のひらを見つめた。

「染^しみこんで……ないよな。まだ、手のひらの上で、音符^{おんぷ}がふわふわ浮^ういてる気が、す

る……」

手を胸にこすりつけ、ぎゅっとTシャツをつかむ。

「音符……体ん中に入っただけや。このままじゃ」

おれ

もう

俺は猛スピードでチャリをこいだ。

自分の家に飛びこみ、キッチンから「宿題は？」と尋ねる母親を無視して、俺は手を洗うが早いか、ピアノのふたを開けた。最近、アツプライトから買い直してもらった、本格的なグランドピアノだ。

わき

ピアノの脇のカラーボックスをあさり、俺は、有馬が弾いていた楽譜を探しだした。

ひ

がく ふ

すわ

はっけん

楽譜をセツトしていすに座り、両手を白鍵の上にかまえ、深呼吸する。

そつとタツチした。

タタ、タタタ　タタタ、タタ、タタタ、タタタ。タタ、タ、タタ、タタタ、タタ、タタ

タツタタタ。ドミ、ソドミ、ソ、ドミ、ド
ミ、ソド、ミ、ソドミ。ドレ、ラレファラ、
レファ、ドレ、ラレファラレファ。タタ、タ
タタタタタ、タタツタタタ、タタタ。タタ、
タタタ、タタタ、タ、タ、タタタツタタタ。

ちが

「なんだよ、もつれてる。小指が弱い。違
う、こうじゃねえ。くっ、有馬はすげえよ
な.....」

やっぱり、有馬はヒーローだ。無敵だ。す
ごすぎる。

おれ

俺も、無敵のヒーローになれるだろうか。

「先生、俺も、無敵になれるよな？　ちゃん
とやれば」

次のレッスンのとき、ピアノの前のいすに
すわ座つたとたんに俺が訊いたので、高柳先生は
目を見張つた。

ふ　まわ

「ちゃんとやるって、どういう風の吹き回し
だ？」

「ピアノに何時間も何時間もむかって、同じ

音を数えきれないくらい弾くしか、無敵になるやりかたってないよな？　そういうの、ちゃんとやるっていうんだろ？」

「ああ。いちばん確実だろうな」

「そっか.....」

俺はハノンの教本を広げた。まずは指の運動.....スポーツなら練習を準備体操からはじめるのと、同じだ。

「今日は25と26でよかったっけ？」

「めずらしいな、武士が自分からやる気になるなんて。どうかしたのか？」

まあ、確かにいつもの俺なら、ドレミドレミファレミファソファミソファミなんてただの指の運動、ていねいに弾く気が起きなかっただろう。

高柳先生の言うことが本当だった、と伝えるのはちよつとくやしくて、俺は黙おれつて、ただまいくつだと思つてた練習曲をていねいに弾きはじめた。

いつもよりもずっと、ていねいに、ちゃん

ふ めん
と譜面を見て。

「いいぞ。言ってるだろ、その基礎練習は、
指に力がついて、指が速く回るようになるから、ちゃんとやるのがだいじだって。スポーツ選手のランニングやストレッチと同じなんだ」

「.....うん、わかった」

武士がすなおだ、まじめだ、と先生が驚く。先生から見れば、そんなにまじめじゃなかったのかよ、俺。なんか、ひでえな。

それから俺は、まじめに練習をするようにした。有馬に比べて俺は、作りだす音の粒のそろいかたのレベルが、まったく違うことに気がついたからだ。

有馬みたいに、音の粒をぴたりとそろえたい。バトルゲームだと、同じ威力の攻撃を連続で続けて、確実に敵の弱点に当て、どん

どん^ざ雑魚^こモンスターを倒^{たお}していくイメージだ。

最強^{だんまく}の弾幕を張るっていうか。

攻撃の強さがばらばらで、しかも命中したりしなかったり、そんなんでむやみやたらに^う撃ちまくっていたら、こっちのH ^{ヒットポイント}P が減ってきたときに攻撃^{こうげき}をかいくぐった敵にやられてしまう。

そうじゃない、すきのない弾幕^{だんまく}を張るんだ。音の弾幕だ。

無敵のイメージができた。

毎日、有馬^{まね}の真似をして一時間はハノンの練習^ひ曲を弾いたし、高柳先生のアドバイスに従って、二小節ずつくぎっては完璧^{かんぺき}に弾く練習をした。

学校から帰ってから、夕飯の前とあとに二時間ずつ一日四時間の練習、休日は学校の授業時間の分も練習するから、一日最低十時間

になる。

友だちとサッカーするのも、たわいないおしゃべりも、ふざけあって遊ぶのも、ゲームも、テレビも、ネットの動画も、マンガも、全部がまんした。

全部、全部、がまんした。

友だちからのサッカーの^{さそ}誘いを断るのは、苦しかった。

^{いっしょ}一緒にゲームしようぜ、という友だちを断るのも、苦しかった。

休み時間のおしゃべりさえ、^{ふよ}譜読みに集中するために、教室を^ぬ抜けだしてひとりで階段の下へ行った。みんなの声を背中で聞きながら、教室を出るのは、さびしくて胸がちよつと痛くて、すごく苦しかった。

そうやって練習したのに……。

次のコンクールで、俺^{おれ}はまた、有馬に負けた。

といっても、有馬の次.....二位での一次予選通過だった。なので高柳先生は喜んだ。それまでは、一次予選を通過する十人にはぎりぎり入るけれど、二次予選は通ったり通らなかったり、というのが俺の成績だったから。

ホールのホワイエ——客席への出入口の
前けいじばんにある広い場所の一角、掲示板に貼りだされた予選通過者のリストを見上げる俺の肩かたに、高柳先生が手を置いた。

「武士、よくがんばったな。練習は嘘うそをつかないって、わかったろ」

先生は上機嫌じょうきげんだけれど、俺はなんだかすつきりしなかった。くやしい.....もつとできたはず、という気持ちが、むくむくと湧わいてくる。

「う.....ん。まだこれからってかんじ、かな」

「おお、すばらしい、武士が向上心ってやつ

を持ったぞ。よし、二次通過したら、ほうびは何がいい？」

「.....考えとく」

俺は先生の手を振り払い、リストにも背をむけた。

今、俺が欲しいのは、新しい変身ベルトでも、来月発売される最新型のゲーム機でも、クラスの友だちが次々乗り換えはじめたスポーツタイプのチャリでも、なかった。

前だったら、いつだって欲しいものがあったのに。

（有馬の演奏、マジすごかったよな.....）

コンクールの会場、音楽ホールに響く有馬のピアノの音は、ほかの出場者と全然違った。違うってのは、初めて有馬のピアノを耳にしたときからわかっていたんだけど、メロディ全体の滑らかさとか、ミスのない安定感が違うって思ってた。

今の俺には、有馬の十本の指が作る一音一

音が、ほかの人とは全然違う、それが組み合わせ
わさって、曲全体もほかの人と違ってきている
と、わかる。

そう、あのひとつひとつのきらめく音の粒^{つぶ}
が、力強い音の弾^{たま}が、欲しい。

でも、それは、ねだって買ってもらえるよ
うなものじゃないってことも、俺にはわかつ
てしまっていた。

ホールの自動ドアをくぐり、車寄せで父親^{むか}
が迎えの車を運転してくるのを待ちながら、
俺はまた、自分の両手のひらを見た。十本の
指を動かしてみる。

「欲しい音は、この手で、十本の指で、つか
み取るほか、ないんだ」

苦しい。でも、ほかにはない。

二次予選にむけ、俺^{おれ}は毎日最低五時間――
学校から帰ったあとは宿題もあるから、苦手
な早起きをして朝一時間の練習を増やした

——ピアノにむかった。とことん、完璧を目

がくふ

指し、楽譜に書かれている指示と完全に同じになるまで、何度も何度も、同じフレーズを弾いた。

ちよつと空いた時間には、譜読みをする。いつも楽譜のコピーを持ち歩いて、読むんだ。家ではもちろんのこと、学校での休み時間も。

暗譜はピアノを弾きながらするんじゃない。まず、目で見て、脳内ピアノを鳴らしたり、指でエアピアノしたりしながら、譜面に書かれた音や指示のすべてを憶える。憶えやすいように、譜面に書きこみをしたり、色をぬつたりもする。それを本物のピアノで再現するのが、練習だ。

おぼ

だから、暗譜ができた俺の頭の中では、いつも譜面どおりに完璧なピアノが鳴り響いていた。

なひび

それを弾く。十本の指で、脳内の完璧なピ

アノに重ねて弾く。ふたつのピアノにいつさいのずれがないように、弾くんだ。

何度も何度も、何日も何日も、練習した。

完璧になった、と思った。自信がついた。

高柳先生もそう言ってくれた。

「武士、すごいぞ、この音をコンクールで響かせることができたなら、もう負けない。あの有馬公生にだって」

二次予選当日.....楽屋に入って、演奏用の

いしょう 衣装であるスーツにき 着替え、ネクタイをしめるために鏡をのぞいたとたん、いつにない

きんちようかん 緊張感おそ が襲ってきた。

おれ （俺.....こんなに怖い顔、してたか？）こわ

別人が鏡の中から俺をにらんでいた。

だいじようぶ （大丈夫だ、完璧だ、俺は弾ける。かんぺき あんなひ

さい に練習してきたじゃないか。十四歳以下二次予選課題曲はロマンススタイルで、二十四曲あ

エチュード るショパンの練習曲の中からどれか一曲.....

選んだのはOp.10 - 3 ホ長調、完璧に俺のものだ)

つうしょう

Op.10 - 3 ホ長調——通称「別れの曲」、それが俺の選んだショパンだった。

今、俺の頭の中には、完璧なショパンが鳴り響いている。十日も前から、ずっと、ずっと。

(完璧だ.....有馬に追いつける。無敵になれる。完全にそろった音を次から次へと作りだせる。有馬に負けないくらいの音。有馬の音と勝負できる)

俺の脳内で鳴り響くショパン.....有馬には負けな.....音がかぶさってきた。有馬の弾くバツハ。完全にそろった音、次から次へ、次から次へ。

ふたつの音がぶつかり合う。耳の奥でぶつかり合った音が壊れる。

(やめろ、出てけ! 出てけよ、よけいな音は)

あんなに欲しかった有馬の音が、今、俺を
邪魔している。心臓がばくばく鳴る音が、ふ
たつのピアノの音と音がぶつかり合って壊れ
る悲鳴のような響きに、加わった。

だんだん音が大きくなる。わんわんと頭の中
でとどろく。完璧なんかじゃない。こんな
音。めちゃくちゃだ。

目の前が暗くかすんできた。息苦しい。
(出てけ!! 俺の音を壊す音なんか、全部出
てけったらあつ)

出てけ、出てけ、出てけ、出てけ.....鏡に
手を突き、かつと見開かれた自分自身の目を
にらみつける。暗くなる意識を保とうと、に
らむ、にらむ、にらむ。

「出てけえっ!!」

声をもらしたら、腹の底から何かがこみあ
げてきた。

やばい、と慌てて、楽屋の隣のトイレに駆け

けこむ。

洗面台で吐いた。

吐き尽くして胃が空になり、苦い液体だけが出てくる。それも全部しぼった。心臓の音はまだ速かったが、頭の中のやかましきはなくなっていた。

鏡には、ぼうぜんとなった俺が映っていた。ダメだ、音は、音はどこへいったんだ。

頭の中でちりちりになっていた音たちを、探す。

やっどひとつ見つけ……もうひとつ、もうひとつと音を拾い集めると、ようやく、頭の中のピアノでたどたどしいメロディがつむがれはじめた。

「別れの曲」。

（大丈夫だ、完璧な音は、体に、この両手の十本の指に、染みこんでいるはず）

ぐっ、とこぶしを握ると、鏡に背をむける。俺はハンカチで口をぬぐい、トイレから

出た。そろそろ時間だ。

楽屋の前、廊下^{ろう か すみ かべ}の隅で壁にもたれて座りこみ^{すわ}、ショパンの楽譜^{がく ふ}を熱心に読みこんでいる、黄色いドレス姿の女子がいた。エナメル^{くつ わき}の靴が脇にそろえて置いてある。はだしのつま先がドレスのすそからのぞいていた。

この女子、一次予選からいつも見かける顔で、俺や有馬と同じエリアに住んでるらしい。高柳先生は、俺と同学年だとか言っていた。

何げなく楽譜をのぞくと、俺と同じ「別れの曲」だ。

気の強そうなその女子は、俺を気にすることなく、譜読み^{ぼつとう}に没頭している。カラフルな文字で、書きこみだらけの楽譜だった。

「響^{ひび}かせる」「あこがれて遠くへ」「せつなく^{なみだ}」「涙^{なみだ}が一粒こぼれる」「春の夕暮れのあつたかな色の空」.....なんだこれ。

がくふ

そんな指示、元の楽譜のどこにもないし、
変わったことを指導する先生だな、と思っ

おれ

た。女子が俺の視線に気づき、じろっ、とに
らみ返してきた。

「文句ある？」

「別に」

だれ

そのとき、運営スタッフが誰かを呼んだ。

い がわ

「五番、井川さん。準備してください」

女子は深呼吸した。

「はい」

ぶ たいそで

楽譜を持って立ちあがり、女子は舞台袖へ

とびら

続く扉のむこうに消えた。

とど

俺はその場に留まって自分の頭の中で、完

かん

壁な音を鳴らすことに集中した。次が、俺の
番だ。

頭の中を探す。ヴェールのむこう、遠くで
ピアノが鳴っている。

俺のショパン、俺の「別れの曲」。

遠すぎてよく聴^きこえない。もつと近くで
鳴っていたはず。完璧な音で、ずっと鳴り響^なひび
いていたはずだ。

（ここに来い、俺の手の中へ来い、俺の音）

黄色いドレスの女子と入れ替^いわ^かりに、六番
目に演奏する俺^{おれ}がステージに出る。

スタッフに指示されてステージの袖^{そで}に近
寄ったとき、ものすごい拍手^{はくしゅ}が響^{ひび}いてきた。

満足した顔の女子が、俺とすれ違^{ちが}う。
「今日のわたしの響き……有馬に勝ったはず」

そうつぶやいていたのが、確かに聞こえた。

俺を横目でにらむ。鋭く、けれど奥深く澄^す
みきった黒い瞳^{ひとみ}。

どきり、とした。その瞬^{しゅん}間、手元に引き

寄せた音が、全身に染みこんだはずの曲が、
俺の身の内側でくだけ、散らばってしまった。
た。



俺は.....二次予選をまたぎりぎりで通過した。

一位になった有馬の演奏——有馬は最後から三番目の演奏だったのだが、それを聴いて自分を奮い立たせる余裕はなかった。

（あんなに練習したのに、完璧な音をつかんだと思ったのに。一発勝負のステージの上で鳴らすことができた音は、適当にやってた今までと変わらなかった.....なんだったんだ、

あのステージに漂ってた雰囲気。体中をしめつけてくる圧倒的な.....有馬とはまた別の、

聴衆が息をするのも忘れるような)



ムカつくぜ
有馬の奴



また
負けたから？



あはやロー

それよりも

ちが
違うわい！！
ほんせんしょうり
本選勝利への
ふせき
布石だ



またまた
ありまくん
有馬君の
ひき立て役ね

有馬の演奏は、譜面^{ふめん}どおりで、いつも完璧^{かんぺき}だ。だけれど、完璧を美しいと思わない「クラシックファン」は多い、それが現実だ。

だから、客席から、ここまで圧倒される空気^{しんき}は生まれにくい。聴衆が審査のプロでも演奏のプロでもなく、「クラシックファン」であればあるほど。

けれど.....あの女子が作ったのは、そんな「クラシックファン」の心を動かす雰囲気^{おれ}だった。

俺までもが、その雰囲気^{おれ}にのまれた。
(あんなに練習したのに。聴衆なんかなし
で、邪魔^{じゃま}が入らずに俺と有馬だけが勝負できたら、いいのに！)

くやしくて、あの女子の名前を、俺は忘れることができなくなつた。

井川絵見^{えみ}。

小学四年生。俺と、有馬と、同じ学年。
高柳先生情報では、有馬を敵視しているら

しい。

「武士、またふてくされて。練習サボった
の、わかるんだぞ。二次予選から一週間、弾^ひ
いてないだろ。本選に進んだからって、気を
ぬ
抜くな。本選のほうが厳しいんだぞ」

二次予選後、最初のレッスンは終わったあ
と、そう小言を言ってから、あいさつをしよ
うとした俺^{おれ}の手に、高柳先生はヒーロー変身
ベルトの箱を載^のせた。

「ご両親とおれからのほうびだ。今回は特
に、がんばってたからな。結果はいつもどお
りだが、努力はすばらしかった」

「.....ありがとうございます」

「本選もやる気出せ。おまえが止めないと、
また有馬が優勝するぞ。いいのか？」

「はい」

（俺が有馬を止める？ 無理無理）

俺の心の声を、先生が読み取る。

「武士、おれは本気で言ってるんだけど？ 有

馬に並び、やがて勝てるやつがいるとした
ら、おまえだ。コンクールで審査員しんさ いんから得点を勝ち取り、無敵になるにはどうしたらいいか、ちゃんと理解しているのは、たぶんおまえひだけだ。いくら指導者がわかってても、弾く本人が心の底から理解してないと。おまえは、わかってる」

俺は、うん、と生返事を返した。なんか、
ちが違う。俺、何が欲しいんだろ？
ほ

ピアノコンクールは減点方式だ。
かん पेき 完璧に譜面ふ めんどおりかどうかを審査しんさするの
が、平等なやりかたなんだ。

演奏者きにも、聴く側の人にも、個人の感情
や思い入れがどんなにこめられてたって、そ
れを数字にして他人に見せることは誰だれにもで
きない。

だから、譜面どおりに演奏する技術が、審
査される。譜面の指示から遠い演奏をするほ

ど、点が引かれる。

高柳先生は熱心に説いた。

「おまえの強さは、譜面への、ひいては作曲家へのすなおなリスペクトがあることだ——」

先生はまだ何か言いたそうだったが、「ありがとうございました」と、俺おれはさっさと外へ出て、チャリで家おにむかった。

二次予選で弾ひき終えたとき、頭が空っぽになった。

なんの音もしなくなつた。

ピアノを見ても、なんだか腹の奥おくがむずむずいやなかんじになるだけで、自分からふたを開ける気が起きない。ピアノの前の空気は、吸うと息苦しくなる気がする。

本選があるのはわかつてる。

二次予選で落ちたほうが、楽だったかも……。

俺おれはまた、完璧な音かんぺきを、頭の中に響ひびかせな

がらステージに立たないとならない。俺が欲
しかった音、手に入れたはずの音、無敵の音
を、自分の脳内から取り出して、審査員と
聴衆全員に聴かせ、無敵なんだと証明しな
くてはならないんだ。

（また、一からやるのか……音、消えちゃっ
たなあ）

めんどくせーな。

もっと、楽に有馬に近づけたら。もっと簡
単に、すぐ、有馬みたいに弾けたら。

とちゅう

途中で、校庭の横を通ったら、バツク
ネットごしに俺のクラスの男子が七、八人、
サッカーボールをけり、追い回しているのが
見えた。

なんか、すげえ楽しそうだった。チャリを
止めてしばらくながめてたら、みんなが気が
つき、俺に手を振って駆けてくる。

「武士、明日の放課後、一組との二度目の対

決試合、出てくれよ。かつちゃんが早退した
だろ。保健委員がさ、熱出してたって言うん
だ」

「明日休むかも」

「完璧な体調じゃないやつに、無理させらん
ないし」

「武士なら、今からちよつと練習すれば、い
けるだろ」

ピアノばかりで、すっかりつきあいが悪く
な^{おれ}つてた俺^{さそ}を、誘ってくれるやつらがいる。
俺は「いいぜ」と、のど元まで声が出かけ
た。

——『有馬に並び、やがて勝てるやつがい
るとしたら、おまえだ』

俺の脳内で、高柳先生の声がよみがえっ
た。同時に、完璧^{かんぺき}なピアノの音が流れはじめ
る。

有馬^ひの弾くバツハ。タタ　タタタ　タタ
タ、タタ　タタタ　タタタ。タタ　タタタ
タタタ、タタ　タタタ　タタタ。ドミ　ソド

ミ ソドミ、ドミ ソドミ ソドミ。

自分が完璧だと思っていた、あの「別れの曲」は消えてしまった。

でも、有馬の音は、頭の中によみがえってきた。どこにもいってなかった。

俺はしばらく、頭の中で鳴る音を聴^きいていた。

（俺だって、完璧に弾きたい。誰^{だれ}もが認める
形^{しん さ いん}で、審査員全員、ホールを埋^うめた聴衆^{ちやうしゆう}、

みんなが認める完璧な音、譜面^{ふ めん}を完全に再現した音を……）

「武士？ ぼ一つとしちゃって、どうした？」

タタ タタタ タタタ、タタ タタタ タ
タタ。タタ タタタ タタタ、タタ タタタ
タタタ。ドレ ラレファ ラレファ、ドレ
ラレファ ラレファ。

（有馬は何時間もくり返し練習してた。有馬がしていることをすっ飛ばして、俺が完璧な音を手に入れられるはずがない。それができ

てたら、とつくに有馬を超えてる)

タタ　タタタ　タタタ、タタ　タタタ　タ
タタ。タタ　タタタ　タタタ、タタ　タタタ
タタタ。シレ　ソレファ　ソレファ、シレ
ソレファ　ソレファ。

音を聴きながら、俺は自分の両手のひらを見つめ、ぐっ、と握った。それから、友だちみんなの顔を見る。ゆうき、けんと、しょう、よっちゃん、れいや、まさ、じゅんぺー
.....。

(俺は――)

「ごめん.....ピアノの練習あるからさ」

俺が手を合わせて謝ると、友だちみんなは残念そうに「そうか.....」と校庭の真ん中へ戻っていった。

決意したはずだったのに。

いざピアノにむかうと、今度はサッカーボールを追う友だちの姿が、まぶたの裏にち

らついた。

（サッカー、楽しそうだったな。かつちゃんいないと、一組に勝てないかもな.....）

「どっちだよっ、俺がしたいのは」

さけ

ひび

叫ぶと、脳内で音が響く。

タタ　　タタタ　　タタタ、タタ　　タタタ　　タ
タタ。タタ　　タタタ　　タタタ、タタ　　タタタ
タタタ。ドミ　　ソドミ　　ソドミ、ドミ　　ソ
ドミ　　ソドミ。ドレ　　ラレファ　　ラレファ、
ドレ　　ラレファ　　ラレファ。

おれ

ひ

けんばん

俺も同じ曲を弾く。十本の指を鍵盤の上で

おど

踊らせる。

ふ

けれど、実際にピアノに指が触れ、現実の音が耳に入ると、ふたつの音のずれが気になって、いくら弾いてもぴたりと合わず、息が苦しくなってくる。

う

苦しいと、友だちの顔が浮かび、明日のサッカーが気になってくる。

ちが

「違う、俺はピアノだ、そう決めたんだ。わ

かっている、有馬だって努力してるってこと、俺にも努力が必要だってこと。今日何もしないで寝^ねて、明日起きたら無敵になってる、なんてあり得ないってこと。わかっている！」
(でも、わからねえよ。無敵になれば楽しいのか。無敵になれば気持ちいいのか。無敵になれば迷わないのか)

いらっとして立ちあがり、ピアノの置いてある部屋をうろうろしてあちこち見回したら、ピアノのレツスンに持^{ふく}っていつてるバツクパツクの、四角い膨^{ふく}らみが目に入った。変身ベルトだ。

「これが欲^ほしくて、弾いたんじゃない」
もらった変身ベルトを箱ごとひっぱりだすと、俺は自分の部屋に行き、それをベッドの下の引き出しにつっこんだ。開けなかった。

新しいおもちゃはもう要^いらない。友だちの誘^{さそ}いだって、断る勇気がある。

完壁^{かんぺき}な音^ほが欲しい。

完璧な音ってなんだろう……。

タタ　タタタ　タタタ、タタ　タタタ　タ
タタ。タタ　タタタ　タタタ、タタ　タタタ
タタタ。ドミ　ソドミ　ソドミ、ドミ　ソ
ドミ　ソドミ。ドレ　ラレファ　ラレファ、
ドレ　ラレファ　ラレファ。

脳内で鳴っているこのピアノの音は、本当
はなんだろう。完璧なのか？

どうして、こんなに……息が苦しい？

（息なら、ずっと苦しかったじゃないか。友
だちと遊ぶのをやめて一日四時間も五時間
も、休日には十時間も本気で練習しはじめた
ときから。気づかないふりしてただけで）

おれ

俺は家を出た。チャリで有馬の家のほうへ
むかう。俺にとって、すげえと思える音は、
有馬だけだ。有馬の現実の音が聴きたい。や
つが努力している音が。

ていぼう

川沿いの堤防道路を走っていたら、川にか

かる橋の上で、騒^{さわ}いでる連中がいた。



「.....有馬だ」

おれ

俺は息をのみ、チャリを止めた。

有馬はショートヘアの女子と連れだって楽

らんかん

しそうに、橋の欄干から何度も川へ飛びこんでいる。ほかの子どもたちもはやし立てる。

しず

有馬が川に沈んで、ハデな水しぶきがあが

つぶ

はじ

り、散るしぶきとともに光の粒も弾けた。

「な.....っ」

なんだ、なんなんだよっ。

（なんであいつが、有馬が、友だちと遊んでるんだ。あんなに笑ってるんだ？）

俺はぼうぜんとなり、チャリにまたがったまま、しばらく立ちつくしていた。

有馬はびしょぬれで川から河原へと上がり、けらけら、友だちらしい子どもたちと笑

て

いあってる。ぬれたおでこやほっぺたを手の

こう

甲でこすってる。

.....有馬が遊んでる、ふつ一の小学生みたいに。

かたむ

かわも

傾きかけた金色の太陽が、川面に反射している。もう秋だ。

かんぺき

不意に、きらめく川面から、完璧な音楽が聴こえてきた気がした。有馬の奏でるピアノの、粒のそろった音が。河原の草の葉をゆらす秋風からも、青から黄へと色が変わりはじめた空で、白く輝くいわし雲からも。

おれ

俺も笑いたくなつた。だから笑った。ひとりで笑った。

笑って、笑って、大きく深呼吸した。

すごくひさしぶりに、腹の底まで空気が入った気がした。ひんやりとした、秋の空気だった。

たの

次の日、俺は友だちみんなに頼んでまわり、放課後、校庭で行われた一組とのサッカー対決試合に出してもらった。

得点はできなかったけど、アシストは二回して、一回は得点につながった。

試合の間も、ずっと、粒つぶのそろったきれいなピアノの音すが、澄みきった音色で、俺の体の奥底おくそこから鳴り響ないていた。
なんだか体が軽い。

大きな声を出した。友だちを応援おうえんした。

校庭のコーートを、隅すみから隅まで思いっきり走った。

試合は三対一で勝った。

うちに帰ったら、今夜からまた、ピアノを弾ひこう。軽くなった体で。

2



有馬^{ありま}は嘘^{うそ}つきだ

井川^{いがわ}絵見^{えみ}

あれからずっと、わたしは有馬^{こうせい}公生に裏切
られ続けている。

期待したわたしが悪かったのかもしれない

けれど、有馬は.....今の有馬は、本当の有馬
じゃない。絶対に違^{ちが}う。

どうして、そのことに誰^{だれ}も、おそらく有馬
自身も、気づかないの？

小学五年生の秋。彩木^{さいき}コンクールピアノ部
門の地区一次予選会場の音楽ホール。

わたしは楽屋裏のモニターで、前年に最年
少優勝していたためシードという形で最終演
奏者にな^ひった有馬公生の、ピアノを弾く手元
をにらみつけながら、ずっと同じことを考え
ていた。

（また、有馬が裏切っている。こんなことし
たって、お客さんから嫌^{きら}われるだけなのに。
本当の有馬に戻^{もど}ればいいのに、どうして、こ
んな悪役^{てっ}に徹するんだろう。楽しいの、悪役
が？）

有馬は完璧^{かんぺき}な演奏を続けていた。曲はハイ

ドンのソナタだ。イ長調H o b.XVI / 26第1楽章アレグロ・モデラート。課題曲のひとつ、
せんたくきよく
クラシックスタイルの選択曲は、ハイドン、モーツァルト、ベートーヴェンの、指定されたソナタのうちから一曲だった。

ながいきねん
先月あった長井記念コンクール本選でも、有馬はハイドンのソナタ変ホ長調H o b.XVI
ひ
/ 43終楽章をノーミスで弾いて、優勝していたつけ。わたしはこの彩木コンクールに的を
しば
絞_り、弾きこんでいたから、そちらには出場していない。

かんぺき
あえて出場者がいやがる難曲を選び、完璧に弾いて、一位をさらってゆく。それが、ここ半年あまり.....五年生になってからの有馬だ。休みなく、あらゆるコンクールというコンクールに出場し、だいたい一か月に一枚、予選合格証書や本選優勝の賞状やトロフィーを手に入れてゆく。

あ
「コンクール荒らし」——今の有馬は、そう

呼ばれていた。

「絵見、ここにいたの」

おちあい ゆ り こ

わたしのピアノの指導者落合由里子先生
が、近づいてきた。

「また、有馬くんを見てるのね。そんなに気
になる？」

「.....はい」

ちが

「今日は、違う曲になったから、よけい気に
してるようね。そんなに、同じ曲で勝ちたい
の？」

「勝てると思いますか？」

え

う

落合先生は、あいまいな笑みを浮かべ、
「がんばりましょうね」と言うだけだった。
もうずっと、何年もそうだ。

「ハイドンの連続はないと思っただから、今日

作品

は絶対、ベートーヴェンのOp.27 - 2 第3楽
章、弾いてくるって予想したのに。あれな

ぎ こう

ら、激しくて、技巧を見せつけられるから」
だから、わたしはその曲を弾いたのに。

けんめいに練習して、自分なりの曲想を作り、練った。違^{ちが}う曲を選んでしまったと、プログラムで知ったあとも、燃えあがった曲への思いは消えずにわたしを追い立て、激しく、速く、もつと速く、あおるように、特徴^{とく}的な分散和音を弾きあげた。

真っ向勝負にならなかったのはくやしかったけど、わたしの、有馬に勝ちたい、ピアノへの思いってこんなに激しいものなんだ、って気持ちをぶつけて、弾ききった。

ベートーヴェンのソナタ第14番嬰ハ短調Op.
27 - 2 第3楽章プレスト・アジタート——通^{つう}
称^{しょう}「月光ソナタ」の第3楽章だ。

よく、TVのBGMで耳にする、「タララ、タララ」と奏^{かな}でられる左手の伴奏^{ばんそう}に乗せ、右手が主旋律^{しゅせんりつ}を「ターンタータターン」と語る静かな「月光ソナタ」は、第1楽章。この第1楽章は、ピアノをちょつと弾いて楽

しむ人が、好きな曲のひとつだと思う。

コンクールでは、もっと技術的に難しい曲が課題曲になる。第3楽章は、課題曲にふさわしい難しさと激しさだった。プレスト・アジタート——より速く、激しく、と作曲者ベートーヴェンから指示されている。

.....有馬がハイドンのソナタを弾き終わ

り、審査員と聴衆にむかって礼をする。拍手が起こった。わたしのときほどじゃない、拍手の大きさは。

わたしのときは客席が沸きたった。拍手する両手に力がこもっていた。もつともつと、大きな音で客席が包まれた。

聴衆の目がきらきらしていた。今は——有馬は、そんなことない、絶対。

「みごとなハイドンだったわね、譜面どおりでノーミス、まるで機械のよう。つて、あなたももう、聞き飽きたわね、こんな感想。私も言い飽きた」

くしょう

くちびる

落合先生は苦笑し、わたしは唇をかんだ。今になって、ものすごくくやしくなる。（どうして、有馬は「月光」を弾かなかったの？　今からでも、やり直してきてほしい。そして、わたしとどっちが拍手をたくさんもらえたか、聴衆が喜んだか、比べたい）

いつしようにけんめい、全力で弾ききったのに。弾き終え、拍手を受けるまでは、すごく気持ちが高ぶっていたのに。

今は、むなしい……。

「絵見、そんなにくやしい？　ちが　違う曲を弾いてしまったのが」

「同じ曲で勝負できてたら、勝てたと思いますか？　今日のわたしの演奏。気持ちいいくらい、思いっきり音を鳴らせた。叫ぶように強くも、ささやくように弱くも」

先生は視線をわたしから逸らし、話も逸らした。

「コンクールって、難しいわね。いつもベ一

トーヴェンだと、それしか弾^ひけないのかって
言われる。ショパンが課題曲のときもそう
よ。課題曲にもかかわらず、ショパンばか
り^{しんらつ}つて。何を弾いても冷^{ちよう}ややかで辛辣な聴^{しゆう}
衆、どんどんハードルが上がるの。コン
クール荒^あらし^たつて、そういう声とも闘^{たたか}うの
よ。

実際、コンクール荒らしと言われたある
ヨーロッパのピアニストは、そう言われて、
技術的には一位だったかもしれないけど、二
位になったの。そしたら、ガラコンサート
で、その人どうしたと思う？」
「……ボイコットですか？」

先生はかぶ^ふりを振り、わたしの反応を確か
めてから、こう答えた。

「プログラムに載^のせた、予定していた曲では
なく、とても有名で、クラシック音楽を知ら
ない人でも第一主題のメロディくらいは聞いた
ことがあるような曲を、弾いたんですつ

て」

だれ

誰でも聞いたことがあるような曲……なんだろう。「エリーゼのために」？ 「トロイメライ」？

これだ、という答えが思いつかない。
「なんですか？」

とす

取り澄まし、先生はこう答えた。
「ショパンのピアノソナタ第2番第3楽章よ」

そうそうこうしんきよく

「……あつ、『葬送行進曲』！」

おく

とたんに、わたしの耳の奥におなじみの
「葬送行進曲」が鳴り響いた。タンタータ
ターン、タータタータタータターン。

いや

「すごい嫌み」

「でしょ？」と、先生はくすくす笑った。

ひ

わたしも「葬送行進曲」を弾きたい気分
だった。

あい

どうせ一位通過は有馬で、二位はたぶん相

ざ た け し
座武士。

武士は一年くらい前の冬から急に力をつ
け、この夏から秋にかけて開催された毎報音
楽コンクールでは、秋の本選まで危なげなく
進み、いちばん下だけれど入賞した。それま
で二次を通るかどうかだったのに。

優勝したのは、有馬だった。

わたしは変わらない。同じ地区の有馬と武
士の下につける三位が、ここ一年くらいのわ
たしの指定席。それまでもだいたい二位から
四位の間だったから、武士に一気に抜かれ
て、くやしくないわけではないけど、わたし
の敵は有馬ひとりだから。

一応、武士のことは、にらみつけておいた
けど。

でも、今日は、有馬と勝負にすらならな
かった。違う曲を弾いてしまったから。これ
では聴衆が、わたしと有馬を比べようがな
い。

しかも、これで二回連続だ、違う曲になってしまったのは。

（次こそ、予想を外さないようにしなきゃ）
「さあ、行きましょう。一次はこれでおしまいよ」

うながされ、落合先生と一緒^{いっしょ}にホール内のホワイエという広い場所に出ると、そこにいた武士が話しかけてきた。演奏のときに着ていたスーツを脱^ぬいで、ラフな私服姿だ。

「あ、井川さん、結果が張りだされたぞ。今日は、結果が出るのが早いな」

一角を指さす。武士は「有馬の次の位置」常連になってから、よくわたしに話しかけてくるようになった。理由は知らない。

「どうも」

張りだされた予選通過者一覧を、わたしは見上げた。やっぱり三位だった。有馬、武士、わたしの順。同じように二次予選も通るだろう。武士がミスして、わたしが失敗しなければ、ふたりの位置^いが入れ替^かわるだけで、

一位は有馬。そしてわたしは、本選では残念ながら、になる。

それが、わたし、井川絵見の、現在の評価。

どうしてコンクールは、^{ふ めん}譜面どおりに機械のように^ひ弾けば、勝つの？

ほかに^{しん さ}審査の基準がないの？

感情をこめ、伝えたい思いをこめ、^{ぜんしんぜん}全身全^{れい}霊で演奏して自分を表現し、音^{ちようしゆう}を聴衆の心に^{ひび}響かせてゆすぶり、感動させても、それは得点にならない。

感動は^{お か}数字に置き換えられないから。個人個人でまったくかんじかたが^{ちが}違うから。

でも、わたしは^{なつとく}納得できない。

わたしは、本当はピアノは感動するものだと信じてる。

わたしにその感動を教えてくれたのは、有

馬公生だった。

同じ年の有馬公生——有馬公生の弾くピアノに初めて出会ったのは、わたしが五歳のときだった。

夏の終わりのある日曜日、幼稚園で仲のよかった友だちが出演するピアノ演奏会を、誘われるまま、わけもわからず聴きに行った。

今考えると、何人かのピアノ教室主宰の先生が、合同でホールを借りて開いた「ピアノ発表会」だったと思う。出演者は幼稚園児から小学生がほとんどで、女の子はみんなフリフリのドレスをうれしそうに着て、弾かれる曲もアニメソングやヒット曲のアレンジだった。

聞き覚えのあるアニメソングでも、二時間もピアノを聴かされるとさすがにたいくつ

で、わたしが寝^ねてしまいそうになったとき、
ステージに有馬公生が登場した。

弾いたのは、明るくて楽しそうで、元氣
に、きらきらと音が輝^{かがや}いている曲だった。

ただ明るいだけでなく、ときどき影^{かげ}がさ
す。うすい雲が太陽^{かく}を隠すように。そのとき
のメロディは、なんともいえず甘^{あま}くほろ苦い
かんじがして、胸に残るのだ。

当時のわたしにはタイトルなんてわからな
かった。知ったのは、ピアノを習いはじめて
三年くらいしてからだ。先生が「次の曲、こ
れはどうかしら」と弾いてくれた曲が、その
曲だった。

モーツァルトのピアノソナタ第3番第3楽
章^{ケツヘル}変ロ長調 K. 281 アレグロ（ロンド）。

あの、すべての花が命の限りに誇^{ほこ}らしく咲^さ
いている真夏の花畑、そこに降り注ぐ太陽の
光^{そこ}みたいな底^ぬ抜けの明るさと、甘くせつなく

胸をくすぐるような淡^{あわ}いかげりは、モーツァ
ルトに特有の雰^{ふん}囲^い気^きだと思う。

それを有馬が弾くと本当に楽しそうで、ピ
アノを弾くのが大好き、ピアノの音が、響^{ひび}
きが好き、というのが伝わってきて、ひとつ
ひとつの音が輝いていたのだった。

彼^{かれ}が弾き終えた余韻^{よ いん}が、客席に染^しみこんで
いった。

音が消えてしまうのが惜しくて、でもあの
きらきらと輝きを放った美しい音、楽しく弾^{はず}
むようにいて優^{やさ}しく人を包みこむすばらしい
響^{ひび}き、美しい花に囲^{かお}まれてうっとり香り
を楽しんだような気持ち^{おどろ}がすべてわたしの体
の中に留^{とど}まっている驚きで、ドキドキが止まら
なくて、なんだかもうたまらなくなつて、

涙^{なみだ}がこみあげ、感情が一気にあふれだし
て、わたしは声を上げて大泣きした。

ただただ、感動した。

音楽の楽しさを体現しているかのよう、それが五歳^{さい}の有馬公生のピアノだった。

これだ。

わたしもこんなふうに、ピアノを弾^ひきたい。

演奏^きを聴いた見知らぬ誰^{だれ}かに、心の底から感動してもらいたい。

その日曜日、わたしは.....無限の可能性のある未来を捨てた。

夕方、目を泣きはらして帰宅したわたしは、両親をあかね色の空の下へ連れだした。

制止する両親^ふを振り切り^き、当時のわたしが自力で行くことのできたいちばん高い場所——近くの児童公園にあるジャングルジムのてっぺんへよじ登り、両手を夕焼け空へ突^つきあげて、高らかに宣言した。

「絵見は、ピアニストになる!!」



絵見^{えみ}は

ピアニストに
なる!!

井川^{いがわ}絵見^{えみ}
5歳^{さい}の時^{とき}である

一次予選の結果発表の紙が張りだされたことに気づいた出場者が、次々と集まってくる。みんなホワイエの片隅^{かたすみ}で、落ち着かず結果発表を待っていたのだ。

「通った！」

「.....やっぱ、ダメだったか」

「あそこ、ミスタツチでくずれなければ.....」

「やった、初めて二次に行ける！」

コンクールでは、ミスをしていないのが大原則だ。

明らかな減点になるような大きなミスをしなかった人だけが、ここに名前^のが載る資格があり、その中でさらに優劣^{ゆうれつ}をつけて発表されるのだ。

悲喜こもごもでごった返す結果発表の紙の前^{はな}から数歩離れると、わたしについてきた武士が話しかけてくる。

「とりあえず、おたがいお疲^{つか}れさま、井川さん」

落合先生はそつと離れていった。あわてて先生を振り返^ふると、目配^{かえ}せされる。わたしは武士と話をしたほうがいってこと？

「けつきよく有馬か。今日も完璧^{かんぺき}ノーミス完全無欠だったよな」

なんだかその言いかたがうれしそうだった^きので、わたしはむつとした。つい、強く訊きかえしてしまう。

「たけ.....相座君は、くやしくないの？」

「武士でいいよ、井川さん。くやしいけど、また勝負ができるって思うんだ。目標^にが逃げなかったっていうか」

「目標ね」

「井川さん、今日は有馬とかぶらなかったな、課題曲。なんかよくかぶってたのに」

「.....かぶるようにしてるのに、今日は外したのよ」

え？　と武士が目をしばたいた。

「じゃ、わざと？　勇気あるう。俺、かぶっ
ちやつたときは、怖くなるけどな。ストレートにわかつちやうじやん、練習の成果」

「武士のは、どんなできばえにしても、聴いてて悲しくなる演奏じゃないと思う。でも、

有馬のは、完璧に弾けば弾くほど、聴いてて悲しく、苦しくなるっていうか。そう思わない？」

武士は首をかしげた。

「弾きながら何考えてたっていいけど、結果としては演奏が正確かどうかだろ？　練習量とか体調とかは、音に表れると思うけど……有馬の演奏が苦しそうには思えない」

「ものすごくがんばってます、だから認めて

ください、とにかく譜面どおりにがんばってるんです、よけいなことは何も考えてません

つけ加えてません手抜きしてません、そう言ってるように、わたしには聞こえるの。正

確きのほかに何もないうて。曲に対する思いとか、湧いてくる感情とか、この曲で伝えたいこととか、ひとつも持っていない」

母親の操り人形、ママの言いなりに弾くロボット、感情のない譜面のしもべ——それが「コンクール荒らし」有馬公生に聴衆がつけたあだ名だった。有馬のお母さんは音楽大学でピアノを専攻し、有名な先生に師事していたらしい。

そのお母さんが、プロのピアニストとして活躍できず、音楽教室の先生になった。かなわなかった夢——世界を飛び回るプロのピアニストになる夢を、息子に押しつけているのだと、コンクールを聴きにくるみんながうわさしていた。

そんなことをちらつと聞いたのは、わたしも最近だ。それとは関係なく、わたしは有馬

の小学生になってからの演奏が嫌いだっただ。
聴いていて、つらくなってくるから。

光り輝いていない。光がないから、影もな
い。つるつとして真っ平らで、上っ面を滑っ
てゆくような引つかかりのない手触り。

がんばってます、正確に弾いてます、譜面
に pp と書かれていたら弱々しくそつと鍵盤
に触れ、 sfz と指示されていたらその音

だけを特に強く鍵盤をたたき、滑らかなス
ラーとめりはりの利いたスタッカートはきつ
ちりと弾き分け、記号どおりにダンパーペダ
ルをふんで音を響かせる。譜面に指示される
ままに正確に弾けばいいんですよ、よけい
なこと考えてませんから.....そういうつまん
ない演奏。聴いてて息苦しくなる、かちかち
の演奏。

そう、ピアノを全然楽しんでない演奏よ！

ピアノを楽しみ、楽しさを聴いている人に伝えたいという感じが、全然ないの。

とうそうしん

勝ちたいという闘争心がむきだしの演奏のほうか、まだ聴いてて息苦しくない。

「いつそ心のない機械になりたいのかしら、有馬は」

「そんなこと……ないだろ？ あいつだって、人間だし。あいつが友だちと遊んでるの、見たことあるぜ。笑ってた」

武士が言いきったので、わたしは意外だった。

「だとしたら、よけいに！ わたしはあいつが、楽しくてたまらない感じでピアノが弾

かがや

ける、いきいきと輝くような音でピアノを鳴らせる、それを知ってるの。武士は『本当の有馬』を知らないでしょ？ あいつの『本

さい

当』は、いちばん最初のステージ、五歳のときの演奏にあった……なのに、あいつはどん

ふめん

どん、機械になつてく！ 譜面再現ロボット

に！」

びしょう

へえ、と武士が微笑した。

おれ

「『本当の有馬』ね。俺にとっては、あの
ノーマスの有馬がすべてだけど？　で、有馬

ちが

かいしゃく

に、譜面どおりの今とは違う、自分の解釈
つてのが入った演奏があるとしたら？　もし
もそうなれば、有馬には積み重ねてきたテク

しんさ

ニツクがあるだけに、審査で減点にできない

びみょう

っ

微妙なところを突いてきて、手のつけよう
がないかもな。俺もがんばろ」

じゃ、また、次の会場で、と武士は手を上

ふ

ぬ

げて、吹き抜けで全面ガラス張りのロビーに

ぬ

ある自動ドアを抜け、駅前ロータリーにかか
る歩道橋へと歩いていった。ご両親らしい人

ふ

たちが歩道橋の上で、手を振って合図してい
るのが見えた。

い

か

入れ替わりに落合先生がやってくる。

「相座君.....どうして急成長したのかしら。
体まで大きくなったみたい。男の子はそうい
うところがあるのよねえ。男子三日会わざれば、
かつもく刮目して見よって」

難しいことを言いながら、先生はケータイ
をバッグから取りだし、電源を入れた。コン
クールの会場では電源を切るのがマナーだから。
ら。

「あら、井川さんからメール.....絵見、ご両
ちゅうしやじょう親が駐車で待ってるわ。もうお帰りなさい
ね。ほら、荷物はここ、コートを着ないと
外は寒いわ」



二次予選、今度は当たった。有馬とわたし
は課題曲に同じ曲を選んだと、当日のプログ
ラムでわかった。もう、うれしくてたまらな
かった。

二次予選の課題曲の指定は一次予選と同じ

で、そのうち一次で選ばなかったものになる。わたしも有馬もベートーヴェンのピアノソナタ第23番へ短調^{作品}Op.57第3楽章アレグロ・マ・ノン・トロツポ——^{つうしょう}通称「熱情ソナタ」の第3楽章を選んだのだ。

コンクールで有馬は、課題曲にある限りベートーヴェンを一度は弾^ひいてくることが多い。今回、一次でハイドンにしたので、二次こそ……本選では、予選で弾いたうちの一曲を弾くのと、自由曲だからだ。

わたしはそう読んだのだ。そしてベートーヴェンの数あるソナタから指定された十五曲（の一部の楽章）を聴^きき比^{くら}べ、楽譜^{がくふ}を見比べて、真剣^{しんけん}に、慎重^{しんちよう}に自分の一曲を選んだ。当たった。

同じ曲だ。「熱情ソナタ」第3楽章。

もしも一位になれなくても、いつものように審査員^{しんさいいん}から有馬の下の順位にされても、

聴衆には、どっちが心を打つ演奏をしたか、ちゃんとわかってもらえる。

わたしは、有馬を否定することができる。

しん さ いん

もう、審査員には期待していない。したらがつかりするから。審査の方法がほかにはないのは、わたしにはどうしようもない。

う

ちようしゆう

わたしには、ホール客席を埋める聴衆という、おおぜいの味方がいる。

はくしゆ

聴衆の拍手の大きさが、わたしの演奏を認め、有馬の機械のような演奏を否定してくれる。

わたしはひたすら練習した。

「熱情ソナタ」第3楽章の指示は、アレグロ・マ・ノン・トロツポ——速く、しかしはなはだしくなく。

つうしよう

けれど、「熱情ソナタ」の通称にふさわしい、秘めた思いの駆けめぐる曲だ。

か

この曲でわたしが伝えたいのは、まさに情

熱だった。ピアノへの熱い思いを聴衆に、有馬にぶつけてやる。ピアノは情熱の表現手段で、常に人を感動させるためにあるってことを、報^{しら}せたい。

強く、強く、弱く、弱く、強く弱く、優^{やさ}しく激しく、わたしはピアノを響^{ひび}かせる。わたしだけの音を鳴らす。

曲想を完全に作りこみ、わたしは二次予選^{のぞ}に臨んだ。

今回も有馬は最後の演奏、わたしはその直前だった。

「最高^{ぶたい}の舞台。興奮してもう、震^{ふる}えが止まらない」

落合先生にそう言い残し、わたしは、本当に震えながら、ステージに立ち、ライトを浴びてぽつんと置かれている黒いピアノにむかった。

弾^ひきはじめはスムーズだった。手首が硬^{かた}くなっていない。思ったところへ指がいく。

はっけん

わた

ある

おど

指が白鍵と黒鍵とを渡り歩きながら踊り、

けんばん

なめ

ならんだ鍵盤の上を滑らかに左へ右へと移動する。

き

やさ

音もよく聴こえている。強い音も、優しい音も。冷静に音が聴けている。

すてきだ。

な

ひび

わたしが理想とする音が鳴り響いている。わたしの指が、手が、体が、わたしだけの音を生みだしている。

これがわたしのピアノ、さあ、聴いて。

こうたい

こ

左、右、左と主題が交替するパートを越

ぜんきゆう ふ

いつしゆん

え、やってきた全休符の一瞬の間、無音に

の

すべての感情を載せる。

次の左手の和音が、無音を引き立て——こ

ふく

こでミスした。客席の雑音を含めてすべての音が静止し、それを楽しんだわたしは、

（あ、休符が長すぎたかな）と、思ったのだ。

それで、次の和音で左手のナチュラルを忘れた。黒鍵に触れたのだ。すぐに指を滑らせて白鍵を押したけれど、急に心臓の音が大きくなった気がした。

続くピアノシモ、右手だけ、音がうまく響かない？ 代わって左手の二分音符、たったひとつの音しか鳴らないピアノは心許ない。和音が欲しい。

でも、求めた和音の響きは濁った。右の小指が鍵盤を外したのだ。

わたしの情熱が冷めてゆく。不安が広がる。

もっと速く弾けばよかった？
もっと音を大きくしてゆけばよかった？
——急に鍵盤が冷たく感じられた。

それまでわたしの体温と同じ温もりを保っていたはずの鍵盤が、冷たく、重く、今まで

とまったく違^{ちが}う物になつてしまつたみたい。
ピアノとの一体感を、わたしは失つた。
どうしよう。

つかまえていたはずの音が、指のすき間から、勝手気^にままに逃げてゆくみたい。

わたしの気持ちを、このピアノは表現してくれない。意のままに、ともに、歌つてはくれない。どんなに思いをぶつけても、空回りするばかり。

もつと訴^{うった}えるようにねばつて弾けばよかった？

もつとささやくように軽^{かる}やかに弾けばよかった？

わからなくなつたまま、曲にかけたはずの情熱を、ピアノとの一体感^{と もど}を取り戻せずに、わたしは弾^ひき終えた。

拍手^{はくしゅ}は大きかつた。でも、一次予選ほどではなかつた。

『プレッシャーに負けたな』

『自分に酔^よいすぎた』

『もっとうまいかと思ったのに』

『強くなったり弱くなったり、音ががたがたしてた』

『いや、後半は逆に強弱の差が乏^{とぼ}しかっただろ？』

客席でささやかれる勝手な感想が聞こえる気がした。みんながわたしを、冷たい目で見ている……気のせい、気のせい、気のせい……。

わたしが舞^ぶ台^{たい}袖^{そで}にひっこむと、落合先生が「お疲^{つか}れさま」とだけ言った。

ああ、それしか、言えないんだ……。

わたしのひざから力^ぬが抜けた。がくつとひざを折り、くずおれたわたしの右手首を、先生がとっさにとらえる。

「痛いっ」

「絵見？　手首が痛い の？　今まで気づかなかつた.....？」

おく ば

わたしは奥歯をかみしめてうなずいた。

と ちゅう

演奏途中では、痛くなかつた。が、実は

ひ

練習のとき、長い時間弾いていると、痛みだす気がしていたのだ。でも、気づかないふりをしていた。気にしていたら、ピアノが弾けなくなる。

おおぜいの前で、自分を表現できなくなる。

有馬を否定する機会を失う。

「冷やしたほうがいいかしら。明日、必ずお医者さんに行きなさい、いいわね」

い か

わたしと入れ替わりに、有馬がステージへと進みでていった。

よ ゆう

けつきよく、有馬は余裕で二次予選を一位通過した。けれどそれはあとから聞いたこと

はく しゅ

で、拍手がわたしより大きかつたかどうかは

知らない。客席にいた両親がやってきて、事情を聞き、すぐさまわたしを知り合いのお医者さんへ連れていったからだ。

練習しすぎて腱鞘炎けんしやうえんになった、と診断しんだんされた。手の成長が、今いちばん著しいいちじるのも関係しているらしい。

そのまま有馬は彩木コンクールで二年連続優勝し、わたしは冬の全響ぜんきやうコンクールへの出場を断念させられた。

休んでいるその時期に、手が大きくなり、らくらくと一オクターブが押せるほど指が広げられるようになって、背も伸びた。

一方、有馬は全響コンクールも含めてふたつのコンクールで優勝し、ウリエ国際コンクールという海外からの参加者ばかりのコンクールで、前年に続いて連続入賞した。

「コンクール荒らし」の悪名はますます広まったらしい。けれど、彼を倒せる実力があ

る人も、日本の同世代にはまだいなかった。
武士が少しずつ、有馬を追うように、本選の
上位に食いこんでいくようになっただけだ。

わたしの復帰は、小学六年生の夏、毎報コ
ンクールの予選からだった。

今度こそ、とわたしは曲を選んだ。

今回も、課題曲のひとつにベートーヴェン
のピアノソナタがあった。

課題曲リストを見ると、だいたいは、同じ
くベートーヴェンのソナタを課題曲としてい
た去年の彩木コンクールとは、違う曲だ。唯
一、

「月光ソナタ」の第3楽章だけが、同じ
だった。十二曲の中から一曲を選ぶ。

わたしが選んだのは、ピアノソナタ第8番
作品

ハ短調Op.13第1楽章——通称「悲愴ソナタ」
の第1楽章だった。若き日のベートーヴェン

自身がつけた「悲愴」の通称のとおり、冒頭
から嘆くようなメロディが続く。そして、感

傷とせつなさを表現したようなメロディに変わる。

これが当たった。

有馬も同じ曲を選んだのだ。

イメージを作りこむため、弾くよりもま
ず、くり返し譜面ふめんを読んではイメージをふく
らませる。

ここは悲しく、ここは激しい怒りいかで、悲し
かったときのできごとってなんだったかし
ら、怒おこったのはどんなとき、わたしは自分の
体験をひとつひとつ思いだしては、譜面に重
ねてゆく。

（たとえば、大好きなアイスバーのソーダ味
が売り切れで、ミルク味とチョコ味しかな
かったとき。ソーダ味が食べたいのに。これ
がいちばんささやかな悲しみや怒りとして
——）

大きな悲しみは、有馬の裏切り。

大きな怒りも、有馬の裏切り。

コンクールのたびに、有馬のピアノ^きを聴いて感じる、怒りと悲しみ。

そして、練習、練習、練習。ピアノを弾きまくる。

失った悲しみから来る怒りと、不条理に苦しむ怒りとは、違^{ちが}う怒り。それが「むかついてるだけで、がんがん^{けんばん}鍵盤^{なぐ}を殴っている」ように聴^きこえてはダメだ。

誰^{だれ}もが持つさまざまな怒りに、共鳴するように。

悲しみも愛^{いと}しさもせつなさも、曲に乗せる。そして、全体は物語になり、奥^{おく}深い豊^{ふか}かな広^ながりを持^なっているみたい^{ひび}に、音を鳴り響^なかせる。

強く大きいだけじゃない、弱^{やさ}く優^{けんばん}しく鍵盤をなでるような音も、鳴り響^なかせるのだ。

また譜^ふ面^{めん}を読んで、イメージをふくらませ

る。

またピアノを弾く。弾く、弾いて、弾きま
くる。

わたしはピアノの下に布団を敷いて眠っ
た。部屋に籠もった残響、音とともに壁に
染みこんだはずのわたしの思いまですべて、
逃さずにとらえて自分の内に抱えこみたかつ
た。

そして、予選の日.....わたしの演奏順は、
有馬の直前だった。

演奏前、出場者の席はステージの袖に用意
されている。パイプいすが五つ並べられ、こ
こで自分の番を待てるのだが、すなおにそう
する人は少ない。他人の演奏がまともに聴こ
えてしまい、よけいなことを考えるからだ。
いすには、二人前の演奏が終わるときまでに
つけばよいと認められる場合が多い。

うまければ、わたしにはあんなふうでき

ないと落ちこみ、失敗すれば、わたしもやつ
ちやうんじやないかと不安^かに駆^{しつ}られる。

男女別に更衣室兼控え室に当てられた部屋
——ホールによって演劇の楽屋だったり、鏡
を用意した会議室だったりする——で譜面^{ふめん}読
みやイメージトレーニングをする人、廊下^{ろうか}で
首^{かた}や肩を回したり、ストレッチをして体をほ
ぐす人、うろうろしたり、縁起^{えんぎ}を担^{かつ}いでおま
じないをする人、さまざま。保護者——親
がつきっきりの人も少なくない。

自分の演奏の番になったとたん、緊張^{きんちよう}が
ピークになって、ステージの上までぎくしゃ
くと歩いてゆき、おじぎもままならない人、
反対^{ちよう}にリラックスしてステージに立ち、聴^ひ
衆の顔もよく見えて、楽に弾きはじめての
に、いいぞ、と思つたとたんにどつと汗^{あせ}が出
てきて手^{ふる}が震えはじめる人、これもさまざま

で、同じ人でもコンクールのたびに^{ちが}違うこと
だっている。

みんながみんな、プレッシャーと闘い、極
度の緊張の中で、なるべくミスをしてないう
に、課題曲を弾く。

ミスをしたくなくて、ひたすら練習する。

みんな、同じだ。

わたしも、たぶん有馬も。

^{ぶたいそで}舞台袖のパイプいすについてもまだ譜面を
見ながら、イメージを高めていたわたしの名
前が呼ばれた。ステージに立つ瞬間だ。^{しゅんかん}

新調した青いドレスのすそをさばきなが
ら、わたしが立ちあがり、一步ふみだすと、
パイプいすに座る有馬が視界の隅に入った。^{すわ}
姿勢を正している。弾く前から、すでに機械
のようだ。全身が機械でできている、感情の
ないロボットだ。^{すみ}

有馬を視界に入れたことで、わたしの胸の
中で、^{ほのお}炎が激しく燃えあがった。

（有馬、そこでわたしの音を、わたしの響き
を聴け^きばいい！ あんたを聴き^き惚れ^ほさせてあ
げる！ 本当のピアノ、本物のピアノに気づ
かせてあげる、本気にさせてあげる！）

わたしは感情をこめ、何か月かピアノが弾
けずがまんしたくやしき、ようやく弾ける喜
び、未来への不安や希望、ごちやませになっ
て湧^わいてくるそういった気持ちすべてをぶつ
けた。

響け、わたしの音。

届け、わたしの心。

かがや

輝け、わたしの姿。

けんばん

十本の指が、八十八ある鍵盤の上で、走
り、踊り、嘆き、歌い、叫^{さけ}ぶ。

な

わたしの思うままに、ピアノが応えて鳴り
渡る。

これがわたし！

ホール全体をわたしの音が、わたしの思いが、満たす。

ちようしゆう

し

聴衆全員を包み、聴衆全員の中へ染みこんでゆく。

聴いて！

心に響いて！

これがわたしのよ！

ねえ、ピアノってすごいでしょ？

ピアノは美しい、ピアノはすばらしい、ピアノはわたしのすべてを表せる！

き

聴け！

な

ひび

鳴り響け！

わたしは、自分を表せるピアノが好き！

ざんきよう

——最後の音の残響が、静かに、みんなに

と

溶けこんでいった。

よ いん

いつしゆん

せいじゃく

せいだい

はくしゆ

余韻……一瞬の静寂のあと、盛大な拍手がわき起こった。スタンディングオベーションをしている人も何人かいた。

わたしは本当に誇^{ほこ}らしくて、ステージの上
で初めてほほえんだ。

（有馬では、きつとこんなに拍手をもらえない、
たたえられない！ わたしの音が、思い
がみんなに届いた）

深く一礼し、舞^ぶ台^{たい}袖^{そで}へ戻^{もど}る。

パイプいすに座^{すわ}る有馬をにらみつけた。

有馬は人形のように身じろぎひとつせず、
軽く目を閉じていた。わたしを見ようとも、
気配を感じてわずかに体を動かすことも、し
なかった。

.....わたしのピアノに、何も感じなかった
のだろうか.....有馬は。

（だったら.....かわいそう）

ふと浮^うかんだ言葉に、わたしは自分でも
驚^{おどろ}いた。

（かわいそう？）

そうよ、有馬は損^{はく}してる。お客さんから拍

しゅ
手をもらおうとしないなんて。感動したって
言ってももらえないなんて。

すてきなことなのに。

有馬だって、やろうと思えばできるのに、
やろうとしないなんて、絶対損してる。

一位を取るため……だろうけど、本当は、
本心はなんのために、有馬はピアノを弾いて
るんだろう。有馬は、本心を……ピアノを好
きって気持ちを、見失ったの？　なぜ？　い
つから？

有馬は、ピアノを弾くのが、好き……なん
だよね？

そしてわたしは毎報コンクール予選で、毎
年参加しているこのコンクールでは自己最高
の、二位通過をした。武士が三位だ。武士に
勝ったのはひさびさだった。

ろうか
結果発表の直前、楽屋の前の廊下で顔を合
わせたわたしと武士が、結果を見ようとホワ

イエに出てきたとき、なぜかあたりがざわついていた。

どうせまた、有馬が一位になったことが、ひんしゆくを買ったんだろう。

わたしは^{よ ゆう}余裕でそう考えられるくらい、思いつきり、全力を出しきった演奏ができたのだ。

有馬はそのあと、半月後の^{しら せ}白瀬コンクールにも出て、モーツァルトを弾いて勝ったらしい。そのとき、弾き終わったあとのホワイエで、結果発表前に^{そう どう}騒動を起こしたと、うわさに聞いた。お母さんともめたとかなんとか.....。

くわしいことは知らない。足をひっぱり合うようなうわさなんて、いちいち気にしていたらやってけない。

毎報コンクールの本選でも、わたしは順位を落とさないことを目指し、練習した。各地

の予選から、さらに強力なライバルたちがやってくるからだ。

あつとう

それらライバルを圧倒し、さらに有馬を否定してやる。

わたしが選んだ次の曲は、ショパンのピアノ即興曲第4番嬰ハ短調Op.66アレグロ・ア

ソツキョウキョク

えい

作品

ジタート——通称「幻想即興曲」だ。

つうしょう

げんそうそツキョウキョク

胸をかきむしられるような、激しく心をゆすぶられる曲にした。気持ちをこめて、思

ひ

っきり弾けるように。

なのに。

「あんなに去年、弾いてほしいうって思っただのに、今さら！」

本選当日、会場に着いてすぐ、手に入れたプログラムを大急ぎで開いたわたしは、声を上げてしまった。

有馬がベートーヴェンを連続で選んでいた。そうはならないと予想して、わたしはショパンにしたのに！

せめて、同じショパンなら比べようがある

のに.....。

有馬が選んだのは、ベートーヴェンのピアノソナタ第14番嬰ハ短調Op.27 - 2 第3楽章プレスト・アジタート——通称「月光ソナタ」の第3楽章。わたしが去年の彩木コンクール一次予選で弾いた曲だ。

真っ向勝負できなかった曲だった。

でも.....、とわたしは自分をなぐさめた。
(これがモーツァルトだったりしたら、本当に比べようがないけど。作った曲が『月光』

第3楽章になんともなく雰囲気かぶっちゃったから、ショパンは生前自分では『幻想即興

曲』を発表しなかったって説もあるらしいって聞いた。たしかにどっちもアジタート——『激しく』という指示がある曲。聴いた人たちに、激しさを比べてもらうことはできるはず)

「.....いいわ、有馬がどんなふう^ひに弾くか、

聴いてやろうじゃない。わたしはどうするか決めてる。激しく、激しく、思いをぶつけるように激しく！」

本選、わたしはラストの演奏になった。わたしの前の前、最後から三番目が有馬だ。

わたしはステージ裏のモニター室で、モーツァルトのソナタを弾き終え、私服に^{き が}着替えていた武士とともに、有馬の演奏を画面越しに見つめていた。

「月光」第3楽章プレスト・アジタート。より速く、激しく。

有馬の指が正確に^{けんばん}鍵盤^おを押さえ、高音へ、低音へと、^{む だ}いっさい無駄のない動きを見せている。変に手^ふを振りあげてかつこついたり、音をのばしぎみにねばったり、そういう「うまそうに見える演技」を、有馬はいっさいしない。

あいかわらずの有馬だった。

感情のかけらをわずか一ミリグラムさえも見せない。コンマ一秒もテンポがずれない。

音の響き^{ひび}を自由にのばせるフェルマータでさえ、計ったよう……元になる音符^{おんぷ}、四分音符なら四分音符の三倍の長さと決めているようだ。

「……ちよつと速いかな、正確だけど」
武士がそうつぶやいたとき、不意に演奏が乱れた。

右手が主題を歌いはじめたところだった。
いろいろな色の小さな宝石の粒^{つぶ}を集めた飾り^{かざ}のように、きらきらと細かく鳴るはずのトリルがもたつく。いえ、もたついたのではなく、強く鍵盤^{けんばん}をたたき、大きく鳴らしすぎたのだ。その分鍵盤からの指離れ^{ゆびばな}が遅れる^{おく}。

「あれ？」
武士がモニターに注目した。
「どんどん速くなってる？ 音が……大きい。デクレッシェンドが音をちゃんとしぼれ

てない。^{おさ}抑えきれてないっていうか」

おかしいな、と武士が^{まゆ ね}眉根を寄せて^{うで ぐ}腕組みする。

ずいぶん^{みみざわ}耳障りな音だ。^{ふ めん}譜面の指示も無視している。抑える音も、^{なめ}滑らかに^ひ弾くべきところも、全部、ぶつぶつと音がとぎれていて、つながっていない。

^{ちが}違う、違う、全然違う、こんなの「月光ソナタ」じゃない。ただうるさいだけ。

やめて……。

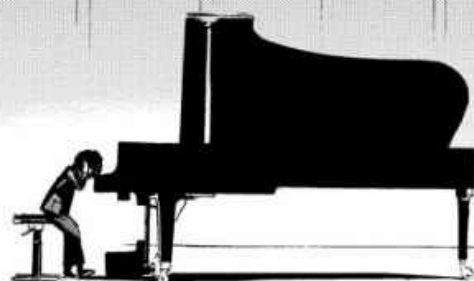
^{ちが}こんなの、違う、やめて！

——^{とつぜん}突然、演奏が止まった。有馬は頭を^{かか}抱え、うつむく。泣いているようだった。



僕は

ピアノが
弾けなくなった



「うそ……だろ」

武士のうめくようなつぶやきで、わたしも
我に返った。ぼうぜんとしていたのだ。

違う……こんなの、有馬じゃない。

「違う！」

わたしは^{さけ}叫んでいた。全身が^{ふる}震えてきた。
何が起きたの？

ぞわぞわと背筋が寒くなってくる。

「うわあっ」と大声を出して、武士がモニ
ター室を飛びだしていった。

ドアのところで武士にぶつかられそうにな
りながら、落合先生が^か駆けこんでくる。

「絵見！」

いつの間にかうずくまっていたわたしは、
先生に抱えられて、楽屋へと^つ連れ^{もど}戻された。

そして、直後のわたしの演奏は……どう
だったのか、よく^{おぼ}憶えていない。心ここにあ
らず、どうしてこの場でわたしがピアノを^ひ弾

いているのか、「幻想即興曲」で何が伝え
たかったのか.....わからなくなっていた。

本選の入賞者に、有馬の名前はなかった。
入賞者のいちばん上に武士、いちばん下に
わたしの名前があった。

だ せい ひ
惰性で弾いただけのわたしの名前が。



有馬公生は、次のコンクールに姿を現さな
かった。

その次も。

その次も。

もど
(きつと有馬は戻ってくる。簡単にピアノを
やめられるわけがない。

幼いころから毎日何時間も弾き続けて、生
きることのかなりの部分をピアノに占められ
て、もう、弾くことは息をするのに近い。

わたしがそうなんだから、有馬だって、

きつと)

有馬の復歸を、わたしはひたすら待った。

わたしと武士は、有馬を待ち続けて、中学生になった。

一年が過ぎ、ふたたび毎報コンクール。今度こそ帰ってくる、このコンクールでの忘れ物を取りに、自ら犯した恥^{おか}を雪ぐために、と信じた有馬の姿^{はじ}は、なかった。^{すす}

この中学一年時の毎報コンクールでは、わたしは一次通過もぎりぎりだった。けれど、武士は一位通過になった。

有馬がいないとわかるたび、落ちこんでやる気が出なくなったわたしに比べ、武士は有馬にそれほどこだわりはなかったのかしら。

一次通過者を発表する紙の前で、なぜかくやしそうに結果を見上げる武士に、わたしは^{たず}尋ねた。

「有馬がいなくても、がんばるのね」

「.....俺^{おれ}さ、勝ち続けるよ。正確に演奏し

て、すごい^{わざ}技だっと思われ^ひることで、有馬と
比較^{ひかく}され続けるんだ」

わたしはその言葉にほおを打たれた気がした。武士はわたしと同じく、有馬にこだわっ
てる。ピアノを弾^ひく理由が、有馬にある。

でも、それって、武士自身はどこにいる
の？

確かに、結果を見ている人たちの口からも
れるのは、

「有馬君みたいになるのかな、相座君も」
「有馬君がいたら、相座君と、どっちが勝っ
たかしら」

「有馬君には、相座君もかなわなかっただろ
うな」

と、武士の話題なのに有馬の名前ばかり
だった。

「あんなことばかり、言われたいの？　有
馬、有馬って」

わたしが小声で言うと、武士はにやり、と
笑った。

「比べ続ける限り、みんな、有馬を忘れない。有馬のあの正確な演奏を、確かな技術おれを。だから、俺はあえて、有馬と比べられるように弾くひ、有馬が帰ってくる日まで」

武士は親指を立てた。

「俺が、有馬の居場所をキープしとく！
な、えみ……井川さん、いい思いつきだろ」

「……おかしい、笑っちゃいそう」

「は？」

「だって、そんなこと、武士以外に思いつかない」

「そ、そうか？」

うれしそうな武士に、わたしはまっすぐむきなおった。

「有馬の居場所、確保するのはまちがってないと思う。だって、わたしたち、有馬とまだ勝負がついてない。きっちり、元の位置もどへ戻ってきてもらわなきゃ」

「ああ、まだ追いついてない、追いこしてもいない。いないヤツを追いかせるわけがな

い。だよな、え……」

「絵見でいいよ、武士」

武士が大きくなずき、わたしもくなずき返した。

けれど、二次予選でまたな、とホールを去る武士の背中を見送ったわたしの目から、
なみだ
涙がこぼれた。

（……ピアノが冬の間^ひ弾けなかっただけで、わたしはつくづく思った。どうなったって、ピアノを弾きたい、わたしはピアノでしかすべてを語れない、ピアノに生きるしかないんだって。

わたしのことを、聴いた人みんなが忘れられなくなるように、ピアノを弾く。

だれ
誰かに比べられない、わたしだけのピアノ
きおく
の記憶を、みんなに刻みつけたい。

ちが
有馬は違ったの？

これでいいの？ 本当に、有馬はこれでい

いの？)

わたしは、有馬の名前がない結果発表を振^ふり返^{かえ}り、人々の頭ごしににらみつけた。

有馬だって、わたしの心にピアノの響^{ひび}きを刻んだ。

あの最初の演奏は嘘^{うそ}だったの？

有馬、なぜあんたは現れない。あんたにとってのピアノって、なんだったの!?

わたしのくやし涙^{なみだ}は止まらない。

勝手にわたしの心に響^{ひび}きを刻み、勝手に機械になり、勝手にいなくなつた。

最初の演奏の中にいた本当の有馬を信じ続けたわたしを、勝手に裏切つてばかりだった。

本当の有馬を見せず、わたしに嘘^{うそ}ばかりついていた。嘘をついたままで消えた。

「有馬の嘘つき.....ひどい嘘つきだ」

涙が流れるままに、わたしはホワイエの中

央に立ちつくしていた。

ちが

おどろ

すれ違^{ちが}う人たちが驚^{おどろ}いても、ぶつかりそう
になつてあわててよけても、かまわずにわたしは立ちつづけ、涙もぬぐわなかった。

（帰^{かへ}つてこい。もう一度わたしの前に、帰^{かへ}つてこい、嘘つき有馬）

嘘^{うそ}ついてもいいから、帰^{かへ}つてこい――。

3



公^{こう}生^{せい}
は優^{やさ}
しすぎる

澤^{さわ}部^べ
椿^{つばき}

あれは、今から四年半は以前^{まえ}のできごと
と.....私が小学四年生の冬の初めだった。冷
たい雨が降っていた。

私、澤部椿は、有馬公生とチエルシーを捜して、雨の中を走りまわった。

チエルシーは、隣家の有馬家の飼猫だ。真っ黒なメス猫で、まだ大人になりきっていなかったと思う。

もともと私と公生が、その半年ほど前、神社の境内で遊んでいて、社殿の縁の下に段ボール箱に入れて捨てられていたのを、見つけたのだ。



小学四年生のある夏の日の放課後。無人の神社の境内で、素振りや壁当てをして私が遊んでいたときだった。遊びに出かける前に、一緒に遊ぼうよ、と誘ったけれど、ピアノの練習があるから無理、と断ったはずの公生が、神社に現れたのだ。

「レッスン、終わったんだ？　じゃあ、

キヤツチボールしょ？」

私が大喜びで誘うと、黒縁メガネを押しあげて、公生はあいまいに笑った。

「なんか、お母さん、疲れたみたいでちよっ

と休憩。僕、おつかいに来たんだけど、こ

こでお祈りしようと思って」

「ピアノのコンクールで勝てますようにって？」

公生はかぶりを振る。

「勝つのは結果だよ。緊張しないで、練習の成果が発揮できますように……それと……」

うなだれた。

「どうしたの？」

「……ううん。なんでもない」

公生は拝殿にむかって二回手をたたくと、目を閉じて熱心に祈っていた。

このときの私はまだ、公生のお母さん――

有馬^{さき}早希さんが、公生のピアノのレッスン以外は、ぐったりしていることが多く、家事がなかなかできないほど体調が悪くなっているとは、知らなかった。公生のお母さんが数か月後から入退院をくり返し、ついに長期入院するのはさらに一年近くあとのことだ。

あのとき、公生が^{いの}祈っていたのは、きっと、「お母さんを元気にしてください」だったんだと思う。

「公生、せつかく来たんだから、遊んでこよう。ちよつとだけでも」

私の^{さそ}誘いに、公生は数秒迷い、「うん……じゃあ、少しだけ」と、承知した。

公生がゴムボールを投げ、私がプラスチックのおもちやのバットで打って、公生が拾いに行く。

何度かくり返しているうちに、私の打ったボールが大きく飛び、無人の社^{しゃ}殿^{でん}の縁^{えん}の下^{した}へと転がりこんだ。

拾いに行った公生が、石畳にひざを突き、縁の下をのぞきこんだまま動かない。

「どうしたの？　手が届かないくらい奥に入った？」

私が近づくと、公生は振り返り、

「しーっ」と唇に人さし指を当てる。

「あの段ボール箱から、音、聞こえない？」

縁の下に古びた小さな段ボール箱があり、

ゴムボールがすぐ脇に転がっている。どうやら、ボールはこの箱に当たったらしい。箱のふたは閉じられ、合わせ目の真ん中を一か

所、軽く粘着テープで留めてあった。

私もしゃがみこみ、耳をそばだてた。

がさごそ、がさごそ、箱の中でこすれるような音がする。

「なんだろ？」

私がつぶやくと、公生が意を決したように

手を伸ばす。

「開けて見てみようよ。きつと生き物だ。出られないんだよ、箱から」

気が弱そうに見えて実のところ公生は^{こう き}好奇心が強いし、^{しん}優しいからほっとけない質だ。^{やさ}「え、本気？　いいけど、かみつかれたらやばいし……私がやる」

ピアノを弾く公生の手^ひにケガをさせたら、公生のお母さんに殺されるんじゃないかと思うくらい、しかられる。私は公生を^お押しのけ、段ボール箱を引っぱりだした。

みやう……みやあ。

細い声が、ふたのすき間からもれてきて、私たちは顔を見合わせた。

^{ねこ}「猫！」

急いで粘着^{ねんちやく}テープをはがし、ふたを開くと、真っ黒な子猫^{ぴき}が一匹、おびえたようにうずくまっていた。生まれて間もなく、というほど小さくはない。けれど、大人の猫ほど大

きくもなかった。

「かわいい」

と、私よりも先に、公生が声を上げた。

「ねえ椿、この猫ねこ、捨てられたんだね。箱から逃げだして、うちに戻もどれないようにされて」

「ひどいことするね！」

公生の言葉に私おこが怒ると、公生はじつと黒い子猫を見つめた。

「.....僕ぼく、この猫、うちに連れて帰る」

「マジで？」

私おどろは驚いた。あの、すごく怖い公生のお母さんこわが、許してくれるとは思えない。公生が遊ぶのだって、ばれたら怒おこられるし。でも、遊ばないと公生の目がどんよりして顔色が悪くなってくるから、こっそり遊ぶことにしてる。それはゆずれない。ばれないよう、うまく遊ぶんだ。

「ここでふたりで飼えばいいじゃん。ご飯運

んで」

と、私は提案した。

「ふたりじゃ大変になつたら、^{わたり}渡とか、巻きこめばいいよ」

^{りょう た}

渡亮太は、クラスメイトの男子だ。お調子者男子たちのリーダーだけど、悪いやつじゃない。

「でも、大人に見つかったら、きっと保健所行きだよ」

そう言いながら、公生がおっかなびつくり、黒猫の背に^ふ触れた。猫は^{ふる}震えただけで、^{はんげき}反撃する元気すらなかったようだ。

「お^{なか}腹空いてるんだ。こんなに^む蒸し^{あつ}暑いのに、水も飲んでないんだよ、きっと。この箱、何もほかに入ってないもん」

そう気づいた私は、急いで数十メートル^{はな}離れた手水舎から^{て みず や}両手に水をくんできて、猫の^{ねこ}口元にさしだした。

にお

猫は匂いをかぎ、夢中になって水をなめる。

かがや

公生が顔を輝かせて、水をくみに走った。

したた

合わせた両手のすき間から、しずくを滴らせながら運べる水の量はごくわずかで、私たちは

こうたい

は交替で猫に水を飲ませた。

みやうう……みやあうう。

な

あま

人に馴れていた様子^なの猫は、甘えた声を出して私たちの手に顔をこすりつけ、やがて安心したのか、横になつてうとうとしはじめ

ふ

た。呼吸のたびに猫のお腹が上下し、触れる

ぬく

と温もりが伝わってくる。

生きている。

ぼく

「やっぱり、僕、この猫を連れて帰るよ。決めた」

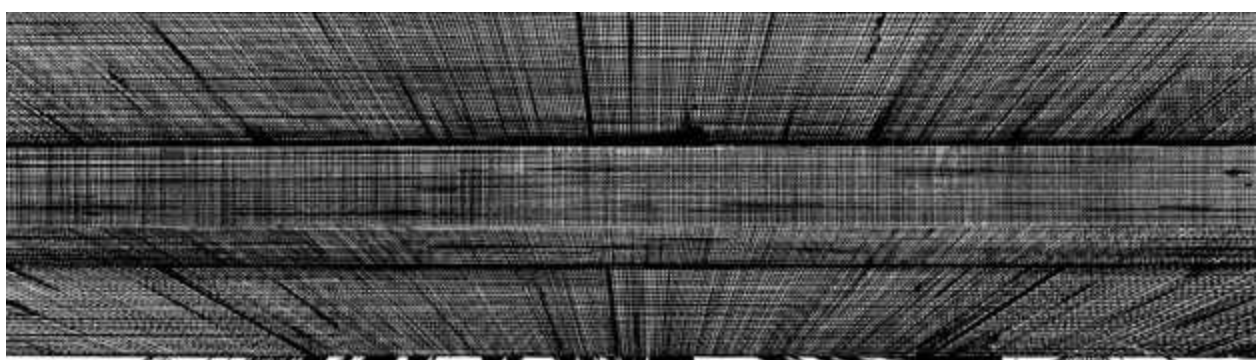
かか

公生が、猫ごと段ボール箱を抱えあげた。

ゲキオコ

「ねー、本気？　公生ママ、激怒だよ？」

「うん。わかってるよ」



くろぶち おく ひとみ
黒縁メガネの奥の公生の瞳が、きらっと

かがや
輝く。

「飼ってもらえるように、がんばってお願い
してみる。お母さんだつて、動物好きなん
だ。子どものころに飼ってた猫ねこの話、僕ぼくが小
さいころはよくしてくれたよ。三匹びきもいたん
だつて」

公生は、そう語りながら、歩きだす。

だいじょうぶ

「きっと大丈夫」

箱の中の猫にささやく。私は公生につきそ
い、一緒に公生のお母さんいっしょにお願いしよう
とした。けれど公生は断つた。

たの

「僕ひとりで頼むよ。だから、椿は心配しな
いで待ってて」

もしダメだったら、私が自分の両親に頼む
ことを決意して、ずっと、隣となりにある自宅に入
らず、公生の家の前で待った。

夏の長い日が暮れ、夕方になる。

うちの母が「椿、そこにいるの？　ご飯
よ」と呼んでも、待っていた。そして、空が
こ濃いすみれ色に変わるころ、やっと公生が玄
かん関ドアから顔をのぞかせた。
「どうだった？」

私が勢いこんで^{たず}尋ねると、公生は、マイ
ペースに答えた。
「椿、待ってたんだ。部屋にいないみたい
だったから……^{しら}報せに行こうと」

公生の家の窓から私の家の様子は丸わかり
だし、逆もまた同じだ。
「だから、どうだった？」

私は重ねて^{たず}尋ねた。答えは聞かなくても、
公生の明るい顔を見れば、わかったんだけ
ど。

公生はうれしそうに言った。
「飼えるよ！　お父さんがいって言った
ら……なんだけど、お父さんがお母さんにダ
メって言ったことなんて、一度もないもん」

「やった！ 名前、どうする？」

公生はジーンズのポケットから、包み紙がくちやくちやになったアメを取り出した。手^のに載せ、私に見せる。

「お母さんに頼^{たの}んでる間に、お腹^{なか}が空^すいてたのか、箱から出てテーブルに乗って、置いてあ^{ぼく}った僕のアメをなめちゃったんだ」

にこつとして、公生はこう告げた。

「だから、チエルシー。このアメの名前にする」



それから半年。

私はたびたび、「チエルシーを見せて」と^{となり}隣の有馬家を訪ねた。なぜか室内には入れてもらえなかったけど、公生が抱^だいてきたチエルシーと、玄関で遊^{げんかん}ぶことができた。

チェルシーを残して公生はすぐに奥^{おく}へ引っこみ、ピアノの練習をはじめる。同じような音を何度も何度もくり返し弾^ひいて……。

冬の冷たい雨が降るその休日も、私はいつものように「チェルシーを見せて」と有馬家を訪ねたのだ。

いつもはわりとすぐ公生がピアノを中断して出てくるのに、めずらしく、しばらく間があってから、公生のお母さんが現れた。

——今思うと、その少し前から公生のお母さんはなかなか私の前に姿を現さなくなり、会うたびにやつれ、やせていつていた気がするのだが、当時の私は気がつかなかった——。

「ごめんね、椿ちゃん。……チェルシーは、いなくなっちゃったの。家出したのかも……」

そう言った公生のお母さんが、どんな表情だったのか、思いだせない。私はショックを受け、即座^{そくざ}に大声で宣言した。

さが

「大変、私、捜してくる！」

か

私が外へ駆けだそうとしたとき、公生が家

おく

き おく

の奥から飛びだしてきた。おぼろげな記憶だが、泣きはらした目をしていたと思う。

ぼく

「僕が、チェルシーを見つける！」

っ

と

私を突き飛ばすようにして、レインコートをわしづかみにした公生は運動ぐつをつっかけ、雨の中へ走っていった。

「公生っ」

と、悲鳴のような声を、公生のお母さんが

おぼ

上げたことは、はつきりと憶えている。

「ダメっ!! ピアノはっ!？」

ゆか

がくっ……とくずおれて、床にひざを折る。

さが

「……やめて、公生……捜さないで……許して」

うなだれる公生のお母さんに、私はいたたまれなくなかった。

「わ、私、チエルシーと公生、捜すね」

はじ

私は弾かれるようにして、自分のかさを手に外へ出た。かさをさし、雨をすかして路地の左右を見ても、公生の姿は見当たらなかった。

公生が行きそうな場所をとっさに考え、公生とチエルシーの名を呼びながら、通学路を走る。

チエルシーを見つけた神社に行ってみたけれど、公生はいない。

「公生、雨宿りしてないし……うちに帰ったかなあ」

風混じりの雨で服がぬれ、とても寒い。

もと

きが

よう

私は自宅に戻り、ぬれた服を着替えた。幼稚園のころに使い残した「らくがき帳」を押し入れから引っ張りだすと、「まよいネコ」のポスターを何枚か作った。

ぬ

マジックインキで、真っ黒に塗りつぶした猫の姿を描く。

ねこ

か

『さがしています。名前 チェルシー 色
黒 目は金色 メス 赤い首輪』
「できた！」

これを、公園の自治会けいじばんの掲示板や、コンビニの店内やスーパーの掲示板、友だちのうちがやはってるお店に貼らせてもらえばいい。
そのとき、ふと、静かなことに気がついた。雨音のせいかと思っただけだけど.....耳すを澄ませても、いつも隣となりの有馬家からかすかに聞こえるピアノの音が、していない。
「.....公生、帰ってないんだ？ まだ見つからないのかあ」

（だったら、私もチェルシーを捜さがさなきゃ、見つかるまで、あきらめないで。公生とチェルシーと一緒いっしょに帰ってくるんだ）

家から一步出ると、冷氣が体しに染みこんできた。しかも、雨がさつきよりも激しくなっている。

いったん室内に^{もど}戻り、私はポスターをぬれないようにビニール^{ぶくろ}袋へ入れた。忘れるところだった、とポケットにセロハンテープを入れる。

「行くぞ！」

意を決してかさをさし、私は雨の街へと走りだした。

「公生一つ、チエルシーっ」

名前を呼びながら、^か駆けずり^{まわ}回る。もう一度通学路、小学校の周囲、よく遊ぶ河原、^{ようちえん}通った幼稚園、住宅街の中の児童公園、商店街……。

途中、スーパー二軒と、コンビニを三軒^{けん}、友だちのうかがやってる歯医者さんと、知り合いの美容院に頼^{たの}んで、店内にポスターを貼^はらせてもらう。

残りの二枚は、雨が小降りになったら、いつも回覧板を持ってくる自治会長のおじさん

に頼んで、児童公園の^{けい じ ばん}掲示板に貼ろう。足りなければ、また書けばいい。

「公生一つ、チエルシーっ」

どんなに^{さが}捜しても、ポスターを貼るついでに^{たず}尋ねても、公生の^{ゆく え}行方はわからなかった。

「どこかで雨宿りしてるんだよね？ それとももう、うちに帰ったのかなあ」

（だって、すごく寒いし）

寒さで決意が^{し だい}次第にくじけ、うす暗くなったこともあり、私は帰宅してみた。公生の家には、ひとつも明かりが^つ点いていない。お母さんも捜しに出てるんだろうか。

「やっぱ、いないんだ……こうしてちゃ、ダメだ」

私は、心配する母を^{と ふ}説き伏せ、^{み たび}三度外へ出た。

かさなんか役に立たないくらい激しい雨になつていた。寒くて^{ふる}震えながら、私は、とに

かく雨宿りのできそうな場所を考えた。もう一度、神社に行ってみる。

でも、公生はいなかった。

胸が痛い。苦しい。どこにも見つからない

あせりで、なんだかお^{なか}腹も痛い。どんどん暗くなつてゆく。歩道をとぼとぼ歩く私の頭の上で、またたいて街灯が点いた。

「どこ行っちゃったんだろ……」

^{えんせい}

すごく遠くの、二回しか遠征したことのな
い^{おも}広い公園が^う思い浮かんだ。

「まさか……あそこまで。あそこ、隣^{となり}の小学校の学区だし……」

でも、あそこを知ってるのは、一緒^{いっしょ}に遠征し、知らない子どもたちの縄張^{なわば}りの中で冒険^{ぼうけん}をした私くらいだ。

「行ったらきつと……帰りは真っ暗になる」
（心配するだろうな、お母さん。公生のお母さんも。

うんといっぱい、しかられるだろうな)

いっしょ

でも、公生と一緒にしかられるなんて、い

さが

つものことだし。私がチェルシーを捜して
引っぱり回したことにしとけば、きっと、公
生は私ほどはしかられない。

私はそこを目指した。



とちゅう

遠くまで行く途中、公生は渡んちのそば

ここ

の小さな児童公園で見つけた。凍えてきた
私が、温かいドリンクを飲もうと公園の入り

わき

じはんき

口の反対にある歩道脇の自販機に近づいて、

さいふ

こぜに

ポケットの財布から小銭を出したときだっ
た。

百円玉を落とし、拾おうとかがんで、ふと

すべ

だい

前を見たら、公園のブタの形をした滑り台の

どうたい

すわ

下、ブタの胴体にあいたトンネルの中に、座

りこんでひざを抱かえている人影ひとかげが視界に入ったのだ。

「あっ、公生？」

急いで私は、ホツトレモネードの缶かんを買った。こないだ、私が風邪かぜぎみだったとき、公生が買ってくれたホツトドリンクだった。

『椿はゴリラじゃないよ』

女ゴリラのくせに風邪かぜを引いた、と渡をはじめクラスの男子たちにからかわれた私に、公生はそう言って、ホツトレモネードの缶かんと、黒縁メガネの奥おくの笑えみとをむけたのだ。『椿は女の子だよ』

私は、生まれて初めて、胸が詰つまる、という体験をした。これも生まれて初めて飲んだ缶入かん いりホツトレモネードの酸すっぱさと甘あまさと温かさは、忘れられない味になった。

もう一度、うす暗い中で目をこらして、人ひと

かげ　かくにん
影を確認する。まちがいなく、レインコートを着た公生だ。

（よかった。公生がいた）

熱い缶をつまんで持ち、私は道路を渡り、
ブタの滑り台下のトンネルへ駆けよった。
なんだか泣きそうになった。本当に寒い。
ふる
震えてくる。足ががくがくする。

「公生！」

トンネルをのぞきこみながら、私が呼びかけると、公生はちらつと私を見て、驚いた顔を
一瞬だけした。雨で靴がぬれ、足がぬ
れ、手がぬれ、前髪がぬれ、顔もぬれている。目が赤く、泣いていた顔だった。
「ここにいることくらい、わかってたんだから」

ううん、わからなかった。でも、どこまでも、どんな遠くまでも捜すつもりだった。
「……椿……」

「チエルシーのポスター、作ったよ。お店と
かにいっぱい貼^はってきた」

地面に置いたかさの中に入れたビニール
ぶくろ袋を私が示すと、公生は、いやいやをする
幼い子みたいに激しく首を振^ふった。

「え、なんで？」

私が問いただしても、押し黙^おり、唇^{だま}をか
かんだまま、公生はひざを抱^かえている。

公生が左手に包帯を巻いていることに、私
は気がついた。包帯もびしょぬれで、少し汚^{よご}
れていた。植えこみのドウダンツツジの枯^かれ
葉^はがこびりついている。あちこちの植えこみ
に手をさし入れたんだろう、チエルシーを捜^{さが}
して。

って、待って。公生が手に包帯を巻くよう
なケガしてたなんて、大変だ。ピアノが弾^ひけ
ない。

「その手……」

「……^{ぼく}僕が……悪いんだ」

公生は左手を右手で押さえた。
^お

「かまいすぎた……チエルシーがひっかいて……いっぱい血が出た」

「チエルシーが？」

「僕が悪いんだ、チエルシーは悪くない！」

なんだかよくわからないけど、ケガの原因はチエルシーらしい。公生は、わっと泣きだした。

「チエルシー……、ごめん、チエルシーっ」

「うん……そうだね」

けれど、そのあと、なんて続けたらいいのか、私には判断がつかなかった。公生は悪くない、と言えばチエルシーが悪いことになるし、公生が悪いよ、というのは、泣いて苦しむ公生には言えない。

「……飲んで」

私はトンネルの入り口にもぐりこんで、鼻水までたらして泣きじゃくる公生に、ホット

レモネードをさしだした。

「暗くなるから、今日は帰ろ？　早く体ふかないと、風邪引いちゃうよ？」

公生は、ぐずつ、と^{はな}涙をすすりあげ、むせびながら語る。

「チエルシー、どこにもいなかった。ゴミ捨て場にも、橋の下にも。こんな寒い中、外にいたら、死んじゃうよ」

ひざを抱える手の包帯に、^{なみだ}涙のしずくがひとつ、またひとつ、と落ちる。

^{ぼく}「僕、何も言えなくて……お母さんが捨てに行くの、わかってたのに」

捨てに行った――。

私は、公生のお母さんに^{うそ}嘘をつかれたと知った。

すごくショックだった。

ぼうぜんとする私に、公生は語り続ける。

^{ぼく}「……僕が、いやだつて言えば、チエルシーは生きていられたかもしれないのに。……言

えなかった。僕は……お母さんに何も言えなかった」

公生がひどくしゃくりあげ、ぎゅっ、と自分自身を強く抱く。がたがたと震えている。
「みんなの言うとおりでだ。僕は、お母さんの作った、心のない人形なんだ！」

どうして公生が、自分を心がないなんて言うのか、私にはわからなかった。誰か……おおせいからどこかでそう言われたんだろう、みんな、と言うんだから。

（誰だ、そんなひどいこと言ったの！）

怒っても、どうにもならない。相手が誰かわからないんだから。

やるせなくて、許せなかった。

ひざに顔を埋めて泣く公生に、私も言葉が出ない。このままじゃ、くやしくて悲しく

て、私の胸が張り裂けそうだった。

公生が泣くのは、実はあまり見たことがない。いつもにこにこしていることが多いの

だ、公生は。めったに怒らない。

（こんなに悲しそうに泣く公生を、私が見捨てていいわけがない。こんなに苦しくなるん

なみだ

だから。こんな涙、あつていいはずがないんだから）

私は、砂まみれでざらついたコンクリートに突いたひざを、一步前へ進めた。

「そんなことない。公生には、心があるよ。いいとこ、いっぱいいっぱい、あるよ。私、知ってるもん。たとえば……」

（ええとなんだろう、いざ数えあげようとする
と、ありすぎるような、なさすぎるよう
な……いつもマイペースで、にこにこして
て、何考えてるかわからないことが多くて）

うそ

でも、公生は、嘘をつかない。

自分以外のことを、考えてる。思いやってる。気づかっている。

わがまま言わない。

「……えつと、ほら、今だって、いつしように

こうかい

けんめい、走り回っている。それは、後悔して

るからでしょ？ チエルシーに、ごめんなさい
したいからでしょ？」

うず

顔を埋めたまま、公生は泣き続けている。
心がなかつたら、悲しかったり、くやし
かったり、後悔して泣いたりしない。絶対し
ない。

「公生には、ちゃんと心がある」
でも、うまく他人に見せられない。代わり
に、にこにこする。

言いたいこともがまんする。

かく

「ただ、隠すのが上手になっただけ。自分で
も見つけられないくらいに」

かた

ふる

公生の細い肩が、ぴくり、と震えた。

こんなにも、私の胸は苦しくて.....公生の
いつものおだやかな笑顔えがおが見たくて、たまら
ない。

「だから、私が見つけてあげる。迷わないよ
うに、後悔こうかいしないように.....、ずっとそばに
いてあげる」

となり

すわ

私は公生の隣に並んで座った。

「公生のことなんて、なんでも知ってるんだから、私」

そのときは、本気でそう思ったのだった。



チエルシーが家出したのではなく、見つからないほど遠くに捨てられた、と知り、私は

うそ

「見つかった」と嘘をついて、ポスターを回収してまわった。

こんなつらい嘘、ついたことがなくて、表情でばれちゃうんじゃないかと、ずっとうつつむいていた。

それからしばらくしたある日、有馬家の庭

かたすみ

こはる びより

の片隅、小春日和の日だまりで公生がぼんやりとたたずんでいた。

い

がき

庭にある低い生け垣の外から、公生の頭が

となり

見えていることに、隣の自宅で気づいた私

は、外に出て路地から声をかけた。

「公生、どうかしたの？」

すると公生は、はつとしたように何かを背
中に^{かく}隠す。

「ううん、なんでもない。ちよつと、出かける、ひとりで大丈夫だからさ」

^{あや}怪しい。^{ふ しん}挙動不審。

「あつ、そう。じゃあね」

そう言つて私は自宅の玄関^{げん かん}ドアの^{かげ}陰に隠れた。タイミングを計り、そつと外をうかがう。公生がひとりで、燃えないゴミの袋^{ふくろ}を片手に^さ提げ、ゴミ捨て場のほうへ歩いてゆく。

^{とうめい}透明なゴミ袋の中身が何か、隠しようがなかった。

赤い首輪、チエルシーと公生の字で書かれたえさ入れのボウル、猫^{ねこ}用のトイレ……。

「待ちなさいよ！」

私はかつとなり、^か駆けだすとゴミ袋をつかんだ。

「これ……！　ひとりで捨てに行くなんてっ。チエルシーがもう帰ってこないって……」

公生はばつが悪^そそうに視線を逸らす。
「椿が、悲しむと思ったから……こんなところ、見せたら」

「私のことなんか！　公生はもうあきらめたの!？」

「……しかた……ないよ……」

笑おうとする公生の顔がゆがみ……^{なみだ}涙があふれる。

^{ぼく}「僕が……悪——」

「悪くなんかないっ」

私は怒りと悲しみで、公生の手からゴミ

^{ぶくろ}袋を乱暴にむしり取った。

「ひとりで捨てに行くなんて。こんなつらい

こと、ひとりでするなんて。私が一緒にいるって言ったじゃないっ。つらいときは、一緒にいるから、言つてよ。あきらめたんじゃないなら、そう言つてつたら！」

「……捨てたくないよ。でも、捨てないと……気が散るって。僕が見てばかりいるから」

「おばさんが、そう言ったの？」

公生は小さくうなずいた。

「だったら、トイレもボウルも、ピアノのある部屋になんて置かずに、片づけたらいいのに……お母さんは、それもしない。だから僕が、ごめんなさいして、片づけるんだ。口にはしないけど、本当はお母さんも後悔してるって、知ってるから」

「……公生は優しすぎるんだよ」

私はそれ以上、何も言えなかった。

代わりに熱いものがのど元にこみあげてき

た。公生が泣き笑いの表情を浮かべる。

「ほら。椿が悲しむと思つたから、僕^{ぼく}ひとりで捨てようとしたのに」

「ダメ……ひとりでそんなことばかりしてたら、ダメだよ。私が一緒^{いっしょ}にいるって、言つたじゃない。私は、泣かない、強いもの」

^{なみだ}涙をぐつとこらえる。ほら、私は泣いてなんかいない。

「でもね」

と、少し困つたように公生が言つた。

「チェルシーは捨てられたって、僕が本当のこと言つたとき、椿はすごく悲しそうで、たぶん泣くよりもつらかつたんじゃないかなつて……あとで思つたんだ」

バカ……。

私は何も言えずに、ゴミ袋^{ぶくろ}を胸^{かか}に抱えた。
「これ、預かつとく。いつかチェルシーが見つかつたときに、また要^いるでしょ」

くるり、と背をむけると、公生がほつとしたようにつぶやいた。

「ありがとう、椿」

か

私は自分の家に駆けこんで……声を殺して泣いた。

やさ

どうして、公生は優しすぎるんだろう。



そしてあれは……三年ほど前、小学六年生の秋だった。

公生のお母さん——有馬早希さんが、その年の夏休みに入ったばかりのころに病気が悪化して亡くなり、四十九日の法要が終わったあと。

公生はいつものように、ピアノにむかって練習していた。その音を耳にしたうちの母が、様子を見に行ってきて、と私に言ったのだ。

言われなくても、私はのぞきに行くつもりだった。いつもよりも激しく練習しているか、逆に練習できていないなら、動揺してい

どうよう

るとわかる。

でも、公生は全然変わらなかったのだ。母親を亡くしたというのに、何年も続けているのとまったく同じ時間に、まったく同じようにたんたんとしたペースで練習していた。

そんな公生に、不安を覚えてしかたがなかった。

開いていた窓から潜^{もぐ}りこむと、ピアノのレッスン室^{しの}へ忍^{しの}びこむ。

私に気づかない様子で、ずっと公生はピアノを弾^ひいていた。同じ音を、くり返し、くり返し、強く弱く鍵盤^{けんばん}をたたく。

そっと部屋の隅^{すみ}にいたら、不意に公生が、振り返りもせずにつぶやいた。

「椿、そこに、ぬいぐるみ、あるだろ？」

私に気づいてた。

「お父さんが、お母さんの部屋を片づけてたら、出てきたんだって。猫^{ねこ}.....だよね？」

いすの横に、白っぽいものが転がっている。拾いあげてみると、手作りのぬいぐるみだった。ずいぶん不器用な作りで、顔もマジックインキで書いてある。

「チエルシーの代わりだったみたい。お母さん、こっそり作ったのかなあ、知らなかった」

「だって、白いよ、これ」

「でも、きつと、チエルシーだよ」

公生のお母さんが捨てられなかったチエルシーの首輪やえさ入れを思いだし、胸が痛くなつて、私はそのぶかつこうなぬいぐるみを

^だ抱きしめた。背もたれの無いピアノ用のいす

^{すわ}に座った公生と背中合わせになつて、軽くもたれかかる。

公生の体温が、背中^の筋肉の動きが、伝わってきた。

何も言わず、公生はピアノを弾き^ひ続^{つづ}けている。

「.....公生.....」

「ん？」

まいほう

「毎報コンクールの本選出るの？」

たぶん、今度の日曜日だ。本選。

「うん。せつかく予選通ったから」

公生は、口ごもるでもなく、空元気という

たんたん

わけでもなく、手を止めて淡々と答える。

「ひどいでしょ？ お母さんが死んだんだ

ぼく

よ。なのに、僕は数日後のコンクールの心配
をしてる。ホントにひどい……」

「……だいじょうぶ？」

「だいじょうぶ。だって僕は、そう作られた
んだもん」

いっぱい練習してるから、だいじょう
ぶ……公生はそんなようなことを言っただけ

き

こわ

むな

ど、私は訊くのが怖くなっていた。いやな胸

さわ

騒ぎがした。

（そうだよ、おかしいよ。

どうよう

動揺していないなんて。

だれ
どこにも誰にも、悲しみをぶつけていない
なんて)

悲しいでしょうけれど、元気を出してがんばれば、天国のお母さんも喜ぶわよ.....そんな、近所のおばさんたちが言ってたような
空々しい言葉なんて、吐き気がするほどイヤだ。

ひどいでしょ

お母さんが
死んだのに

僕は

数日後の
コンクールの
心配をしてる

ほんとに
ひどい……

大丈夫？

大丈夫

だって僕は

そう作られたん
だもん

あの時の
お母さんの顔を
うまく思い出せない

ぽっかり
黒い穴がのぞいて
いるよう

そのおばさんたちが、泣きもしないで、な
こわんだか怖いわねえ、と裏では陰口を言っていたのも聞いてしまった。

だから.....私には公生にかける言葉がない。

(でも、約束したもの。そばにいるって。公
いっしょ生と一緒にいるって)

ねこ猫のぬいぐるみを抱き、私はだ黙って、公生
のそばにいた。

公生も、言いたいだけ言うと、またピアノ
ひを弾く。激しい曲だ。

雲の流れが速く、窓からの陽射しをたびた
ひざびかけらせる日だった。

数日後、都内で開かれた毎報コンクール本
選。

私は、公生の出場するコンクールを聴ききに行
った。

ホールでは、一階席の後ろのほうに着席し

た。

何人もの演奏を聴き、アナウンスで今はプログラムだれの誰が弾いたのか確認かくにんしながら、ひたすら公生の出番を待つ。曲を聴いただけでは、プログラムのどこらへんなのかが、私にはわからないからだ。

いよいよ公生が登場するときの、観客がささやきあう声を耳にして、私はちよつと悲しくなつた。歓迎かんげいされていたり、期待されている様子ではなかつたからだ。

公生は勝ちすぎて、もはやヒールだつたようだ。

ようやく、公生が、ライトの当たるステージに現れる。

ひ弾く曲はベートーヴェンらしい。一礼して、特に緊張きんちようした様子でも、気負つたふうでもなく、無表情の公生がピアノを弾く。

公生の練習はいつも細切れだつたけど、通して演奏されると、思つた以上にすごく激し

けんばん

いメロディで、鍵盤をたたきつけるような勢いと速さで.....それがきれいに流れる曲に変わったとき、なんだか、周囲の様子がヘンなかんじになった。

きんちよう

おどろ

緊張したような、あきれたような、驚い

おこ

たような、怒ったような.....コンクールの最中だから声には出さないけれど、異様な空気に包まれる。

そして、ステージの上で公生は、ピアノを弾くのを、いきなりやめた。頭を抱える。

かか

(泣いてる？

.....公生が泣いてる!!)

し だい

観客席がざわつき、それが次第に大きくなり、係員が出てきて、公生の背を押してステージの袖へと連れてゆく。

そで

(何が起きたの!? 公生、どうしちゃった

の??)

やっぱり、動揺^{どうよう}してたんだ、自分でも気がついてないくらい、心の奥^{おく}で——私は気づいた。

それが、いちばん大事なときに、心の外へ一^ふ気に噴きだしたんだろう。

(公生！　ひとりでいちやダメだよっ)

根拠^{こんきよ}はないけれど、強くそう思った。

私に何ができるか、全然思いつきもしなかったけど、そばにいるという約束は絶対に守りたい。

(約束、守^{だま}なくちや。何もできなくたって、黙^{かた}ってそばにいて、泣きやむまで公生の肩に手を置いてることくらいは、できる。そうしたい！)

私は楽屋^かへ駆けつけた。

でも、公生はいない。見知らぬ場所でけんめい^{さが}に捜すと——。

「いたっ、公生！」

そうはく

なみだ

裏口から、顔面蒼白になって涙をぬぐおう

み おぼ

ともせずにあふれさせている公生が、見憶えのある女性によって、急ぎ足に連れだされて

ひんばん

ゆく。お母さんが入院して以来、前より頻繁に有馬家に出入りするようになった人だ。

いつしゅん

私はその横顔を、一瞬見ただけだった。

「公生！」

呼んでも、公生はふりむかなかった。自動車のドアのむこうへと消えてしまった。全力で追いかけても、走り去る車に追いつけるはずもなく……私は、そばにすることができなかった。



もど

その後、いつ公生が自宅へ戻ったの

っ

か……。有馬家の明かりは点かなかった。けれど三日ほどして、公生は登校してきた。ど

こか、別の家に泊ま^とっていたのかもしれない。

「公生、おはよう。休んでた分のプリント。
あと、宿題、今書き写しなよ」

教室の出入り口で待ちかねていた私が、廊^{ろう}
下^かに飛びだし、プリントとノートをさしだすと、公生はのろのろと顔を起こし、「あ
あ……」とだけかすかに声をもらした。

ノートを借りてゆき、書き写して、すぐ
「ありがとう」と返してくる。無表情だった。
「あのさ公生、お昼休み、ドッジボールしな
い？ あんた、逃げ回^{にまわ}るだけでいいから。
ボールに手え出さなくていいからさ。だつて
ほら、メンバー集めといて、ダッシュで体育
館取らないと、五年生に取られちゃう。最近
やたら早く来るんだよね、五年生」

「……………ん」

公生はぼんやりしていて、話しかけても微^び
妙^{みょう}な反応しかせず、私の顔もろくに見ない

けれど、すごく落ちこんでいるようには見えなかった。給食だって残さず食べた。

その翌日か翌々日か.....気がつけば、有馬家のトイレの明かりや、二階の公生の部屋の明かりが、ときどき点いている。

「公生、帰ったんだ」

けれど、ピアノの音は、まったく聞こえなかった。ピアノの部屋の明かりも点かない。

何日かが過ぎても、それは同じだった。

（公生.....ピアノ、やめちゃったの？）

そう考えて、私はすぐに否定した。違う、と思う。

（^ひ弾いたら、きつと泣いちゃうんだ。つらくなるんだ）

ステージの上、まぶしいライトを浴び、ピアノを前にして、頭を^{かか}抱えて泣いていた公生を強烈に思いだした。

でも、泣いてわめかないと、すつきりしな

いことだつて、あると思う。ただ公生はそれを怖こわがっているみたいだつた。

どうやったら公生が心にしまいこんでしまった動揺どうようや悲しみを、なぐさめられるんだろう。でも、どんなに私が元気よく公生にあれこれ誘さそいをかけても、無駄むだだつた。

うるさいと言われてもいい。
私は公生のそばで、楽しい話ばかりした。
ずっとそばにいた。おたがいの家に入ってから、私は窓から公生の家をながめてばかりいた。

公生の表情は次第しだいに元もとに戻り、冬むかを迎えるころには、私の顔を見ておだやかに笑い、表面上は落ちついたように見えた。

私が朝迎えに行けば、一緒に登校したし、普通ふつうに会話もした。いつも同じ服で汚よごれているとか、顔を洗ってないってこともなかった。

元の公生だ。

でも……ピアノの音がしない。

いつまで経^たつても、聞こえてこないのだ。

手が痛いのかと、理科の実験のとき同じ班だったのじつと観察したけど、そんなことはないらしい。体育でも手をかばう様子がないし、家庭科の調理実習でも包丁やフライパンを使った。

いつだって、手をケガしないよう、気を遣^{つか}っていたのに。

（公生は、まだ、元の公生じゃない。ピアノと関わらない公生は、元の公生じゃないよ。

そうか、まだ、ピアノを弾^ひくと、悲しくて泣いちゃうんだな、泣くのがつらいんだ）

「ピアノ、やめちゃったの？」

一度だけ、私は思いきって、公生に訊^きいてみた。公生はあいまいに笑って、首を横^ふに振っただけだった。

六時間目の音楽の授業のあと、公生がピアノを前にして立ちつくしているのを見たのは、その直後だ。気づいた私も後ろのドアのところで足を止め、息を詰めて公生を見守っていた。

もうじき掃除の時間になるというのに、公生は音楽室から立ち去ろうとしない。

ふたが開いたままだったピアノの、真ん中の当たりの白鍵に、こわごわと右の中指を載せ、公生は、ポーン、と音をひとつだけ鳴らした。

そして、なんとも複雑な……ほっとしたような顔をしたのだった。音楽室を駆けだしてゆく。私はあわてて後を追ったが、友だちから呼びとめられたので、公生に話しかけそびれた。

（公生……やっぱり、ピアノ弾きたいのかな……？）

でも、有馬家から、ピアノの音はしない。

静まりかえり、明かりもリビングやキッチンには点^っかず、いったい人があるのかいないのかさえ、よくわからない。

公生^{ひそ}は何をしているのか、こんな暗い家で息を潜^{かん し}めて……私は気になったけれど、じつと監視しているのも失礼だし、なるべく回数を増やして、自分の家の窓からちらちらとのぞき見るのがせいぜいだった。

そして、季節は本格的な冬になった。

クリスマスの夕方――。

私と母は、洋菓子店^{よう が し てん}に注文しておいた丸太の形のブツシュ・ド・ノエルのチョコケーキを、ダイニングテーブルの真ん中に置き、炭酸飲料のボトルとグラスも並べ、ホームパーティーの用意をして、父が温かなフライドチキンを買って帰るのを待っていた。

リビングには、造り物だけれど高さ一メートルのクリスマスツリー^{かざ}を飾り、室内はとて

も暖かかった。屋外には、この冬最初の寒波
が押し寄せてきていた。

「お父さん、遅いね。お腹空いちやった」
「そろそろでしょ。さつき、駅に着いたって
メールが来たんだし。きつとチキンのお店が
混んでるのよ」

母がなべのポトフを味見しながら、言う。
私はカーテンをめくり、窓の外を見た。

有馬家は真っ暗だ。
（さすがにクリスマスくらい、公生もどこか
の家のパーティーに行ってるんだな。学校か
ら帰るときも、特にさびしそうじゃなかった
し）

そう思っていると、有馬家の暗い窓辺で、
何かが動いた。

（な、何？ まさか、泥棒??）

私はあわてて、母に報せた。ふたりで、
カーテンのすき間から、そつと様子をうかが
う。

「.....よくわからないわねえ」

そこへ父が帰ってきた。

「ただいまー。チキンの箱、Lサイズでよかったつけ」

三人家族だからMでいいのに、とちらつと思いつつ、それどころじゃない、と私たちは父を黙らせる。

だま

となり

「お隣。有馬さんち。留守みたいだけど、何も気がつかなかった？」

「いや？　どうかしたのか？」

母に問われた父が、きよとんとする。

「ちよつと様子を見てきて、お父さん」

「ええっ??　ボクが?　ひとりでか？」

そんなこんなで、私がバット、父がゴルフ

げんかんそうじ

クラブ、母が玄関掃除のほうきを持ち、父を

かいちゅうでんとう

先頭に懐中電灯で照らしながら、私たちは

かべ

ひとかたまりになって自宅の壁を伝っていつ

さく

りんか

た。有馬家との境の低い柵ごしに、隣家の窓に光を当てる。

まぶしさに驚いたような白い顔が、ガラス
のむこうに浮^うかんだ。

「うわあっ」

父が悲鳴を上げる。

「公生!？」

「.....えっ、コーちゃん??」

私の叫^{さけ}びに、母も気づく。明かりも点^つけず、毛布をかぶって窓辺からこちらをぼんやりと見ていたのは、公生だった。

「ひとりで家にいたの？　ちよっと、中に入れて！」

私と母は、有馬家の玄関に駆^かけつけ、公生が鍵^{かぎ}を開けるのももどかしく、中へ入りこんだ。

家の中は冷え切っていた。暖房を入れた様子がない。真^まっ暗で、玄関と廊下^{ろうか}の明かりのスイッチを^{さが}探すのに、私はまず手探^{てさぐ}りしなければならなかった。

毛布をかぶった公生を^せ急きたてつつ、一階
のあちこちの明かりを^{おく}点けながら、奥へ進
む。散らかってはいなかったが、勝手口に燃
えるゴミの袋^{ふくろ}が溜^たまっていた。半透明^{はんとうめい}の袋の
中身は、コンビニ弁当など、できあいの食事
の^{ざんがい}残骸ばかりだ。

多いのは、サンドイッチの包みだった。商
店街のパン屋さんのロゴ入りシールが^は貼って
ある。ラベルにはどれも、「タマゴサンド」
とあった。

タマゴサンド……公生の好物だ。コンビニ
弁当は公生のお父さんが^{なごり}食べた名残で、公生
は、それしか食べていないみたいに思えた。
「コーちゃん、どうして……。明かりもエア
コンも^っ点けないで」

飛びついて公生を^だ抱きしめながら、母が泣
きそうな声で^{たず}尋ねる。公生が困ったように、

ぼそぼそと答えた。

「.....明^{こわ}るいと、怖^{だれ}くて。誰もいないのが、
わかって.....」

「暗いほうが怖いじゃない」

母の言葉に、公生は黙^{だま}って唇^{くちびる}をかんだ。
母の後ろで見守る私には、公生の言うこと
が、なんとなくわかる気がした。

（怖いというより、つらいんだ。現実がはっ
きり見えちゃうのが）

ずっと、公生の家に明かりは点いてなかつ
た。

ずっと、公生は家でひとりだった。

「寒いでしょ、コーちゃん」

「うん.....でも、いいよ、これで。どうせ僕^{ぼく}
ひとりだし」

「何言^かってんの、ダメよ、風邪^ぜ引いちゃう。
今日はクリスマスよ、コーちゃんも一緒に、
おばさんちでご飯食^{いっしょ}べましょ。ねえ、椿？」

母の言うとおりで。私だって、泣きそう

だった。

（クリスマスに、明かりも^っ点けない寒い家で、ひとりだなんて）

「うん、そうだよ。うちのお父さんたら、チキン買いすぎちゃったの。食べるの手伝って」

（バカ公生。うらやましそうに、うちのダイニングの明かり、ながめてたくせに。なんでがまんするの。一緒にいるって、つらかったら言ってって、あんなに伝えたのに。なんで^{あま}すなおに甘えてくれないの？　^{つか}気ばかり遣ってるの？）

私と母は^{ごういん}強引に公生をわが家——澤部家に連れ帰った。

まず公生をダイニングへ^お押しこんでから、
^{ろうか}外の廊下で、母がこそこそと父に^{ただ}質す。

「^{たかひこ}隆彦さん、また出張かしら。^{えんりよ}遠慮なく言ってくれたら、コーちゃん預かるのに。『留守

なので息子をお願いします』のメモ、ときどき郵便受けに入ってるんだけど。こんなに寒い日に遠慮されるなんて、わたし、そんなに恩着せがましいことしたのかしら」

隆彦さん——公生のお父さんは、とても出張の多い仕事をしているらしい。

そういうとき、私も母も気にして、公生に「うちに来る？」と声をかけてたけど、いつも公生は遠慮ばかりしていた。

「そういえば、今朝、新聞取りに出たとき、なんかメモみたいなのが新聞の上に載^のってたけど、郵便受けから引っぱりだすときに、木枯らしで飛んじやったな」

「それよ！　もう、しつかりしてよね」

私たちが室内に入ると、暖かさに公生がほっとした顔になってダイニングのいすに座^{すわ}っていたので、私も安心した。白かった公生のほおに、赤みがさしてくる。唇^{くちびる}の色もよくなってきた。

「公生、ポトフ、食べる？ 温まるよ」

私はなべからポトフをシチューボールに盛った。ソーセージを多めに入れる。給食当番じゃないから、からかわれたり、文句を言われることはない。

「これ.....」

公生が少し^{おどろ}驚いた顔をした。

「そうよ、^{にお}コーちゃん、この^{おぼ}匂い、憶えてるでしょ？ 早希^{ようちえん}さんがレシピ^{となり}教えてくれたの。あなたが幼稚園に入っただけのころだったかしら。お隣のキッチンからすごくいい匂いがしてくるから、わたし、お願いして秘伝の味を教えてもらったのよ」

知らなかった。

（そうだったんだ。このポトフ、公生のお母さんのレシピだったんだ）

もう、食べられないと思っただろう、母の味。

公生、喜ぶだろうな、と私はうれしくなった。家族全員分のポトフを盛りつけ、おかず

も並べ、チキンも大皿に移した。母が丸太の形のケーキを切り分ける。

「コーちゃん、いちばん大きいのあげる」

「あ、それ、私の！」

「いいですよ、おばさん、僕ぼく、小さいので」

「椿ゆず、譲りなさい」

「え一つ。まあ、公生は弟みたいなもんだから、しかたないか」

にぎやかしく私たちはテーブルについた。

炭酸飲料せんの栓ねを、父が抜く。ハデな音を立て、天井てんじょうに当たった栓が、耳をふさいだ私

と公生のちょうど中間に落ち、テーブルの角に当たって、弾はずんだ。

「メリー・クリスマス！」

四人で乾杯かんぱいした。公生も気恥きはずかしそうに、グラスを私と合わせた。

ケーキを食べつつ、私は公生が喜んでポトフを食べるだろうと、期待して見守ってい

た。公生はケーキと、父に^{すす}勧められたチキンを食べたものの、ポトフに手をつけようとし
ない。

「おいしいね、ポトフ」

私は^{さそ}誘うように、野菜のうまみがスープに
詰^つまったポトフをスプーンですくい、口に運
んだ。

「半日煮^にこんだんだよ。私も手伝ったんだ、
タマネギの皮むくの。お母さんがブーケガル
ニでだし取るのにセロリ使ったけど、公生、
嫌^{きら}いじゃないよね？」

「どうしたの？ もっと食べなさいよ、コー
ちゃん」と、母も^{すす}勧める。

「うん……」

公生はため息を^お押し^{ころ}殺したようだった。思
い切って、ポトフをすくい、口に入れる。

つらそうに^{まゆ}眉をひそめ、ようやく飲み下し
た公生だが、もう一口、スプーンを口元に

持っていたところで、青ざめた。

スプーンを取り落とし、口元を手で押さ^おえ、駆けだしてしまう。

「公生!？」

「コーちゃんっ」

「公生くん……」

私たちが追うと、公生はトイレに駆けこみ……長いこと出てこなかった。

「……コーちゃんに、ひどいことをしちゃったんだわ、わたしたち。親切を押しつけて」

母がとても悲しげにつぶやいた。父も深刻な顔になる。

「早希さんの思い出……失ったものを取り戻^とせないことがつらすぎて、母の味もピアノ

も、何もかも、受け容^うれられ^いないんだな。明

るい部屋も、暖かい家も、家族団らんの大騒^{おおさわ}ぎも、全部」

「公生……。イヤだよ、こんなの。私に、何ができる？　ねえ、お母さん、お父さん」

たまらず、私は両親にすがって、ゆすぶった。

「そばにいるだけじゃダメ、何かしなくちゃ。何か」

こんな公生、ほつとけない。

ほ

ぬく

「人がいちばん欲しいはずの温もり、おいしいもの、明るい場所、そんな幸せが全部受け容れられないままになるなんて、ダメだよ、絶対」

ひとりではもう、立ちあがれなくなっているのかもしれない。そばで見てるだけじゃなくて、手を出して引っぱらないと、立ちあがるのを手助けしないとダメ。

「お母さんもそう思ったの。でも……裏目に出てしまうなら、そつとそばで見守るだけでも。自己満足なんて、コーちゃんに失礼よ」

「自己満足じゃない！」

でも、お母さんもお父さんも、考えこんでしまうばかりだった。私たちはしばらく無言でうつむいていた。

（どうしたらいい？）

三十分近くが過ぎた。公生はいつまで待ってもトイレから出てこないし、近づいても、音もしない。

「まずいな……^{たお}倒れてるんじゃないか？」

父が言いだし、開けるよ、と^か声を掛けてから、あわてて^か駆けこんだせいか^{かぎ}鍵のかかっていたドアを開けた。

案の定、公生は便器のふたを閉めたあと、そのままその上に倒れこんでいる。

「公生っ」

青ざめ、口元が少し^{よご}汚れている。吐いたの^はだ。メガネとハンカチが^{ゆか}床に落ちていた。

「どうしましょう、救急車！」

母が大声を上げると、公生は目を覚ました。

「……ごめんなさい……^{ねむ}眠っちゃったみたい。うちだと、なんか眠れなくて……この家、気持ちいいかも……」

起きあがろうとして、よろける。手探りで
メガネを探すので、手渡してあげた。

「公生、泊ま^とってきなよ。ほら、口すすいで」

洗面所へ連れてゆき、私がぬるま湯をコップにくんでさしだすと、公生は口をすすぎ、手を洗ったが……「もう、限界」と、またその場で眠りこけそうになる。

「しかたないなあ」

「ボクが運ぼう」という父を断り、私はなん
だか胸が苦しくなりつつ、ねぼけ^{まなこ}眼の公生に
肩を貸^{かた}し、母が客間に敷^しいた布団^{ふとん}まで運んだ。

（男の子なのに、なんでこんなに細くて軽いんだろ。ちゃんと食べてないからだ、絶対。残さないのがクラス目標の給食のほかは、きつと、タマゴサンドしか食べてないんだ。バカ、自分を大事にしろね）

怒^{いか}りさえ湧^わいてきた。

（公生、こんなじゃ、ダメになっちゃう。
せめて、ちゃんと食べなくちゃ。食べなかつたら、どこからも元気出てこないよ）

決めた。

公生が食べられるものを、私が食べさせる。食べなきゃ、生きられない。



すぐに冬休みに入った。

学校が休みだと、お昼の給食がない。さすがに、三食ともタマゴサンドは、問題ありすぎだ。

私は公生が好きな食べものをけんめいに思いだした。

「ビーフシチュー、オムライス、カレーは好きだけどそんなじゃなくて、え一つと、それから、^{すぶた}酢豚？　酢豚にはパイナップルを入れなきゃ」

ダイニングのテーブルで、朝ご飯のトーストをかじりながら私がぶつぶつ言って、チラ

シの裏にメモしていると、母がキツチンで笑う。

「それは、椿が好きなものでしょ？」

「いいの！　公生、好き^す嫌い^{きら}ないの知ってるし。ピーマンある？　酢豚^すにしょーつと」

（待てよ。公生、パイナップル^よ避けてなかったっけ、給食の酢豚で）

まあ、いつか。

私が作るんだから、私の好きなほうで。

朝ご飯を終えると、私はさっそく、母がス

クラブしている料理のレシピ記事の切り抜きを見ながら、酢豚作りに取りかかった。

.....しかし。

「なんで、ピーマンってうまく切れないうってか、滑^{すべ}って逃^にげるのっ」

「タマネギなんてもう、二度と切らないっ、

^{なみだ}涙で前が見えないっ」

「生のお肉^{さわ}って、触るとぐにやっとしてて気持ち悪い」

「ぎゃーっ、指切ったあっ」

けむり

「あちちっ、油から煙出てきた」

「もうやめてっ椿！ 火事になっちゃうっ」

かたくり こ

片栗粉（とまちがえて白玉粉をつけていた

ぶたにく

とあとで判明.....）をつけた豚肉のかたまり（細かく切るのがイヤだった）を、もうもうとへんな煙が立つ天ぷらなべへ入れるにあたり、熱いので先にボウルで水をぶっかけようとした私を、気づいた母が必死の形相で止めた。ガスレンジの火も消す。

おお やけど

「大火傷するわよ、そんなことしたら！ 油が飛びちって！ ああよかった、無事で。

.....まあ、指だつてばんそうこうだらけじゃないっ」

母はあきれはて、大きなため息をついた。

「今日のところは、わたしがやるから、椿は手伝って」

私がやったのは、けっきょく盛りつけだけだった。そのお皿にラップをして、お盆に載

ぼん の

せ、隣の家へ持ってゆく。ちょうどお昼だった。

「公生、これ、お昼ご飯のおかず。食べて」

「ありがとう。でも、なんか食欲なくって」

困ったようなあいまいな笑^えみを浮^うかべ、公生が断る。

「ダメ、食べなきゃ。給食が出ないんだもの。お腹^{なか}空^すいて、倒^{たお}れちゃうよ」

お盆^{ぼん}を押^おしつけると、公生が押し返す。

だいじょうぶ

「大丈夫、タマゴサンド、食べてるから。あれなら食べられるんだ」

「ほかのものだつて、食べようよ。これ、私が作ったんだぞ！　食べなさいったら」

私は、食べてほしい一心で、つい見栄^{みえ}を張った。

「私の作ったものじゃ食べられないって？」

「そ、そんなこと言っていないよ」

押し問答になったが、どうしても公生がお盆を受け取らないので、ひとりで食べるのが

つらいのかと、私は考えた。

「じゃあ、一緒に食べようよ、遠慮えんりよなんかないの。私、公生いっしょんちで一緒に食べる！」
（給食は、周りのみんなが食べてると、つられて食べたりするんだし）
「……………そうだね」

うなずいたので、納得なつとくしたのかと思ったら、公生はお盆を受け取って、ドアに体を半分入れる。

「お父さんと、夕飯に食べる。今日はきっと早く帰ってくるよ。ありがとう」

え、あ、うん、と私が目をしばたたいている間に、ドアが閉められる。
（これで、よかったのかなあ）

次の日、朝早く、玄関げんかんのインターホンが鳴った。

「おはようございます、有馬です」

私がドアを開けると、ラフなかつこの公生のお父さんが、お盆ぼんに洗った酢豚すぶたのお皿を

の
載せて立っていた。

「おはようございます」

「椿ちゃん、おはよう。これ、作ってくれたんだって？　上手だねえ、とってもおいしかったよ。どうもありがとうございました」

きょうしゆく

とても恐縮している。私も恐縮した。実は母が作ったからだ。

「はい……お口にありましたか？」

「公生とふたり分なんて、申し訳なかったね。公生は自分は昼に食べたからと」

「え……」

もともと公生の給食代わりのお昼ご飯だ。ふたり分なんてなかったはず。

（公生、食べなかったな）

ぼん

お盆を受け取りながら、私は腹が立っていた。

ちようぜつ

（絶対に食べさせてやる、見るからに超絶おいしそうな料理で！）

それから、私の奮闘^{ふんとう}がはじまった。

母がパートに出ている間に、自分ひとりで、さし入れのお昼ご飯を作ってみせる。

「おいしい」と、公生の本当の笑顔^{えがお}を取り戻^{もど}すために。

まずは、おにぎり。

.....ぐちゃぐちゃになった。どうして、握^{にぎ}ると指の間から、ぐにゅ一つとご飯がはみだし、手にべたべたご飯粒^{はんつぶ}がいつぱいくつつくんだろう。

やさいいた
野菜炒め.....真っ黒こげ。

ハンバーグ.....生焼けなのに、外はこげて^{ばく}る。おかしいな、とさらに焼いてるうちに爆^{はっ}発した。これも、手で丸めるのは、ひき肉が手にくつついてイヤだったから、全部まとめてフライパンにぶちこんだんだけど。焼きながら切り分ければいかなって。

とりにく たつ た あ
鶏肉の竜田揚げ.....中は生のまま。つてい

うか、お肉の外になんか粉みたいなの、つけるんだ?? お肉の味は、料理する前に、先につけておくの??

み そ しる

お味噌汁.....味がうすいから、塩を入れたら、砂糖だった。すきまじい味。しかも、豪快に輪切りで入れた大根が、大きすぎたのか生煮え、小松菜は切れていないから葉っぱの端がつかっている。

卵焼き.....ふたたび、真っ黒こげ。

ひ さん

「うう.....自分で食べてみても、悲惨だ」
自作の黒こげ卵焼きをかじり、固さと苦さに、私はどん**退**きした。

「これは食べさせられないわあ」
(やめようかな)

ちらつとあきらめの気持ちが頭をよぎる。
でも、あの、真っ暗な部屋で毛布をかぶっていた公生を思いだすと、つらくなる。
(私、自分がつらくならないために、こんな

ことしてるのかなあ)

ちが

違う。

絶対に違う。

そう自分に言いきかせる。

おお

ちつとも料理が成功しないまま、明日は大

みそか

晦日という日になった。

午前、私が、今日は何にチャレンジしよう

なや

かと、頭を悩ませながらスーパーへの道を歩いていると、コンビニに公生が入っていくのが見えた。

「見つけた！」

て づ

いったいどうしたらいいのか、手詰まりになっていた私は、本人に食べたい物を聞きだそうと、後を追いかけてコンビニに入った。

「公生！」

「椿？ こないだはさし入れ、ありがとう。
お父さん、喜んでたよ」

いつものおだやか.....だけど、何考えてる

のかわかりにくい^え笑みだ。

「あんたのために作ったのよ!？」

「ちよつとは^{す ぶた}食べたよ。酢豚にパイナップル入れたの、椿が好きだからだろ？」

パイナップル入れない派なのは知っていた。でも私は断然入れる派だから、豚肉の下^{かく}に隠して盛りつけたのに。そこだけしつかりチェックしたんだ。

「てきと一なこと言って！」

食べなくたって、そのくらいの感想は言える。

公生の襟元^{えりもと}をしめあげたので、公生がじたばたと手足を動かす。

「食べたから、やられたって、思ったんだ。

パイナップル、^よ避けそこねた」

「ホ・ン・ト・に？」

私がにらむと、正直な公生は、視線を^そ逸らす。

「うう.....たぶん.....」

「たぶんって、何よっ」

私は公生を放りだした。

（私、作る！　公生が食べたいって思うものを作ってやる。食べてくれるまで、あきらめないんだから！）

胸がドキドキしてる私の前で、公生はサン
ドイツやおにぎりの冷蔵棚れいぞうだなに近づき、タマ
ゴサンドに手を伸ばす。

「あーっ、またそれ！　って、いつもは、パン屋さんのだよね？」

商店街にある、小さいけれどとてもおいしいパン屋さんだ。

「うん、今日から一月三日まで休みなんだって」

「だったら、違ちがうものにすればいいのに。公生、何が食べたい？　がんばって、私が作るから」

「いいよ。大変だろ？　手間もお金も」

さらっと言われ、私はすごくむかついた。
「手間なんて！　あんたが暗くて寒い家でひ

とりぼっちでいることを心配するだけに比べたら、ずっと気楽よ。お金はお年玉前借り。私がしたいんだから、あんたが気にすることじゃないのっ」

「.....ありがとう、椿。いつか、僕^{ぼく}が恩返ししないとね」

ほほえみ、公生はひょうひょうとした態度でレジにむかう。レジの横では、大きなケースでおでんが煮^にえていた。ずらされた耐熱^{たいねつ}ガラスのふたのすき間から、湯気とだし汁^{じる}の香りが立ちのぼり、あたりにただよっている。

「いい匂い^{にお}」

思わず私がつぶやくと、公生もしんみりした表情で、おでんの湯気を見やった。

「お母さんにおでん、供えようかな」

「おばさん、おでんが好きだったんだ？」

レジにタマゴサンドを一包み置くと、公生は私をちらりと振り返^ふって、メガネの奥^{かえ}でまっつけ^{おく}を伏せる。

「一年くらい前……かな。去年の暮れ、うちのお母さんが一時帰宅できていたとき、椿んちのおばさんが、作りすぎたからって、おでんをさし入れてくれたことがあったんだ。知ってる？」

「うん、そんなこともあったね」

作りすぎたんじゃないくて、食べさせるためにいっぱい作ったんだ。私、ゆで卵の殻をむいたし、ぎつくりと大きく大根も切った（皮は母がむいた）。昆布も結んだ。

公生は財布を開け、小銭を探しながら、なつかしそうに語る。

「病院じゃ、あつあつで、ふうふう吹かないとならないおでんなんて、食べられないからって、お母さん、とてもうれしそうに食べた。少しずついろいろな具……あれって具って言うのかな、おでん種？　大根とか、さつま揚げとか、はんぺんとかをかじって、お行儀悪いねって笑いながら。かじった残りは僕

が食べたよ」

想像して私は胸が詰まり、うなづくことしかできなかった。

「『頼りになるのは、遠くの親戚より隣の他人ね』って、すごく感謝してたよ。あのときは、ありがとう」

タマゴサンドの支払いが済んでいた。

「決めた！」

私は公生の右手首をつかんだ。

「おでん、作る。公生、おでん種はどれがいいか、好きなの選んで」

公生を引きずって、コンビニを出る。

「待って椿、タマゴサンド受け取ってないし！」

「そんなのどうでもいいでしょっ」

「よくないよ一つ」

スーパーの練り物売り場で、おでん種を公生に全部選ばせた。ずいぶん種類があるんだ、と驚いていた。

おでんを煮るためのだし汁は、キッチンが
^あ荒れ果てることに閉口した母が監督に乗りだし、^は味付けもチェックした。

大根も大きな輪切りでよかった。おでん種もおおぎっぱに切るだけで済んだ。これは私にむいた料理かもしれない。

「いい、椿。あとは、こげつかせないように、見張りながら、いちばん小さな火ですつと煮るの。急いで手早く完成させようって思うから、火が強すぎて、中は生煮えなのに外はこげつくってことになるのよ。根気よく」

言われたとおり、大根が煮えたか味見しながらおでんを一日煮こんで、大晦日の朝になべごと公生に届けた。それから母がおせち料理を作り、私がおせちを詰めたお重箱は夕方に届けた。

有馬家は喪中なので、ドアの上のしめ飾りもなかった。それでも、出てきた公生のお父さんは、おせち料理をととても喜んでくれ

た。

元日の夕方。

はつもうで

げんかん

初詣から帰った私たち家族三人が、玄関

わた

を開けようとしたら、ドアの前に、公生に渡したおでんなべが、きちんとふたを閉めて置いてあった。

私が持ちあげると、予想外に重たい。

「食べなかったの？」

家に入り、急いでふたを取ると、きれいに洗ったなべの中に、つやつやして真っ赤なリンゴが五つ入っていた。

「リンゴ……？」

しんせき

「そういえば、早希さんのご親戚が北国においでだつて、聞いたことがあったわね。何度か、リンゴのおすそ分けをいただいたつけ。もうずいぶん前……早希さんが元気だったころ。まだコーちゃんがピアノを毎日弾くようになる前……だったわ」

母がなつかしそうにリンゴを取りだす。

いちばん下に、公生の字で、メモが入って

いた。

『おいしかったよ。椿がずっとキッチンにいたの、見えてた。あつあつで、去年と同じ味で、本当においしかった。お母さんにも供えた。どうもありがとう。リンゴはお母さんからおすそ分け。供えてくれって箱で送られてきたけど、食べきれないよ、僕とお父さんと、お母さんじゃ』

（食べてくれた、ちゃんと）

『ちくわつて、もちもちしてるんだね。知らなかったよ、こんな、もつちもちのふわふわした、ちくわがあるなんて』

「それ、ちくわじゃなくて、ちくわぶ。全然別物。ちくわだと思って選んでたんだ、公生ってば」

私は笑いながら、こぼれてきた涙を、そつと指先でぬぐった。

「リンゴ、余ってるなら、傷む前にアップルパイにしようよつて、公生に言ってくるね」

母に告げ、私は玄関ドアを開け、駆けだし

た。

となり

隣の家の玄関までは、十五歩だ。



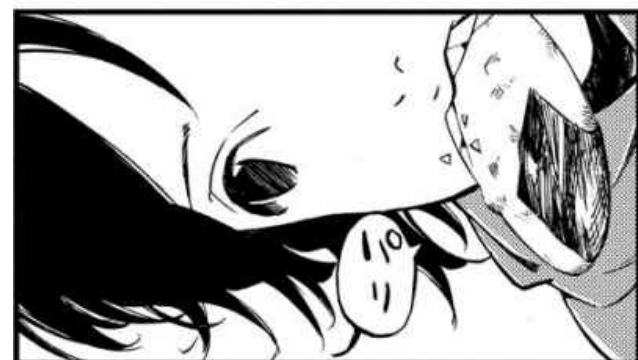
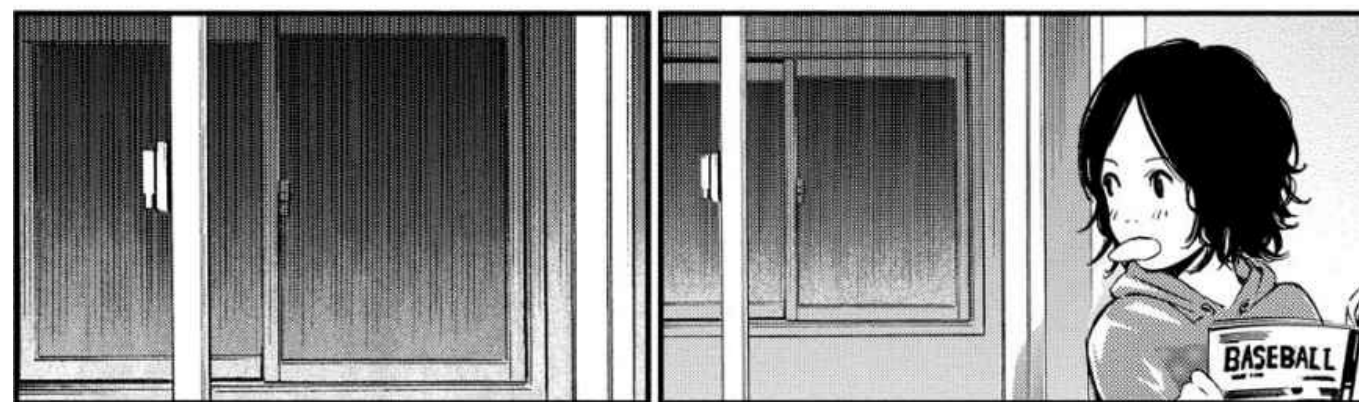
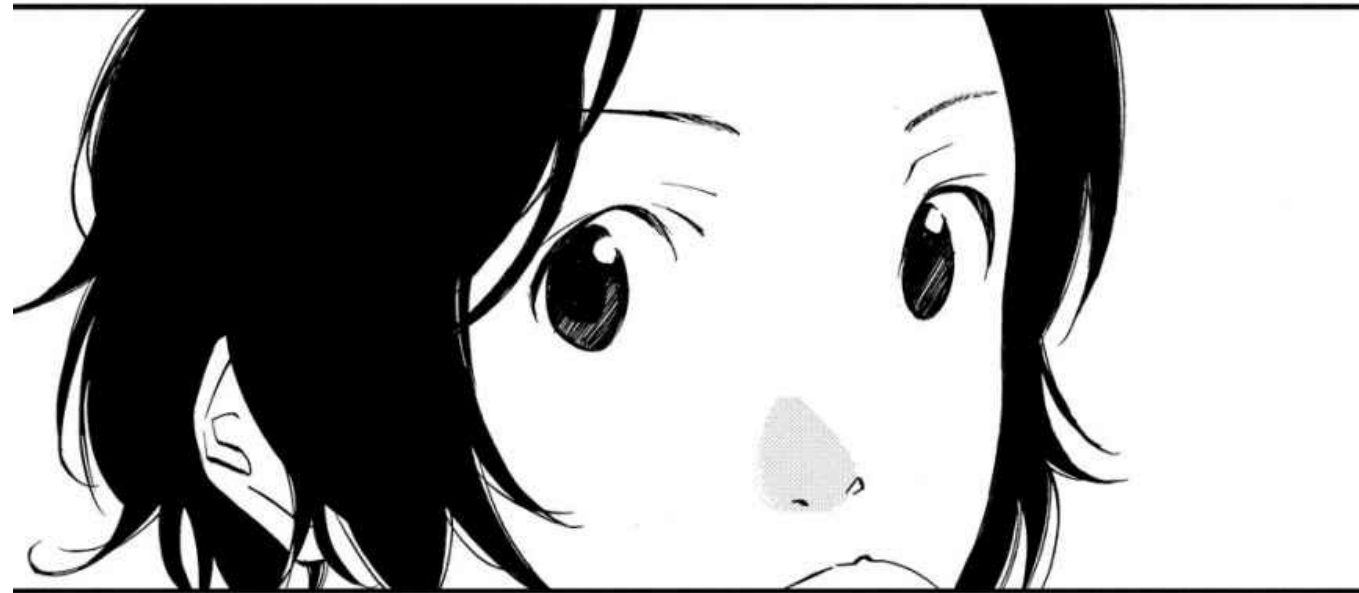
それから数か月。

私たちは、ブレザーの制服に身を包み、中学生になった。

桜並木の下、ひとりで歩く制服の公生の後ろ姿が、ひと回り大きくなった気がする。

あいかわらず、有馬家からピアノの音はしない。静まりかえったまま。

けど、放課後の音楽室から、ときどき、公生が鳴らす、簡単なメロディが聞こえるようになった。ピアノの優やさしい音色が。



私はソフトボール部に入った。おにぎりは
どろだんご
ラップに包んで、泥団子みたいに手の中で転
せんぱい
がすとうまく作れると、先輩から教わったの
えんせい　じ　あい
は、遠征試合のときだ。

部活の合間の休憩時間、校庭で水分補給
きゅうけい
しながら、耳を澄すませると、聞こえてくる。

ひ
公生の弾く、ピアノの音。

以前のように、クラシックの曲の同じフ
レーズを、しつこくくり返す練習ではなく、
は　や
今流行っているJ - P O Pのメロディばかり
かろ
が、軽やかに。

ホントに、ときどきだけど.....。

公生は、ピアノを完全に捨てることができ
ないんだ、たぶん。

放課後の音楽室から、ややたどたどしいピ
ひび
アノの音が、ときどき響く。一方、静まり返

る有馬家のピアノ。その状態からちつとも進まないことで、私はそう気づいた。

あと何年、公生はこのまま、ちゅうぶらりん^{ちゅうぶらりん}で迷い続けるんだろうか。有馬家のピアノはもう、弾かれることはないんだろうか。

二年あまり、私はもやもやしていた。中学三年生になった四月の始業式^{とつぜん}、クラスメイトの宮園かをり^{みやぞの}ちゃんが、突然あることを言いだすまで――。

4



こうせい
公生は男なんだ

わたりりようた
渡亮太

中学三年の夏の初め。オレはスターになり
そこ
損ねた。

し り つ す み や ち ゅ う が つ こ う

市立墨谷 中 学校サツ カ一部が地区大会で優勝して、都大会で優勝して、全国大会で優勝して、部長のオレはJ 1のユースかサツカ一名門高校にスカウトされて、それからU - 18日本代表にも選ばれて、高校卒業後はとりあえずJ 1のチームに入っ、オリンピック代表になっ、日本代表になっ、イ
ン グ ラ ン ド の チ ー ム に 移 籍 し て モ デ ル と
う な 浮き名を流して、テレビにもいっぱい出演して、自伝がベストセラーになっ、空港でも練習拠点でもいつもサイン攻め。

そんなスターになるはずだったオレ渡亮太は、あっさりと、自分のホームグラウンドでの地区総体三回戦で、一点差で負けた。

部活はないし、進学はスポーツ推薦で都内
の 強 豪 私 立 へ 入 る つ も り で い た し、友だち
は 男 女 問 わ ず 高 校 受 験 の た め の 塾 だ の 模 試 だ
の で 誰 も つ き あ っ て く れ な い し、これから

やってくる夏本番ってのはとにかくひまでしかたがない。

次の週末から夏休み、という七月のある日の夜。

大学一年生の姉貴が、風呂^{ふろ}上^あがりのオレをリビングで呼び止めた。

「亮太、これ、あげる。いいモノだよ」

小さいときからケチで、ひとつしかないケーキはきっちり半分を測ってから分けて、しかも上^のに載^のってるイチゴはひとつ多く奪^うう姉貴^{みょう}が、妙^のににこにこしながら、オレに紙製のチケットホルダーをさしだした。

本能的^{けいかい}に警戒^{たず}して、一步引きながら、尋ね返^{かえ}す。

「金、取ったりしないよな？」

「だいじょ一ぶ、これはタダよ、タダ。もらって損はしないから」

姉貴のわざとらしい笑顔^{えがお}に疑^{いだ}いを抱きつつ

も、オレは手に押しつけられたチケットホルダーを受け取り、開いた。

「.....夏祭りの屋台の券？　十枚もある」
「そう、この週末、大学の学生たちと、地元

商店街が共催する夏祭りが、キャンパスであつてね。で、それ、あたしの入ってるサークルが出す、お・い・し・いクレープの屋台で使えるの。全部使いきってね。そしたら、クレープ二個がタダ同然になるから」

「.....え？　クレープが、タダ？　マジで？」

オレは一瞬期待した。けど、姉貴はにやりとする。

「よく読みなさいよ。『この券で、二百五十円のクレープが、五十円引きの二百円で買えます』。要するにそれ、クレープ買うときの割引券ね」

ちよ、ちよっと待て.....。

「それ、タダって言わないし！」

「何よ、文句あるの、もらつといて！」

姉貴の目が据^すわる。……小さいときから、
オレは口げんかで姉貴に勝ったためしがない。

おぼ

「もらった憶えはないんだけ——」

「クレープが売れ残ったら、大損でしょ！
もったいないお化けが出るっ。いいから亮
太、三日間、夏祭りに通って、クレープ十個
買いなさい！　買うの!!」

「って、クレープ十個、オレが自腹で買うん
だろ？　マジか？　だいたい三日間……い

あま

や、平日は無理だから土日で十個なんて、甘
ったるくて食べねーし」

「あんたなら、女のコとつかえひつかえすれ
ば、半分も食べずに済むでしょ。女のコにお
ごりなさい。わかったね、亮太」

こし

腰に手を当て、胸を張って、姉貴は断言し
た。

「えええええっ、ひつでえ！」

こうぎ

抗議したが、姉貴はさっさと自分の部屋に

に
逃げこんでしまった。

そんなわけで、土・日の二日間、オレは仲
のいい女子を次々に誘^{さそ}いだしては、電車を乗
りかえて三十分かかる姉貴の大学へ行き、ク
レープをおごるはめになった。

とはいえ、たいくつしてたから、デートは
OKだ。その点には文句なし。

母親に窮^{きゅうじょう}状^{うった}を訴えてカンパしてもらった
のと、うちの最^も寄^より駅^{えき}からいちいち電車で片
道三十分かけて往復していたら運賃も時間も
かかるんで、二～三時間おきに女子を大学の
最寄り駅へ呼びだして待ちあわせすることに
して、どうにかこの不合理なミッションをク
リアする見通しをつける。

「まずは圭子^{けいこ}ちゃんだな……次は、れ一な
ちゃん、それからまゆちゃん？」

オレの誘^{さそ}いならと、塾^{じゅく}の合間をぬって都合
をつけ、女のコたちはみんな、喜んで来てく

れた。

そして、いよいよ券が残り二枚になったとき。

「これを、みっちゃんとふたりで使えば、終わりだな……つて、もう甘^{あま}ったるくて気持ち悪くて食えねえ……ふたつともみっちゃんにあげよ」

オレはみっちゃんにLINEした。

でも帰ってきた返事は……『ごめん、モモが……病気の』

^{だれ}

『誰？』

『家族』

『妹さん？』

『トイプー』

????? ……あ、トイプードル、犬か。

『お大事に。看病してあげて』

これはダメだな。オレは手にした残り二枚の券を見つめた。

「ほかに誰かいないかなあ」

駅のコンコースにある待ちあわせスポット、たくさんの人が行き交う。姉貴の大学へむかうらしい学生っぽいグループが多い。

細長い袋をかかえているのは、たぶん弓道サークルだろ。あれは剣道で、そっちはなぎなたかな.....あ、ラクロスもいる。

さまざまな大きさの黒いケースを大事そうにかか抱えた集団は、きっと器楽部。コントラバスにチェロにフルートにクラリネット.....。

「あ！」

かんじん

肝心な女の口を、うつかり忘れてた。

いいや、もちろん忘れてたわけじゃないけ

いそが

ど、忙しそうだったから。きっと今日も練習してるだろうなつて。

みやぞの

宮園かをりちゃん。ヴァイオリニスト。澤

さわ

べ つばき

部椿と同じクラス。けっこうかわいい口。

れんらく

オレはかをりちゃんに連絡した。

『今から出てこられる？』

『うん、音楽室での練習、終わったところだから』

音楽室での練習……音楽室は、有馬公生あり まの
ねぐらだ。あいつ、音楽室に棲息せいそくしている。

うちの中学、音楽系の部活は吹奏楽部すいそうがく ぶだけで、部員が多いから活動場所は小体育館だ。
音楽の先生も吹奏楽部にかかりきりのため、放課後や休日の音楽室はいつもがら空き
で、ピアノも誰だれも使っていない。

有馬公生は、そんな音楽室に、いつもひとり
りで入り浸い びたってる。ピアノがあるから。家にも
ピアノがあるはずだけど、公生は家のピアノ
は弾ひいていないらしい。公生の隣となりに住む椿
がそう言ってたんだから、本当だろう。

ヴァイオリニストのかをりちゃんは、公生
をピアノ伴奏者ばんそうしゃに指名して、なんとかいうコ

ンクールで賞に入ったのか入らなかったのか、とにかく、来月末にあるガラコンサートというものの出場権を得た。



一応説明はしてもらったけど、オレには音楽のコンクールなんてよくわからない。アイドルのコンサートと違^{ちが}って、ステージに立^たったかをりちゃんを声出^{おうえん}して応援しちゃいけないってことだけは、この間、予選のときに客席^{おこ}で公生に怒られたんでわかった。

それで今月に入ってから、かをりちゃんと公生は、時間があればいつも、音楽室でガラコンサートの練習をしてる。

愛のなんちゃらっていう曲だったと思うけど、タイトルはよく知らない。ずんちゃっ
ちや、ずんちゃっちや、ってかんじの曲だ。

ヴァイオリンを弾^ひいてるときのかをりちゃん^{かがや}は、輝^{かがや}いていてすごくかわいい。だから曲のタイトルなんてどうでもいい。かをりちゃんが弾けば、どの曲も美しく、せつなく、心にしみる名曲になるんだ。



待っていたら、駅の改札のほうから、かを
りちゃんが手を振^ふって駆^かけてきた。ピンクの
ヴァイオリンケースを背負^かっている。白いブ
ラウスにプリーツスカート、夏の制服だ。登
校するときは休日でも制服^かつてのが校則だからな。

「練習から直接来たんだ」

「うん、だって、早く行かないと、今日まで
なんでしょ？」

「そんなに焦^{あせ}らなくても、食べものの屋台な
んて競争激しいから、売れ残^かつてると思う
よ。きつとそろそろ、大安売りはじめてるっ
て」

「うん！ 行こう行こうっ。誘^{さそ}ってくれて、
ホントにありがとう、渡君」

満面の笑^えみで、かをりちゃんは弾^{はず}むように
歩きだす。

（こんなにうれしそうなら、最初からかをり
ちゃんも誘^{さそ}えばよかった）

いっしょ

公生と一緒にいるって思ってたんで……。
「私、クレープ大好き！ 特にイチゴと生クリームが入ってるの」

かがや

顔を輝かせて、本当にうれしそうだ。
「あんなおいしいもの、ないよね。考えた人は全世界から感謝されるべきよ！」
「ははは……大げさだな」
「ホントだも一ん。……でも、ワッフルもおいしいのよね。それから、ミルフィーユに、ティラミスに、トライフル！ ああ～比べらんなあいつ」

あま

ちよつとおしゃれな甘いものは、たいてい好きってことじゃないかそれ。まあ、いいけど。

かざ

バルーンでハデに飾りつけられた、大学の正門をくぐる。

キャンパスの中は、最後の呼びこみの声と、そろそろ家路を急ぐ人と、「よかった、

まだやってる！」と駆けこんでくる人とで、
ごった返していた。

すっかり通い慣^ぬれてしまったルートを、オレは人波をすり抜けながら進む。
「かをりちゃん、姉貴のサークルの屋台、二号館と三号館の間……って、あれ？　どこ行^ぬった？」

オレの後ろからついてきてたはずのかをりちゃんが、気づくと見当たらない。
「はぐれたか。あっちこっち、きよろきよろしそうだな、かをりちゃん」

さが　かのじよ　かか
捜すと、彼女は小型のデジカメを片手に掲げ、門へむかう人の流れを追いかけている。
「落としましたよ一つ、カメラ一つ。そこのおねえさんっ」

おねえさん、と呼ばれたのはどう見ても五十歳^{さい}すぎの、おばさんだった。

「あら、ありがとう、お嬢^{じょう}ちゃん」
「どういたしまして」

そんな会話をしているらしいふたりに、オレは人波を横断できなくて、たどりつけない。人波の切れ間ごしに、見失わないようにするのがせいぜいだ。

「じゃあ」と、かをりちゃんが、頭をぺこぺこ下^ふげてるおばさんに手を振り、こちらをむいた。

「かをりちゃーん、こっち」

「あ、渡君」

人波を横切ろうとしたかをりちゃんの頭が、急に沈^{しず}んで見えなくなる。

「うわ、こけた？」

オレが焦^{あせ}って「すいません、ちよつと通してください、すいませんっ」と強引^{ごういん}に人波を突^つ切^きると……。

かをりちゃんはしゃがみこみ、五歳^{さい}くらいの女の子を抱^だいてかばってた。

「だいじょ一ぶ？　転んじゃったね。痛くな

い？」

女の子は、こくり、とうなずく。

「おねえちゃんが、受け止めてくれたもん」

「そっか。間に合ってよかったあ」

かをりちゃんはくったくなさげに笑った。

「おうちの人、わかる？」

「うん、あそこ」

並木の下で、もうひとりの女性とおしゃべりしている女性がいる。

「たこ焼き、買ってきなさいだつて」

「ひとりじゃ危ないよ。^{いっしょ}一緒に行つてあげる。このおにいちゃんも」

かをりちゃんが、突^つ立^たつてるオレを指す。

「.....んん？」

と返事はしたものの、知らない男の人についてつちやダメだよね、という感じで女の

^{うわめづか}コは上目遣いにオレを見た。

「よし、オレが買ってくるから、かをりちゃんはその子と、保護者から見えるここにいな

よ」

「ありがとう、渡君」

かをりちゃんがほほえんだ。

^{やさ}

「優しいね」

「お金」と女の口がにぎった右手をつきだす。

^{こうかん}

「あとでいいよ、たこ焼きと交換。一パックでいいな？」

^い

「うん！ 青のり要らない」

「わかった」

手近な屋台で調達したたこ焼きのパックを

^{わた}

女の子に渡し、お金をもらって、今度こそオレはかをりちゃんと並んで歩きはじめた。

けど。

「にゃ一つ」

いきなりかをりちゃんが、すつとんきょうな声を出す。

「な？」

^{ねこ}

「にゃ一つ、猫、猫、ニャンコいっぱい！」

「ああ、キャンパスにけっこう野良猫がすみ
ついてるって、姉貴に聞いた」

「にやああーっ」

アスファルトの通り道だけでなく、校舎と
校舎の間にある芝生の敷かれた中庭にも、
ぎっしりと屋台が出ている。

白黒ブチとサバトラ模様の二匹の猫を追
かけ、かをりちゃんはスカートのすそをひる
がえして、屋台のテントの裏手へと駆けて
いってしまった。

「ちょ、待って、そっち危ない」

ガスボンベとか、ガソリン使う電源モ
ーターとか、電気の配線とか、いろいろある
って。

「ホント、かをりちゃんは目が離せないな、
いろんな意味で」

どの女のコだって、オレにべったりついて
きたのに。うれしそうにでれでれオレの顔を
見上げて。目が合うと急に恥ずかしそうに下

むいて。

でも、かをりちゃんは、いろんなものに^ひ惹かれてしまう。オレのファンだと言ってた.....なのにその足でコンサートホールに^か駆けこんで、いきなりヴァイオリンを^ひ弾き、突然^{とつ}公生^{ぜん}をピアノ伴奏者^{ばんそうしや}に指名し、オレと椿も巻きこんで、公生とふたり、練習をはじめ

「かをりちゃん」

^{さが}捜すと、かをりちゃんは、^{こわ}壊れかけたベンチの裏^{まえ}にいた。以前に誰^{だれ}かからもらったのか、くわえていたチキンを^{しばふ}芝生に置いて食べる二匹^{ひき}の猫^{ねこ}に、自分の体で日陰^{ひかげ}を作っ

ていた。「お日様^{つゆ}が出てきた、暑いよねー。もう梅雨^あ明けかなあ」

緑の芝に、オレとかをりちゃんの影^{かげ}が落

ち、すぐに日がかげって消えた。

かをりちゃんが、空を見上げる。オレもつ
られてふり仰^{あお}いだ。にぶい色をした雲の流れ
は速い。

「まだ雲多いか……」

まぶしそうに手をかざす、かをりちゃん。

そう言っている間にも、猫^{ねこ}たちはチキンを食べ
終えてどこかへ去る。

「あーっ、ニャンコちゃん、いなくなっ
ちゃったあ。なでたかったなあ、もふもふっ
て」

「猫ならいっぱいいるって。クレープ、さす
がにそろそろやばいよ……売り切れる」

「そうだった！」

オレたちは、クレープ屋台を目指した……
はずなのに。

校舎に囲まれた広場にさしかかったら、音
楽が聞こえてきた。さっきの器楽部だ。

「体験演奏で一す、どなたか、いかがです
か？」

「私たちとワン・オン・ワンで演奏勝負して、より多くの拍手はくしゅをもらったら、こちらのグッズをさしあげまーす」

路上ライブのように周囲を観客に囲まれて、ビールケースとベニヤ板で作った低い即席せきステージの上では、何人かがアコースティックの弦楽器げんがつきや管楽器かかを手になっている。さしあげます、と掲げているのは、ミニタオルハンカチやノートなど、この大学のスクールカラーで彩いろどられたオリジナルグッズだ。

「あれ、欲しい！」

かをりちゃんが、ストラップ兼イヤホンジャックになる小さなフィギュアに目を留めた。

「えっ、びみょーなやつだろ、この大学のゆるキャラ……生協で売ってるよ？」

「勝ち取ってこそ、価値があるのよ！」
言うが早いか、かをりちゃんは背中から自

分のピンクのヴァイオリンケースを降ろしながら、

「はいはい、私、チャレンジしまーす」

と、観客をかき分けて行ってしまった。オレもあわてて、観客の輪のいちばん前へ出る。

スカートのプリーツをひらっとさせてステージに飛び乗り、かをりちゃんは左手で自分のヴァイオリンのネック.....

な、細い先^かつちよをつかんで高々と掲げた。右手には棒.....

弓.....^ひだっけ、弾くヤツを持っている。

司会の男子学生が、甲高い声^{かんだか}を上げた。

「おお、マイ楽器ですかっ！　これは強敵出現ですねえ。ではうちの部長がお相手いたし

ましょう。古川先輩、お願いします！」
^{ふるかわせんぱい}

ヴァイオリンを手に、ステージの後ろから、黒っぽいワンピース姿の女子学生が現れた。なかなかきれいなおね一さんだ。

おね一さんは司会からマイクを任され、ま

ずはかをりちゃんと握手した。そして、説明する。

「高校生？　中学生かな？　曲はチャレンジ

するあなたが指定できます。ただし、無伴奏

ですので、ご了承^{りようしょう}ください。楽譜^{がくふ}は、ある程度こちらにも用意がありますが、なかったら暗譜^ひというのも、ご了解を。わたしたちも

暗譜^ひで弾きます。では、曲名をどうぞ」

マイクをむけられたかをりちゃんは、少しまじめな顔になり、こう答えた。

「フリッツ・クライスラーの『愛の喜び』です。暗譜で」

「名曲ですね。どうしてその曲を？」

「ある人とふたりで弾きたかったんですけど、今のその人には『悲しみ』のほうがふさわしかったから、そちらをその人と弾くことにしたんです。でも私には、『喜び』の気持ち^ひがあるから、これは私ひとりで弾きます」

答えるかをりちゃんの瞳が、強い光に満ち

ていた。遠くをしつかりと見すえている。
（愛のなんちゃら……ふたりで弾く……それって、もしかして？）

「『愛の喜び』と『愛の悲しみ』、ペアになっている曲ですね。どちらもすてきな曲ですよねえ。わかりました、では、あなたからどうぞ」

ワンピースのおねーさんは、ステージの後ろへ下がった。

かをりちゃんは大きく二回息を吸い、何やら唱えたようだ。ステージの真ん中に出て一

礼すると、真剣しんけんな様子でヴァイオリンひだりを左肩かたに載せ、弓をかまえた。

観客が静まり、彼女に注目する。不意に遠くかのじよのほうのざわめきが耳に障る。呼びこみの声、呼びだしアナウンス、ダンス音楽。

そんな騒々そうぞうしさを打ち破り、かをりちゃんのヴァイオリンが鳴った。

ちゃっちゃちゃ一ん、ちゃらら、ちゃらら

らら一ん。ちやらら、ちやらら、ちやら
ら.....。

そんなかんじの楽しい曲だ。

(なんだ、公生と練習してる曲じゃないな)

公生と練習してるのとは、かなりイメージ

ちが

き

けっ

の違う曲で、どこかで聴いたことがある。結

こん ひ ろう えん かん ぱい

婚披露宴で乾杯のあとに流れる曲ってイメー

ジ。

げん

はず

弦が歌い、音が弾み、体全体でリズムを取

り、ポニーテールの先をゆらして、かをり

ひび

ちゃんは楽しそうにヴァイオリンを響かせ

る。

し だい

観客も次第に、演奏にノリはじめる。曲に

合わせて体を小さくゆらす人、指でリズムを

取る人、目を閉じてうつとりする人。

かをりちゃんのヴァイオリンの音は、とっ

むね

おくそこ

し

てもよく響いて、きれいだ。胸の奥底まで染

す どお

はだ

みこんでくる。耳を素通りしてゆかない。肌

の^{うわ}上^{つら}っ面^きだけなでてゆかない。

クラシック音楽なんてめったに聴かないオレにだって、がつんと心に響く深い音が出てるってわかるくらい上手だった。

ちゃらっらー、ちゃん！

ヴァイオリンの最後の音の響きが、雲の間から光の柱が落ちる空へ、吸われていった。

一瞬^{いつしゆん}、時間が止まったように静かになった観客^{ぱく}たちは、一拍^{せいだい}置いて盛大な拍手^{はくしゅ}を贈^{おく}った。沸^わき起^おこるというのがふさわしい、大きな拍手だった。

「ブラボーっ」と叫^{さけ}ぶおじさんがいる。力をこめて大きな身振^{みぶ}りで手をたたく子どもがいる。

かをりちゃんはほつぺたをピンクに染めながら、深く礼をした。

拍手しながら、黒っぽいワンピースのおね一^{くしょう}さんが近づいてくる。苦笑^{くしょう}ぎみにコメ

ントした。

「これはもう、わたしの負けです。わたしは
^ひ弾かないほうがいいでしょう。ありがとうございました
ございました、本当にすばらしい演奏でした
ね」

かをりちゃんは、ちよつとむくれた。

「^ひ弾かないって、そんなのずるいですよ。一
^{しよ}緒に弾きませんか？ ほら、^{みな}皆さんも！」

楽器を手にステージの隅や^{すみ}下にいた器楽部
員を、かをりちゃんは熱心^{さそ}に誘って、次々に
ステージへ上げた。

「^{がく ふ}合奏の楽譜、何かないですか？ みんなで
楽しみましょ！」

そして、「も一つあるとのなんとか」とい
う曲をみんなで弾きはじめる。^き聴いたことが
ある……^{せいそう}小学校のころ、清掃時間を^{しら}報せる校
内放送で使ってた……タイトルは知らない。

せいだい

はくしゅ

また盛大な拍手をもらい、アンコールまで

もど

弾いて、かをりちゃんはやつと戻ってきた。
アンコールは、オレでもわかる「きらきら
星」だった。だいぶアレンジしていたけど。
「おもしろかった一つ」

ふ

手に入れたゆるキャラグッズを振りかざし
ながら、かをりちゃんはオレのところへ戻っ
てきた。

「生きてるってすばらしい！　楽しいことが
いっぱい」

え　がお

かがや

笑顔が白く輝いて、まぶしい。

ん？　と、不意にかをりちゃんは、あごに
人さし指を当てて考える。

「何、するんだっけ、次」

「クレープ」

「そう！　クレープ！　イチゴのクレープ、
あるかな」

「急がないとなくなると言うよ？」

「大変、行こっ、渡君！」

「ああ」

走りだしたオレに、人混みをうまくよけられ
ないかをりちゃんが遅れる。かばっている
のが背中ヴァイオリンだと気づき、オレは
ヴァイオリンケースを持ってあげようとした
けれど、さりげなく拒否された。

オレはかをりちゃんの手を取った。
「……ごめん、いい？」

少し冷たい手だった。触れるのは初めて
で……なんだか、罪悪感が心の隅に小さく湧
く。それは黒くて小さな染みになった。

かをりちゃんは、安易に触れていいような
女のコだって気がしなかったんだ、なぜか。



かをりちゃんの手を引いて、やつと、オレ
たちは姉貴のサークルの屋台にたどりつい
た。姉貴が待ちかまえていた。にらまれて、
あわててオレは手を放す。

「亮太、遅い。もう店じまいしちゃうよ。あんたの分、キープしといたんだからね、感謝しな」

なんだかんだいって、姉貴は優しいのかもしれない。

「もう、やきもきしたじゃない、いくらLINE入れてもスルーだし」

かをりちゃんのすばらしい演奏を聴くほうが大事だろ。

姉貴は、「誰？」とオレに訊きたそうなかかをりちゃんに、愛想笑いをすると、オレを物陰に引きずっていった。

「ちよつと、最後のコがいちばんかわいいじゃない。本命？」

「誰が本命とかって、それはみんなに失礼だよ。みんなかわいいんだ」

「.....亮太らしいね」

姉貴はオレを突き放し、いったん屋台へ戻

ると、イチゴと生クリームのカレープ、フルーツミックスの缶詰と生クリームのカレープ、それぞれチョコレートソースがかかったものを、紙皿に載せて運んできた。ちよつとぺちやつとつぶれていて、素人の屋台じゃこんなものかな、というできだ。

「はい、もうこれしかないから。文句言わない」

オレがさしだす二枚の券と四百円を受け取り、姉貴はさっさといなくなってしまった。「ふう、イチゴ、残っててよかった」

待ちかねているかをりちゃんのもとへ戻り、空いている手近なベンチにふたり並んで腰かける。

「オレのおごり。遠慮なく食べて」
「イチゴ！　うれしいっ。本当にありがとう、渡君」

かをりちゃんはカレープをほおばり、心からうれしそうな表情をした。ぱくぱくと、た

ちまち食べてしまう。

「もうひとつも食べていいよ」

「ホントに？　どうもありがとうっ」

遠慮なくフルーツミックスのクレープを一口かじったかをりちゃんは、そこで手を止めた。

「.....やっぱり、ふたつは多かった？」

オレが心配して^{たず}尋ねると、かをりちゃんは^ふかぶりを振った。

「ううん.....一気に食べたら、なくなっちゃうよね。もっと楽しんで、味わわないと」

「なら、いいけど」

手を止めたかをりちゃんは、ぼんやりと青^{あお}鈍色^{にびいろ}の雲間から降りる白い光の柱をながめている。

「あれね、天使のはしごっていうんだって。

あれが出ているときは、天国から天使が^{たましい}魂^{むか}を迎えに来てるって。.....きれいすぎて、悲しいね」

「は……あ？」

……かをりちゃんは、オレの顔をながめたりしない。ほかの女の^はコみたいに、うつとり、と。あるいは、^は恥ずかしそうにいつも下をむいていたりも、しない。

どこか、全然、別の、^{ちが}違うところを見ている。

ほかの、オレを好きな女の^はコ、とは違っている。

（でも……有馬公生のことは見てるんだ。アイコンタクトを取ったり、じっと見つめていたり。そのくらい、気づいてたよ。とつくに）

……最初から。

「あのさ、かをりちゃん。さっきのヴァイオリンの曲、なんてんだ？ あれも『愛のなんちゃら』とか言わなかった？」

——『ある人^ひとふたりで弾きたかつたんですけど』

（ある人って、きっと、公生のことだ）

あ、うん、とかをりちゃんはうなずいた。
遠くを見たまま、答える。

「『愛の喜び』。今練習してる曲とペアだっ
て言われてる、同じ人が作った曲。練習して
るのは『愛の悲しみ』ね」

「ふうん。確かに、公生と弾^ひいてるのは、
ちよつと悲しい曲かなあ.....今日のほうが明
るいかんじの曲だった」

「.....百年くらい前、この曲を作ったクライ
スラーはね、最初、自分が作ったんだって、
言わなかったの。クライスラーは作曲家であ
ると同時に、とても人気のある演奏家で、ス
テージに立っただけで、弾く前から観客が幸
せな気分になったと言い伝えられてるんだっ
て。

それで、アンコールのために、『愛の喜
び』や『愛の悲しみ』のような三分半くらい
の短い曲を用意したんだけど、『ウィーンの
図書館で古い楽譜^{がくふ}を見つけた。たぶん昔のダ
ンスの曲で、これで若い男女が踊^{おど}り、恋に落^{こい}

ちたんだろう』みたいな設定にしたみたい。

どんな曲も、物語があつたほうが喜ばれる
のよ。アルファベットと数字が割り当てられ
ただけの作品番号じゃなくて、『運命』とか

つうしょう

『田園』とか通称があつたほうがイメージ

わ

おぼ

が湧くし、エピソードがあつたほうが憶えら

かたおも

ささ

れやすい。『片想いの相手の少女に捧げたけ

ちが

ふ

ど、相手は貴族で、身分違いで振られた』と

かね」

かをりちゃんは、すらすらと語る。

だれ

ずっと誰かにしゃべりたかつたかのよう
に。

「でも、二十数年後、ある新聞記者が調べ
て、そんな曲はウィーンに存在しない、クラ
イスラーのでつちあげだ、みたいなスクープ
をしたんだって。そしたらクライスラーはす
ごく怒つたの。あんまり怒らない人らしかつ
たんだけど。

おこ

物語を作りだし、人々に夢を見て楽しんで

もらう、そのどこが悪いんだって、言いた
かつたんだと思う。たとえ嘘^{うそ}についても楽しま
せるのが.....美しい嘘で夢を見せるのが、芸
術家、エンターテイナーよ」

「なんとなく、言いたいことはわかるよ」
（現実よりも美しい夢って、生きるのに必要
だよな、たぶん）

「で、かをりちゃん、その夢のある曲を、公
生^ひと弾くことにしたんだ」

「.....見つけちゃったから」

かをりちゃんはひとりでほほえんだ。
ちょっぴりさびしそうに、けれど、誇^{ほこ}らしげ
に。

「どこで？」

「椿ちゃんに聞^{かれ}かなかった？　　びしょぬれに
なっちゃって、彼のおうちに寄ったの、服を
乾^{かわ}かしてくれるって言うから。それで、ほこ
りだらけのピアノの上に、やっぱりほこりを
かぶって『愛の喜び』と『愛の悲しみ』、両

方があった。でも『悲しみ』のほうが、ずっと使いこまれてた。どうしてか知らないけど」

「公生が好きな曲ってこと？」

かをりちゃんはかぶりを振った。

「好きかどうか、知らない。でも、弾いてほしい。……私の好きな『喜び』じゃなく、彼が知る『悲しみ』のほうを、一緒に弾きたいって思ったのよ。彼のどんな解釈でもかまわないから、彼の弾きたい調べに合わせて」

（ピアノ伴奏は、好き勝手に弾くヴァイオリンにきっちり合わせてついてただけだって、公生は言ってなかったか？）

「……かをりちゃんは……好きなんだね、公生……の弾く音楽が」

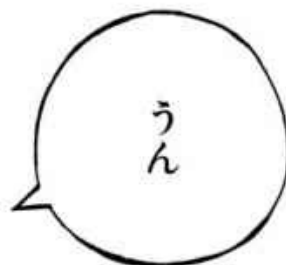
少し、胸が苦しくなった。公生自身を好きなのか、と訊けなかった。

「うん、好きだよ。みんな、みんな、大好き。生きていて、好きなことがいっぱいあって、それがうれしくてたまらない。ヴァイオリンが弾けることも、聴^きいてくれたお客さんが拍手^{はくしゅ}してくれることも、クレープがあることも」

もう一口クレープを食べてから、かをりちゃんは空へむけて、両手を広げた。その瞳^{ひとみ}がゆれていた。きらきら輝^{かがや}いているけれど、どこか、ゆれていて.....。

「毎日が、大好き。何もかも好き」

オレは、かをりちゃんの特別には入っていない、そう感じた。その「何もかも好き」には入っているかもしれないけれど、ほかと比べて特別ってことはない。



渡君も
好き



えっ!?

やっぱり



それって
ズルイよ



私
いま
が
幸せ

だって本当
だもん



みんな好き



椿ちゃんも

柏木さんも

せつちゃんも

たかポンも

お父さんも
お母さんも

（そりやそうだろう。オレがかをりちゃんを

とくべつあつか

特別扱いしてないんだし）

でも……公生は……かをりちゃんにとって、特別なんだろう。

初めからかをりちゃんは、公生の手を取っ
ていた。四月の花吹雪はな ふぶきの下、コンサートホールへむかうとき。ちゃんとまっすぐに見ていたし。

公生と違ちがって、オレはピアノなんて弾ひけない。クラシック音楽も全然わかんないし。かをりちゃんとの共通の話題は公生か椿のこ
とくらいだし。

公生のほうがきつと、ずっと、かをりちゃんを楽しませ、幸せにできると思う。オレはかをりちゃんに、幸せに笑っていてもらいたい。

あま

ねこ

甘いものを食べて笑って、猫追いかけて笑っ
て、すごく気持ちよさそうに美しい響ひびきで
ヴァイオリンを響かせていてほしい、いつま

でも。

「かをりちゃん、公生と練習できるのも、うれしいんだ？」

「うん」

かをりちゃんが、いまさらオレを見つめて、はつきりとうなずいた。

「あのさ.....公生は、男なんだ」

「え？ 知ってるよ？」

「.....知ってればいいよ」

（どういう意味で知ってるかは、また別だけど）

あいつは、小学六年でお母さんを亡^なくし、
中学二年を終えるまで、ずっとずっと抜け殻^{ぬ がら}だった。

それが、中学三年の四月にかをりちゃんと出会ってから、ちゃんと生きてる。

かをりちゃんのことを考えて、振り回^{ふ まわ}されてもいやがらずに、ついていつてる。

（あいつは.....男なんだ。女のコをひとり、

大切にできる男だ。男になった)

「男」の意味について.....そう言おうか迷い、オレはやめた。

そんなの、公生が自分で伝えればいいことだ。必要だと思ったときに。自分の言葉で。

それまで、かをりちゃんは知らなくていい。

「公生とかをりちゃんが親しくなつて、よかったと思ってるよ、オレは」

オレが心からそう言くと、かをり^えちゃん^うは、オレにむき合つてきれいな笑みを浮かべた。ほつぺたにクレープの生クリームをつけたままで。

そのとき雲が切れ、うすい光が、かをりちゃんの上に降りそそいだ。かをりちゃんの色^{かみ}のうすい髪^{かがや}が輝きに縁^{ふち}取^どられ、とても印象的だった。

「ありがとう、渡君、そう言ってもらうと.....ほつとする。本当にありがとうね」

このときのかをりちゃんは、忘れがたいほど、きれいだったんだよなあ。

「お礼！」

いきなり、かじりかけのクレープの残りを
半分手でちぎり、オレの口にお押しこむ。

（甘っ。残ってたチョコレートソース、中に
全部ぶちまけてるだろ、これ）

オレの表情を見て笑い転げるかをりちゃん
の声の響き、白い光の柱、彼女ひとりだけが
作りだしたヴァイオリンの音色の記憶、そして
チョコとクリームの甘さとわずかなほろ苦
さが混じり合い、オレの胸の奥にこびりついて——
今も忘れられない。

エ
ピ
ロ
ー
グ



君
は
す
ご
い

宮園みやぞの
かをり

音楽室に、君と私、ふたりが残された。
「さあ、練習再開よ！　今度こそ、ピアノの
テンポがずれないようにしてね。初めはタ

ン、タツ、タツ、タン、タツ、タツ。ポー
コ・リタルダンド（少しだけゆっくりと遅く
する）から、タァン、タァ、タァ。で、こん
なふうにおそ遅くしていつて、テンポ・プリモ
（初めのテンポに戻る）で、初めのタン、
タツ、タツ」

私は指で譜面台の縁をたたいた。

「うん、たしかに、そのテンポを君が守って
ヴァイオリンを弾ければ、問題なくなるよ
ね」

ピアノのいすに腰かけながら、ぽつつ、と
君がつぶやく。

「うう……だいたい合ってるでしょ？」

すると、君はすまして返した。

「だいたい、だと僕ぼくのピアノとなかなか合わ
ないんだよ？　僕は譜面に書かれた音符おんぷの長
さにきちんと合わせて、テンポを決めてるん
だし」

「何よ、私がリズム感悪いって言うの？」

わかった、と私は、教卓の上に置いたCDプレイヤーに近づいた。

「どっちがリズム感が悪いか、踊って決めよう。君はメトロノームみたいに正確だけど、

微妙なゆれみたいな細やかさが足りない

し、だいたい、頭でつかちの理屈ばかりで、全身でリズムを感じてないでしょ」

用意してきたCDをプレイヤーの横から取りあげる。私もまだこれを聴いてなくて、わくわくする。

「なんのCD？」

「『愛の悲しみ』。ヴァイオリン演奏、フリッツ・クライスラー。作曲者ご本人」

君は目を丸くした。

「演奏家だったのは知ってるけど、録音が入るんだ？ そりゃ、二十世紀入ってから

活躍した人だから、エジソンよりもあとだし、録音装置はあっただろうけど.....レコー

ド原盤かなんかのリマスター？」

「そう。古い録音なら百年くらい前のからCDあるけど、これはわりと新しい一九三八年の録音。なんと、たったの二百円、三つ先の駅前大型スーパーのワゴンセールで！」



「愛^{あい}の悲^{かな}しみ」

クライスラー

F.Kreisler
LIEBESLEID

F. クライスラー
愛の悲しみ

私は君に歩み寄り、C D ケースの値札シールを、よく見えるよう突きだした。透明なパッケージに貼られている。続けて、私はパッケージを破った。

「.....売れ残りの処分品？　ありがたみがないなあ」

くしょう
苦笑される。

「いいの。価値の判らない人たちのことはほっといて、私たちには、神に等しい演奏よ。作曲者の譜面に書いた指示が絶対なら、そのご本人が指示どおりに弾いていたか、確かめようじゃないの」

C D をプレイヤーにセットして再生ボタンを押し、私は「愛の悲しみ」を選曲した。

ノイズ混じりの、やや響きの欠けたヴァイオリンの音色が、流れだす。

おど
「さ、踊りましょ。全身で、君の言う『譜面

が指示』したテンポを^{ため}試す。体で感じてみるの」

私は手をさし伸べたけれど、君は^のやんわりと、おだやかに^{きよひ}拒否する。

「何も踊らなくたって、^き聴けばわかるじゃないか」

「これはダンスの曲として生まれたらしいっていう、作曲者の考えた設定があるの。私たちはウイーンのお城でワルツを踊ったことはないけど、踊れないわけじゃない。さあ！」

でも君は、あいまいに笑うだけで、いすから立とうとしなかった。

「いいよ、もう。私が踊るから、見てて」

私は頭出しボタンを押して、曲を再生しなおすと、^{おど}踊りはじめた。気ままに、思いつくま^のまに、手足を伸ばして踊る。

もの悲しいメロディ、ワルツみたいな^{さん}三

^{びょうし}拍子のリズム、かすかにノイズが混じった

ノスタルジックな音色。

ふ めん

譜面の指示は、一秒間にいくつ、一分間に何百、とりズムを刻めとは言っていない。

『レントラーのテンポではじめ、エスプレッシーヴォ（表情豊かに）、思いをこめて過去の愛を回想したら感情があふれてきて、だんだんとゆつくり、グラツィオーソ（優美

もど

に）。そして最初の速さに戻る。それをくり返す』——これが譜面の指示の全てだ。

レントラーは、オーストリアとその周辺の三拍子の古いダンス・ミュージック。どんな速さだったのか、私は本物のレントラーを聴いたことがない。きっと、民謡のようにのんびりしたかんじだと思う。ワルツが流行ったら、テンポが遅めだったレントラーは衰退したという。

だれ おぼ

ほろ

古くて、誰も憶えていない、昔の、滅びた音楽のテンポで演奏しろという、作曲者が譜面に残した指示。

だったら、一秒間にいくつなんて、テンポにしばらくなくていいのに。

表情豊かに、感情をこめて、優美に、そういった指示にだけ従えばいいし、好きなテンポで音を奏でたらいいじゃない。

私はくるり、くるり、と優雅につま先でターンし、最後にポーズを決めた。

君が拍手してくれた。

「すてきだね」

「ありがとう」

おじぎをして、顔を起こすと、君はもうピアノにむかっていた。両手を鍵盤の上でかまえている。長い指。

「どんなテンポか、わかったよ。作曲者本人が演奏したテンポで弾けばいいんだね」

そして、ピアノを弾きはじめた。CDのテンポとまったく同じ、いやになるくらい正確な再現だ。

「さあ、弾いて、ヴァイオリン。このテンポ

で」

君の指示に私はあきれながら、机の上に置いてあったヴァイオリンを手にとった。

C Dで聴^きいたイメージに重ねて、弦^{げん}を鳴らす。

全身の内側に弦の音^{ひび}が響^しく。染みてくる。

（あ……だんだん、君のピアノと、私のヴァイオリンの音がかみ合ってくる。

君はすごいね。私がいちばん心地よいテンポを、もうつかんだ。

気持ちいいね、君のピアノは。

だから、私は思いつきり、弾^ひきたくなっちゃうんだけどな。

本当に、君はすごいね。

君と演奏できて、よかった。

君のピアノに音を重ねられて、うれしい。楽しい。ドキドキする。

こんなに、胸^{はず}が弾む。苦しいくらい。

君は、すごい。すごいんだよ）



あとがき

音楽が聴^きこえてくる物語を、いつか書いて
みたいと思っていました。

『四月は君の嘘^{うそ}』ノベライズ^{あた}の機会を与えて
くださった皆^{みな}様に、感謝申しあげます。原作
はとても美しく、切なく、痛みと甘^{あま}さと苦さ
のある物語で、惹^ひきこまれました。

とはいえ、音を文字で表現する、というの
は難しいことです。執筆^{しっぴつ}の前に、編集長さん
が私を見つめて、こうお尋^{たず}ねになりました。

「音楽を、音の響^{ひび}きをどう表現するつもりで
すか？」

イメージ優先の抽^{ちゆう}象^{しやう}的な表現ばかりでな
く、できるだけ具体的な、音楽を言葉や数値
でロジカルに理解しているキャラを書きたい

です、というようなことを答えたとき記憶しております。

じょじょうてき

あえて、叙情的ではない面も書くことで、よりリリカルさをう た浮き立たせようと。

果たして、力をつ ふ は ら尽くしてそれがかなったかどうか、不安を振り払いつつ、この本を皆様みなさまのつ つ し前に謹んでさしだしたいと思います。

ピアノというのは、たぶん、習った経験があるかたも多いと思います。私自身、子どものころは習っておりました。

ツエルニー練習曲集のつまらなさに挫折ざ せ つし、高校受験という理由でやめた口です。プロの演奏家どころか、ピアノを弾く機会のある職業につくつもりもなかったのです。

弾けるベートーヴェンは「エリーゼのために」だけ、弾けるモーツァルトは「トルコ行進曲」だけ、ショパンなんて無理無理、そん

なレベルです。

しゅ み

それからしばらくは趣味で、休日にアニメ
ソングなど気ままに弾いていましたが、就職
したら、忙しさにかまけ、いつのまにかピアノ
のふたを開けることはなくなっていました
た。

今回、本当に久々に、実家のアツプライト
ピアノを弾いてみました。家族が弾いている
のと、毎年調律してもらっているのとで、ピ
アノ自体は現役です。

げん えき

作中にも登場させた、グノーの「アヴェ・
マリア」の伴奏曲として有名なバッハの平
均律クラヴィーア曲集第1巻第1番、これな
らなんとか初見で弾けるだろうと、楽譜を載
せて。

がく ふ の

たどたどしいけれど弾けたので、ちょっぴ
り満足しました。指が憶えているものだな
あ、と。

おぼ

今までいくつも、さまざまなことに挑戦するキャラをノベライズで書いてきたのですが、たいてい私には経験がなく、取材を重ねて脳内で想像して書いてきました。

はん ぱ

しかし今回は、半端な経験や知識がへたにあるためか、パソコンのキーボードを叩くだけでは、どうにもうまい表現が浮かばず、手に入れたそれぞれの曲の楽譜を脇に広げ、指で机を叩く——「エアピアノ」を弾いてみないと先に進みませんでした。

う

がく ふ

わき

ひ

不思議な体験でした。アタマだけで小説は書けるとおこがましくも思っていたので、謙虚な気持ちになりました。

けん

きよ

じ まん

なお、エピローグで、かをりちゃんが自慢（？）しているCDは、私自身の実話です。ネットで探して、やっとのことでCDを手

に入れた三日後、作中に書いたように、処分
品のワゴンに入って目に飛びこんできたとき、私の脳内では、某・糸色望先生が「絶
望した！」と叫びました（笑）

確認すると、既に手に入っていたCDと録
音した年代が違ったので、もちろん買いまし
た。

原作でタイトルが挙がっている曲・アニメ
の中で使用と報された曲・私がこの小説の中
で入れたかった曲、全て、昔集めたCD（私
は、小説家になる以前はずっと、クラシック
系もよく歌う合唱をやっていたので、当時は
温いクラシックファンでした。コンクールと
いえば、合唱です）を家捜しして掘りだしたり
り、持っていなかったものは購入したりし
て、該当する曲を聴きながら原稿を書いたの
です。実は、音楽を聴きながら執筆をしたこ

とがなかったので、気持ちが改まるような思いをしました。

音楽は本当に好きでした。今でも心の奥^{おく}では好きです。特にクラシック音楽。

だから、音楽^きが聴こえてくる物語をいつか書いてみたいと思っていました。

けれど、私の興味は物語の創作に移り、それが仕事になり、生活の全てになっちゃって、音楽を聴くことはなくなっていました。

また、音楽を聴こうと、今は思っています。いつの日か、合唱も再開できたらいいなあ。

最後になりましたが、お世話になった関係者^{みなさま おんれい}の皆様に御礼申しあげます。

新川直司先生、月刊少年マガジン編集部^{かんしゅう}の方々、取材と監修^{おぐちえつこ}を引きうけてくださったピアノ講師の小口悦子様、担当様はじめ出版

じんりよく

に尽力してくださった皆様、導いてくださり、本当にありがとうございました。

何よりも、この物語を手にとってくださったあなたに、心から感謝いたします。

「愛の悲しみ」一九四二年クライスラー最後
の自演録音盤を聴きながら

ときうみ ゆ い

時海結以

参考図書一覧

『KREISLER Liebesleid für Violine und
Piano』 1910 SCHOTT MUSIK
INTERNATIONAL GmbH&Co. KG renewed
1938

『全訳ハノンピアノ教本』全音楽譜出版社出
版部編 全音楽譜出版社 1 9 5 5

『ピアノ・ピース・ギャラリー 9 月光ソ
ナタ』ドレミ楽譜出版社 編集部編著 ド
レミ楽譜出版社 2 0 1 0

『明解・実用楽典』澤野立次郎編 ドレミ
楽譜出版社 2 0 0 1

『クラシック音楽事典』戸口幸策監修 平
凡社 2 0 0 1

『新版 クラシックCDの名盤 演奏家篇』
宇野功芳・中野雄・福島章恭著 文藝春秋
2 0 0 9

『面白いほどよくわかるクラシックの名
曲100』山本友重監修 多田鏡子著 日

本文芸社 2 0 0 6

『コンクールでお会いしましょう——名演に
飽きた時代の原点』中村紘子著 中央公論
新社 2 0 0 3

★この作品はフィクションです。実在の人物、団体名等とは関係ありません。

著者：時海結以（ときうみ ゆい）
長野県生まれ。遺跡の発掘や歴史・民俗資料
の調査研究職にたずさわった後、2003年
ごう た ひめ
『業多姫』（富士見書房）で作家デビュー。
著書に『源氏物語 あさきゆめみし』（全5
巻）、『平家物語』『竹取物語』（以上、講
談社青い鳥文庫）、『小説 ちはやふる 中
学生編』（全4巻）（講談社）、『小説版
弱虫ペダル』（秋田書店）などがある。日本
児童文学者協会、日本民話の会所属。

原作者：新川直司（あらかわ なおし）
2007年『冷たい校舎の時は止まる』（原作／辻村深月）でデビュー。著作に『きよならフットボール』（全2巻）、『四月は君の嘘』（「月刊少年マガジン」連載中）（以上、講談社）がある。『四月は君の嘘』は、2014年10月よりアニメ放送が開始されている。

本作品は、二〇一四年十一月、小社より K C デラックスとして刊行されたものを電子書籍化したものです。

◎本電子書籍内の外部リンクに関して

ご利用の端末によっては、リンク機能が制限され正しく動作しない場合があります。また、リンク先のwebサイト、メールアドレス、電話番号は、事前のご連絡なく削除あるいは変更されることもございます。ご了承ください。

しょうせつ しがつ きみ うそ
小説 四月は君の嘘
にん
6人のエチュード

二〇一四年一月一日発行

ときうみ ゆ い
著者：時海結以

あらかわ なお し
原作：新川直司

©Yui Tokiumi/Naoshi Arakawa 2014

清水保雅
株式会社講談社
東京都文京区音羽二 - 一二 - 二一
〒112-8001

◎本電子書籍は、購入者個人の閲覧の目的のため
にのみ、ファイルの閲覧が許諾されています。
私的利用の範囲をこえる行為は著作権法上、禁
じられています。

14N1107E

01